

山梨県の前期古墳

山梨県立考古博物館 小林健二

はじめに

山梨県における古墳時代研究は、甲府盆地内の各小地域に分布する古墳群についての長年にわたる調査・研究の成果により、その変遷が明らかにされてきた。これまででも度々述べているが、近年の動向をもとにその特徴を言えば、前期はヤマト政権との強力なパートナーシップを築いていたことを示すかのような大型前方後円墳の時代、中期は帆立貝式古墳をはじめとする中・小規模な墳墓の時代、そして後期・終末期は大型横穴式石室墳と群集墳の時代、という流れで捉えることができる。

このうち、前期古墳については、甲府盆地の南東縁、東西12kmに連なる曾根丘陵の一角、甲府市の中道古墳群（東山古墳群・米倉山古墳群・金沢古墳群ほか旧中道町にある古墳群の総称）を主要な舞台として、各古墳の立地から変遷に至る過程や歴史的背景など、これまで様々な検討が行われてきた。

本稿では、まず、時間軸となる甲府盆地を中心とする古墳時代前期の土器編年について概観する。その上で、山梨県の前期古墳について近年の動向を踏まえながら改めて見ていくたい。

1 山梨県の古墳前期土器編年の概要

筆者はこれまで、甲府盆地におけるS字甕の波及と定着をもとに、1993年（平成5）に「新潟シンポ編年」（小林1993）を設定した。その後、東海系土器の波及と定着、画期や交流について検討し、弥生終末期との画期を再評価した上で前期の土器を古墳I期から古墳IV期に編年した（小林1998）。その後、北陸系の波及についても取り上げ（小林1999）、ピンポイントではあるが畿内系叩き甕の様相にも触れた（小林2006a）。2000年（平成12）以降は東海・北陸・近畿各地域との併行関係とともに細分・補正を行なながら（小林2000・2007）、2010年（平成22）には前期の編年（第1図）とともに、中期、後期・終末期の土器を加えた古墳V期～古墳XII期の編年も行い、甲府盆地の墳墓の変遷をトータルで提示した（小林2010）。近年ではさ

らにI期を出現期、II期～IV期を前期と再編し（小林2015b）、現在に至っている。

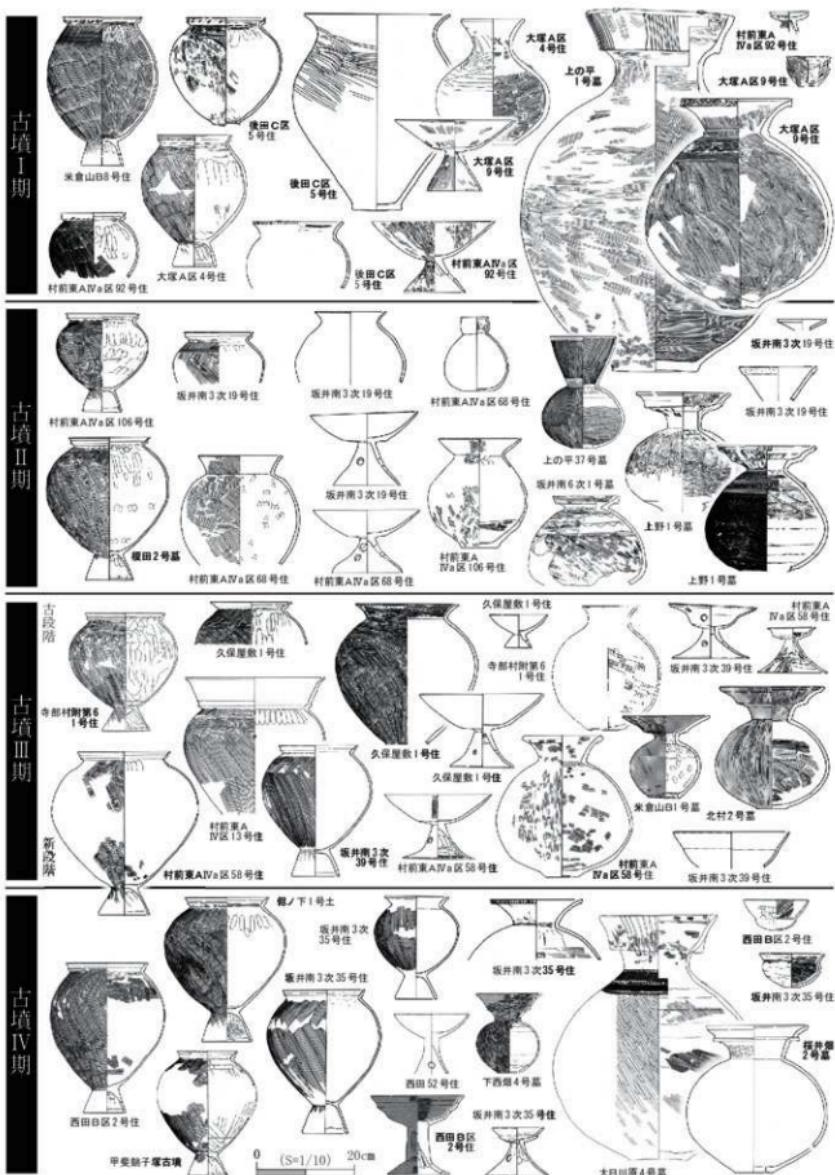
曆年代については、これまでの研究成果から従来の年代観を四半期ほど引き上げており、古墳I期は3世紀前半、古墳II期は3世紀中頃、古墳III期は3世紀第4四半期～4世紀第1四半期頃、そして古墳IV期は4世紀第2四半期頃となる。なお、墳墓の変遷図については随時加筆・修正を行っており、今回最新版を第2図に示した。

2 山梨県の前期古墳

S字甕の波及とともに甲斐の古墳時代は幕を開ける。古墳I期からII期前半頃にかけて、東海～関東各地では前方後方墳が出現するが、甲府盆地では出現期の古墳は見られず、中道地域では弥生終末期（2世紀後半）から120基を越える方形周溝墓の造墓活動が続いた甲府市上の平遺跡において、最大規模の1号方形周溝墓の造営でピークを迎える。

その上の平遺跡も、次の古墳II期のうちに終焉となり、新しい段階に入る。南に隣接する宮の上遺跡（第3図）で東海系加飾甕を模倣した甕が出土した9号方形周溝墓もこの段階のものであり、周溝墓は引き続き古墳III期まで営まれる。

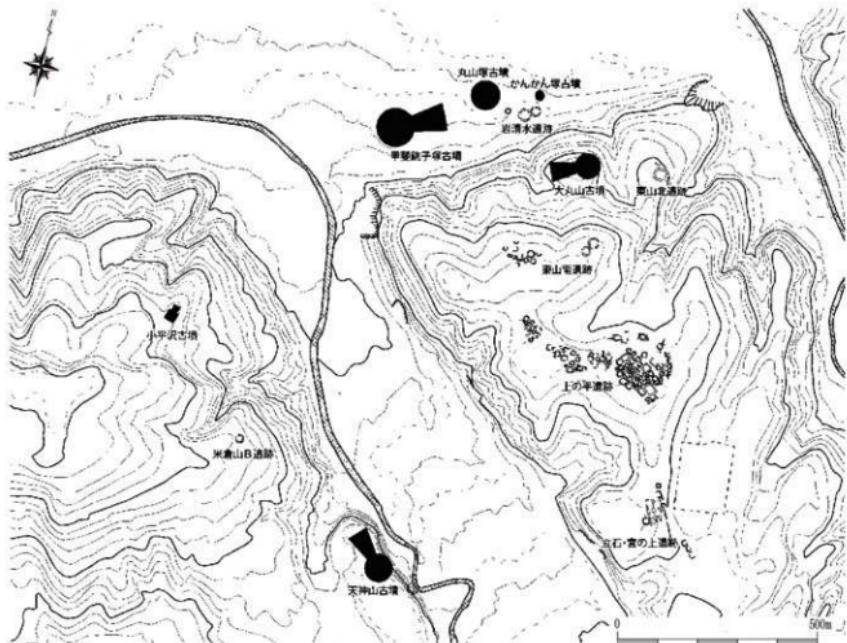
その甲斐III期になると、中道地域の米倉山に東国のある諸地域同様、前方後方墳の小平沢古墳（45m）が出現する。1947年（昭和22）に後方部から斜縁二神二獸鏡、勾玉、土師器片が発見され、1952年（昭和27）に発掘調査が実施されたが、埋葬施設の詳細は不明であった。その後、1978年（昭和53）の測量調査により県内唯一の前方後方墳と判断され、県内最古の古墳に位置付けられた（小林・里村1978）。2009年（平成21）に甲斐天神山古墳とともに、甲府市教育委員会による測量調査が行われているが（第4図）、依然として詳細な発掘調査は行われていない。しかし、かつて墳丘から発見されたS字甕の破片は、古墳III期古段階（3世紀第4四半期）を下るものではなく、時期決定の根拠となっている。その一方で、甲府盆地はS字甕を中心に東海系土器が卓越する地域であるにもかかわ



第1図 山梨県の古墳時代前期土器編年

		墳 墓									
土器 銅鏡 年	副葬品	坂本・明野 御上・荒井 高根・酒井 船形・甲内	豊富・三枝	中道	境川	八代	一宮・御坂	芦原・電王 荒井・河野	石和 森田沼	山梨・塩山	
古墳 I 期				■ 上の平1号墓 (30m)							
250	古墳日附	■ 長谷寺 6次1号墓 (12m) 坂井南 4号墓 (18m)		■ 上野1号墓 (24m)	■ 上の平3号墓 (10m) 宮の上 9号墓(3m)				■ チヤケ(11m)		
300	古墳古墳 埴輪新設 後後附	■ 北村 1号墓 (17m) ■ 北村 2号墓 (14m) ■ 大日川原 11号墓 (14m)		■ 小平1号墓 (45m) ■ 長谷寺B 1号墓 (17m) ■ 長谷寺 1号墓(3m)	■ 大丸山(120m)	SH10	■ 亀甲塚 (25m) (環状不規)	■ 横田4号墓 (12m) ■ 横井岱 1号墓(18m)	■ 下西相 1号墓(4m) ■ 武家・母墓 (10m)	■ 下西相 4号墓(13m) ■ ケチ子 GZ1(13m) ■ 西田 1号墓(2m)	
350	古墳 IV 期	■ 大日川原 4号墓 (12m)		■ 幸賀原 1号墓 (18m) ■ 真山北2号墓 (36m)	■ 幸賀原 1号墓 (18m)	■ 田子塚 (32m)		■ 横井岱 3号墓(33m)			
400	古墳 古墳 埴輪 新設 後附	■ 物見塚 (46m) ■ 大野美丹保 (36m)		● 丸山塚(72m)							
450	古墳 V 期	TG232 TG231 ON231		■ 貝冠原塚 (25m)	● 丸山塚B10号坑 (丸山塚B10号坑)	● 幸賀原 1号墓 (30m)					
500	古墳 VI 期	TK73 TK216		● 夏山南(B2)号墓 (25m) ● 夏山南(B1)号墓 (25m) ● 丸かん山 (茶臼)(25m) ● 夏山南(A2)号墓 1号墓(9m)	● 夏山 1号墳 (13m)	● 丸山 2号墳 (80m)	● 丸山 2号塚 (25m) ● 丸山 2号塚 (30m)	● 幸賀原2号墓 (12m) ● 丸山 2号塚 (26m) ● 丸山 4号墓 (8m)	● 大藏 経寺前 1号墳 (16m) ● 大藏 経寺中 3号墳 (28m)		
550	古墳 VII 期	TK225 TK47	● 六糸丘 (28m)	● 上野(20m) ● 高前子山平 (12m) ● 王塚(6m) ● 大塚 (50m)	● 三里塚1号 (45m) ● 長門神社(32m) ● 長谷山無名塚 (20m) ● 青云博物館境内 (15m)		● 庄塚 (28m)	● 弁慶塚(16m) ● 丸山 1号墳 (26m) ● 加半原塚 (45m)	● 桜塚-桜井 39号墳 (11m) ● 万寿森 (38m) ● 大塚 16m) ● 幸大 (17m)	● 大藏 経寺山 15号墳 (17m) ● 新室山 (環状不規)	
600	古墳 VIII 期	TK15 TK10		● おつき穴 (環状不規)	● 伊勢原 (36m)	● 地蔵塚 (35m)	● 古墳塚 (20m) ● 竹居 (16m)	● 四方塚 1号塚(12m) ● 1号塚 (20m) ● 細塚(12m) ● 長田20号墳 (25m) ● 千葉寺大塚 (17m) ● 圆分塚 (4号塚(20m))	● 二ツ塚 1号塚(22m) ● 1号塚 (16m) ● お井戸 (16m) ● 中路塚 (28m) ● 寺王 3号墳 (28m) ● 寺王 5号墳 (14m) ● 五度(号塚 (24m) ● 双葉(号塚 (28m)	● 徒羅 (20m) ● 天神塚 (20m) ● 佐原塚 3号墳 (8m) ● 寺の前 (20m) ● 大藏 経寺前 5号墳 (24m)	
650	古墳 IX 期	MT85 TK43	● 天王塚 (17m) ● 大塚 (10m) ● 温泉 2号塚 (10m)	● 上村 (10m)	● (ちやあ塚)(10m)		● 古墳塚 (20m) ● 竹居 (16m)				
700	古墳 X 期	TK209 TK217					● 古墳塚 (20m) ● 竹居 (16m)				
	古墳 XI 期	TK46 TK48					● 古墳塚 (20m) ● 竹居 (16m)				

第2図 山梨県の墳墓の変遷



第3図 東山・米森山地域の墳墓の分布

らず、前方後方形の周溝墓（墳丘墓）や出現期の前方後方墳が依然として確認されていない。周辺地域より遅れての前期古墳の「第1波」（水野 2014）について、この背景には、弥生時代後期以来の伝統的な方形周溝墓に固執した地域性が考えられ、この現象は中期まで大きな影響を与えることになる。

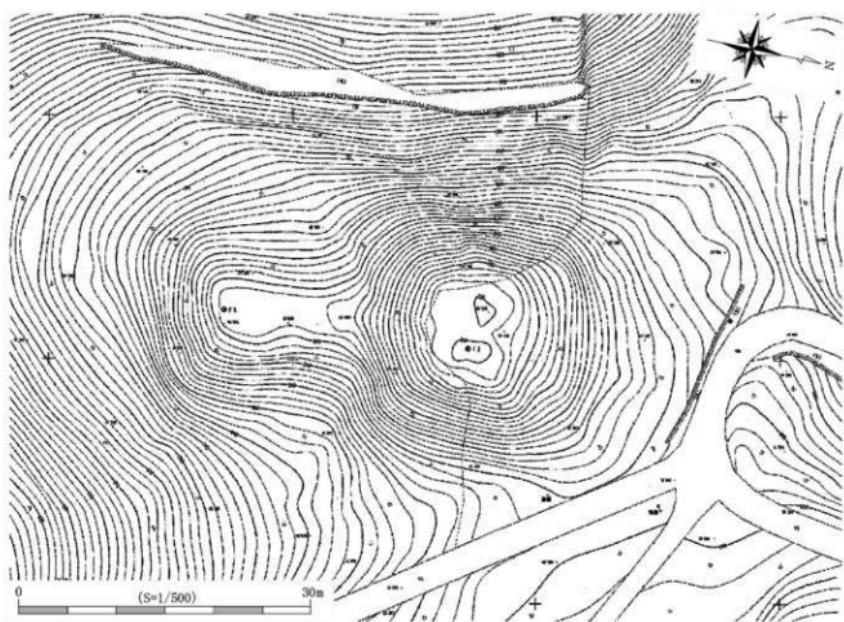
その後、甲斐IV期にかけて、甲斐天神山古墳・大丸山古墳・甲斐銚子塚古墳と3代の大型前方後円墳が相次いで築造される。

甲斐天神山古墳（第5図）は、県内第2位の規模（132m）を持ち、以前はくびれ部から出土したとされる土器器類から、長らく中期の前方後円墳と位置付けられてきたが（山本 1960・坂本 1978）、1990年代になり底部穿孔二重口縁壺の破片が採集されたことや古墳の立地から、前期に遡る前方後円墳の可能性が指摘されるようになった（車崎 1993・宮澤 1994）。その後、田中新史氏は自ら採集した二重口縁壺等の破片資料の実測図を紹介し、壺の型式が前期でも古い段階のものであることを各地の資料との比較から検証し、甲斐の古墳前期首長墓を小平沢古墳→甲斐天神山古墳→大丸

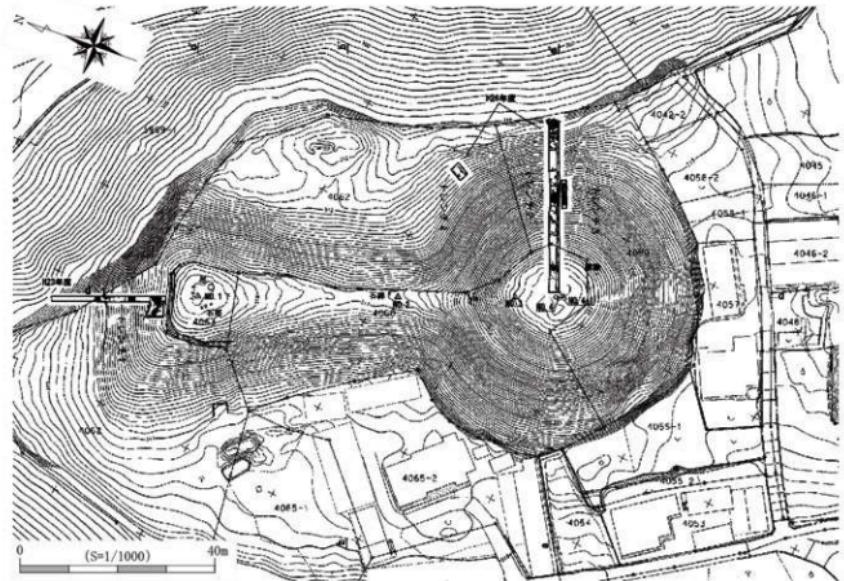
山古墳→甲斐銚子塚古墳という変遷とともに、甲斐天神山古墳を凡東国の中に位置付けた（田中 2002）。

2012年（平成24）と2014年（平成26）に実施された甲府市教育委員会による発掘調査（平塚 2015）において、前方部・後円部に設定したトレンチから底部穿孔二重口縁壺が出土した。これらは古墳III期中期（3世紀末～4世紀初頭）に位置付けられ（小林 2014a・2015a：第10図）。これにより、県内最古の前方後円墳として、前期古墳であることが確実となった。

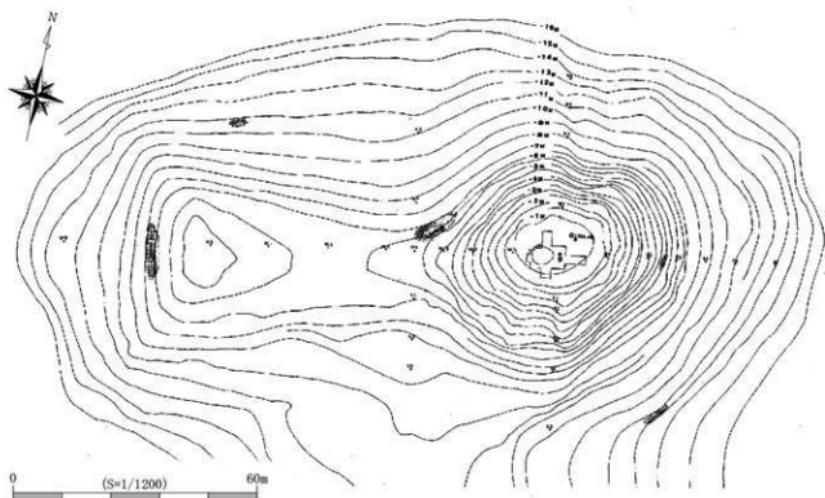
大丸山古墳（第6図・写真1）は、「二重構造の特異な埋葬施設」をもつ前方後円墳として、多くの出土品とともに古くから学界で知られている。1928年（昭和3）3月、偶然の機会に発見された甲斐銚子塚古墳の後円部の埋葬施設から多くの副葬品が出土した翌年、大丸山古墳の後円部の埋葬施設も地元住民によって発掘され、その後埋葬施設が「上下二段の構造」になっていることが初めて報告された（仁科 1931）。「下段」の組合式石棺から成人男女2体の遺骸とともに、花崗岩製の石枕、三角縁三神三獸鏡、画文帶環状乳三神三獸鏡、素文帶四乳八禽鏡、ガラス小玉、碧玉



第4図 小平沢古墳



第5図 甲斐天神山古墳



第6図 大丸山古墳

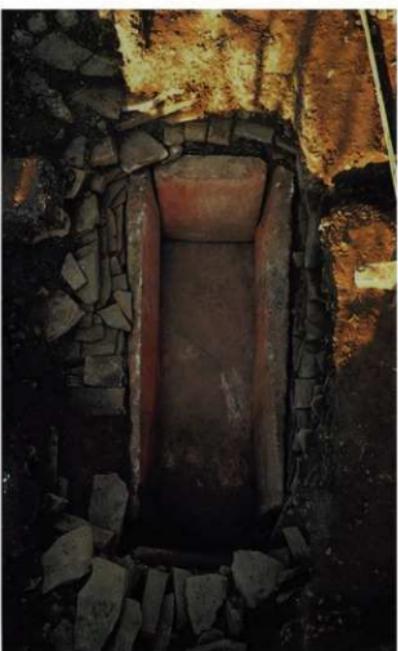
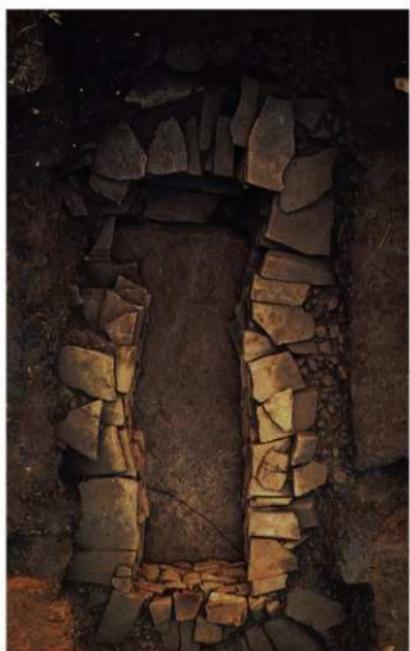


写真1 大丸山古墳の埋葬施設

製管玉などが、「上段」の竪穴式石室内からは鉄製柄付手斧、堅矧板皮綴短甲、鉄斧、鉄鎌、鎗、鎧、刀子、鎌、鉄劍、鉄刀など、豊富な副葬品が出土した。

一方、墳形についての記録はほとんどなかったが、1975年（昭和50）に発行された『中道町史』編纂事業の中で墳丘測量調査と主体部の精査が行われることとなり、1969年（昭和44）に墳丘の測量調査が、1971年（昭和46）の年末から新年にかけて埋葬施設の発掘調査が行われた。

築造時期については、埋葬施設の調査で出土した土師器はいずれも細片であり、埴輪もまったく確認されずおらず築造年代を決定づけるような資料ではなかったが、墳丘の型式が古い特徴を示していること、副葬品のうち鉄製柄付手斧、堅矧板皮綴短甲が最古型式のものであることから（宮澤1989）、現在では甲斐銚子塚古墳に先行すると考えられ、筆者は古墳Ⅲ期新段階（4世紀第1四半期）に位置付けている。墳丘は2段築成とみられるが、長さについては測量調査により、99m、120m、132mが考えられている。発掘調査が行われていないため確定していないが、筆者は測量調査時の葺石の存在を考慮した上で、120mとしている。

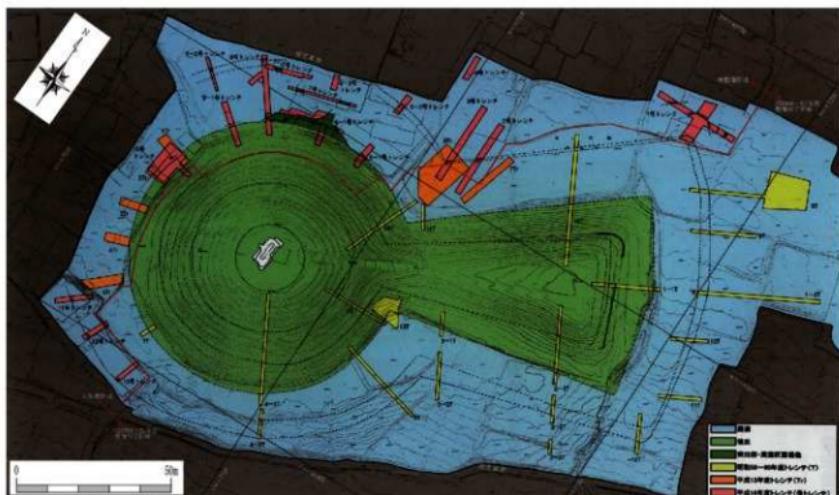
そして埋葬施設について、筆者は2007年（平成19）に刊行された調査報告書（茂木2007）を検討した結果、埋葬施設が從来からいわれているような「二重構造」ではなく、一連の工程の中で構築された「組合式石棺を納めた竪穴式石櫛」と考えるべきであることを述べた（小林2009）。墳丘長を含め、結論は今後の調査に委ねられるが、石枕とセットになった花崗岩製の組合式（長持形）石棺や精緻な作りの鉄製柄付手斧のような渡来系の工人によってもたらされたと思われる技術や製品（川西2004）が、甲斐銚子塚古墳の前段階において甲斐へ伝播していたことは、すでにこの地域が駿河・伊豆（静岡県）、信濃（長野県）、相模（神奈川県）を結ぶ流通ネットワークの要衝であったこと（白石2006）を示すものであり、豊富な鉄製農工具副葬の意義とともに、甲斐銚子塚古墳とは異なった埋葬内容をもつ大丸山古墳の重要性を改めて指摘した。

甲斐銚子塚古墳（第7図）は、山梨県最大の前方後円墳（169m）であり、発掘調査が最も進んでいる古墳である。1928年（昭和3）に竪穴式石櫛が発見され、多量の朱とともに内行花文鏡、三角縁神獸車馬鏡、三角縁三神三獸鏡、龜龍鏡、環状乳神獸鏡、碧玉製車輪石・石鉗、貝鉗、ヒスイ製・碧玉製・水晶製勾玉、緑色凝灰岩製管玉、杵形石製品、鉄劍、鉄刀、鉄斧、鉄

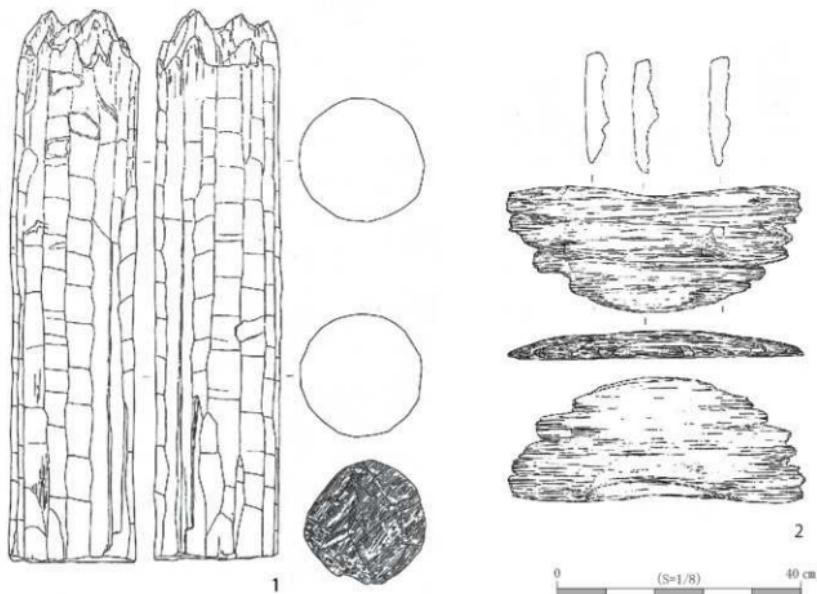
などが出土した。これら多くの副葬品及び割石小口積みの石櫛構造から、畿内との強い結びつきが指摘されるようになった。その後、史跡整備事業に伴い、これまで2次にわたり発掘調査が行われているが、中でも2004年度（平成16）に行われた第2次調査では、注目すべき発見が相次いだ（森原ほか2005・笠原ほか2008）。まず、後円部北側に東国の前期古墳では初めてとなる石敷きで造出状の「突出部」が発見され、この部分に取り付き、直交するように周濠内を横断する「渡り土手」、もしくは水位を調節する「区画堤」とみられる造構も部分的ではあるが確認された。また、同じ後円部北側の周濠内からは、全体の形状が復元できるS字甕が出土し、本古墳のこれまでの年代観（古墳IV期）をさらに補強するものとなった。

しかし、最も重要な発見は、葬送儀礼に関わる木製品が数多く出土したことである。後円部西側の墳端では、スギの巨木の辺材を加工した直径20cm、残存長90cmの木柱が埋設され樹立した状態で発見された（第8図1）。近くの周濠内からは、1985年度（昭和60）の第1次調査において出土していた円盤形木製品と蘇手形木製品（第9図3～5）が、新たに柄が付いた長さ2.4mの棒状木製品を伴ってさらに複数個体出土した（第9図6～15）。これにより、それまで想像・復元していたように、これらが組み合わせとなつた祭祀具（威儀具）であることが確実となった。筆者は、その存在意義をより明確に現すため、個々の名称を改め「幡状木製品」と名付けた。さらに、後円部北側の周濠から発見された半円形の「円板形木製品」（第8図2）は、長年にわたって墳丘に立てられてきたと推定され、これまで畿内に先行する最古級の木製立物である「笠形木製品」の一部と推定してきた。しかし、畿内の古墳から出土している笠形木製品とは形態的にも時期的にも繋がらないことから、幡状木製品とともに甲斐銚子塚古墳の被葬者が独自に創案した立物と理解されているが（坂2007・鈴木2011）、東国の前期古墳における特徴的な祭祀具であり、他に類例のない両者を総称して「甲斐銚子塚型祭祀具」と呼ぶこととした（小林2018）。

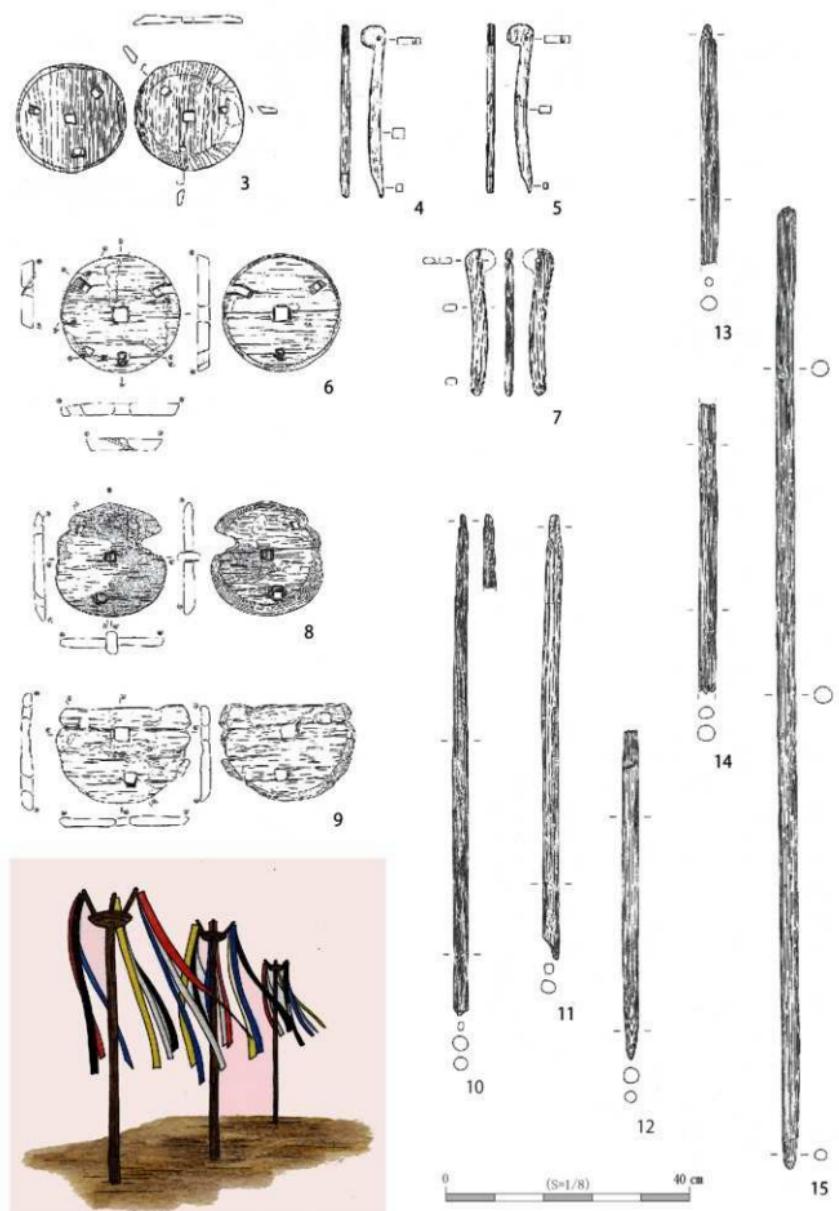
前方部2段、後円部3段の墳丘は葺石で覆われ、円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪（第10図）を巡らせており、北頭位の竪穴式石櫛に割竹形木棺を納めてはいないものの、これら墳丘・周濠の構造や出土品から、甲斐銚子塚古墳が極めて畿内的な、完成された前方後円墳であることが、発掘調査からも再確認されている。



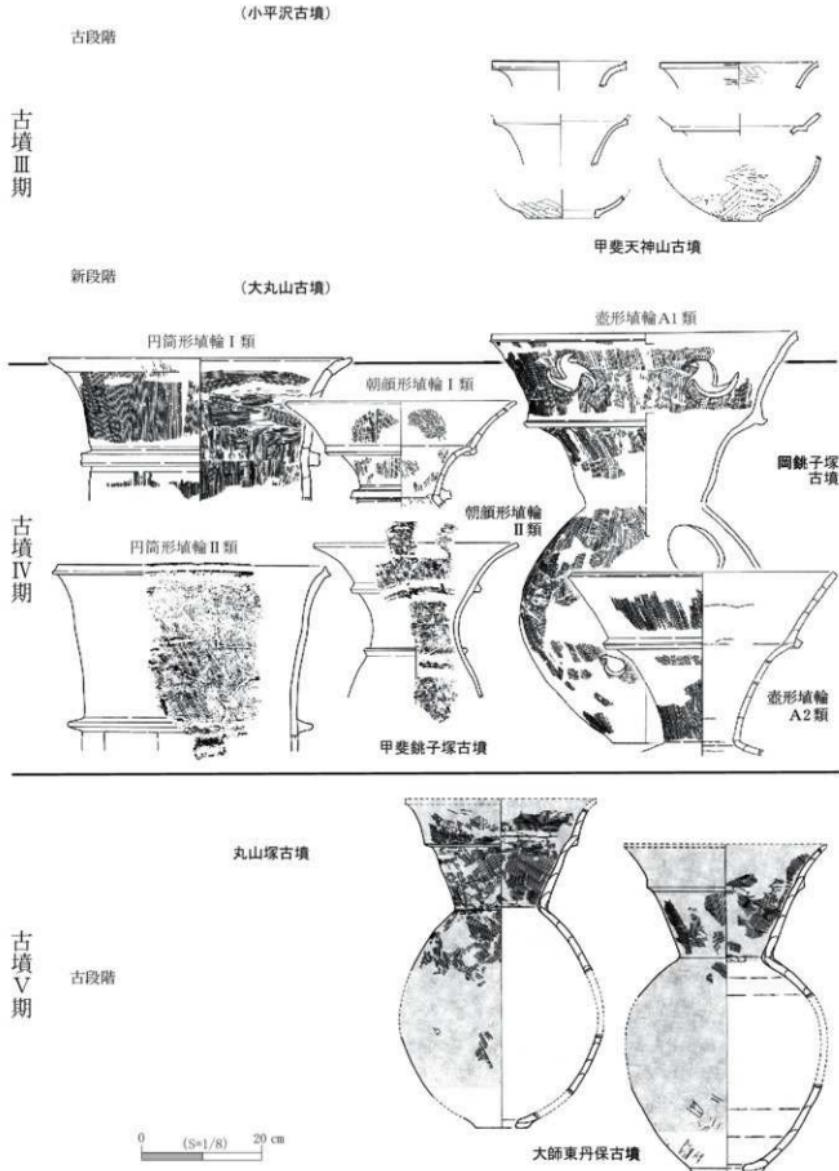
第7図 甲斐銚子塚古墳



第8図 甲斐銚子塚古墳出土木柱・円板形木製品



第9図 甲斐銚子塚古墳出土棒状木製品と復元イメージ



第10図 山梨県の古墳時代前期～中期初頭の埴輪の変遷

中道古墳群以外では、曾根丘陵東端の八代地域に同じ古墳IV期の前方後円墳、笛吹市岡銚子塚古墳(92m)がある。江戸時代の1763年(宝暦13)に発掘され、粘土桶から銅鏡3面(瀛龍鏡・二神二獸鏡・1面は不明)、鉄斧、鑿、鐵劍、鐵刀、勾玉が出土したとされ、墳形や出土した瀛龍鏡、埴輪の共通などからこれまで甲斐銚子塚古墳との関係が注目されてきた。埴輪から見れば、両古墳から出土している「特殊器台系譜」の初期的要素をもつ円筒埴輪として考えられていたものは、現在は「地方的変容と古い要素との混交」として捉えられており(高橋 1994)、埴輪製作については「同じ(墳形の)前方後円墳に埴輪を樹立する」という情報の共有(小林 2015a)であり、埴輪規模や埋葬施設からも格差があることは明らかである。甲斐銚子塚古墳を畿内的な王墓とするならば、岡銚子塚古墳はその強大な影響下での在地的な中位の首長墳であり(小林 2010)、近年の動向から見れば、岡銚子塚古墳は中道とは別の駿河を結ぶ道(若彦路)との関係で捉えた方が理解しやすく、八代勢力が台頭するのは、5世紀前半の竜塚古墳の出現を待たなければならないだろう。

御坂地域の扇状地に築かれた笛吹市亀甲塚古墳は、直径25mほどの楕円形とされるが、かつての墳形は不明である。盤龍鏡・碧玉製管玉・鉄刀・鉄錐・鐵鎌・鑿などが出土したとされ、従来は5世紀前半(筆者編年古墳V期新段階～古墳VI期)の年代が与えられていたが、現存する鏡と管玉には前期の様相が見られ、筆者は遅くとも古墳III期古段階の墳墓である可能性を考えている。最近、墳形確認のための試掘調査が行われ、前期の土器が出土しており、今後のさらなる調査が期待される。

なお、山梨県東部の大月・上野原地域では、後期古墳がわずかに点在するのみである。相模川を介した神奈川県との交流が考えられており、古墳時代には甲府盆地とを結ぶ交通路は機能していなかったと考えられる(宮澤 2004)。

3 山梨県の前期古墳の歴史的意義

山梨県の旧国名である甲斐国が成立したのは、広域行政区画の成立とともに国境が確定した7世紀末頃のこととされるが、「甲斐(カヒ)」の語源は以前から山と山との狭間を意味する「峠=賀比、可比」であるという説が通説であった。その後、他界と現世が交叉する境界である「甲斐=交ひ」説が提示されたが、現在

では行政的視点から「交わり行き交う国」をあらわす「交ひ」と考えられている。

古墳時代前期では東国最大級の規模を持つ甲斐銚子塚古墳の位置付けについては、從来からヤマト政権による東国経営の前線基地的な役割が考えられてきた。それは『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、ヤマトタケルに代表されるヤマトの將軍たちによる東征の結果と重なり、それまでの前方後円墳や三角縁神獸鏡などの考古学的研究成果も、こうした歴史観を裏付けるものとして解釈されてきた。しかし、前方後円(方)墳の系譜や副葬品個々について研究が進んだ結果、ヤマトからの方通行であった古墳文化の伝播についての考え方は、現在では大きく見直されている。甲府盆地内にはヤマトタケルの伝承が数多く残されているが(末木 2008)、ヤマトタケル東征伝承は史実を記述したものではなく、記紀の信憑性や資料的価値が疑われている一方で、何らかの史実が反映されていることも認められている。

ヤマトタケルの東征ルートは、『古事記』と『日本書紀』とでは違いがあるが、両書とも甲斐国酒折宮を経由している。平川南氏は、二つの大きな特色があることに注目している。一つは往路が海上ルート、復路が足柄坂から酒折宮を経由して東山道に入っていることであり、これは海上ルート一原(古)東海道ルートからの蝦夷征討事業に基づく伝承であること。もう一つは、「足柄坂」「科野之坂」などの坂において祭祀が行われている点である。坂の祭祀は坂の神を鎮圧する行為であり、まさに国境を定めることを目的としており、このことがヤマトタケル東征の大きな目的の一つと考えられている。これらは、文献資料から6世紀後半から7世紀前半のこととされるが、酒折宮も、「坂折」の地に祭られた神社であり、文字通り坂に関わる祭祀を執り行う役割を課せられた神社と考えられている(平川 2014)。

同様に、甲府市の酒折宮での東征帰路の休息地として歌を詠み交わすという酒折宮伝承も、6世紀の状況を記したものであると検証されている(大隅 2004・2008・2014)。『紀記』では、東征ルートに若干の違いが見られ、いずれも相模一原(古)東海道から甲斐へのルートと考えられるが、ヤマトタケルが原(古)東海道からわざわざ甲斐国の酒折宮に立ち寄って東山道に向かい、最終地の尾張国(愛知県)に戻るという伝承は、酒折宮が原東海道と原東山道の結節点であり、交通の要衝として描かれたものであることを示したものである。

のであり、その役割こそが「交ひ」つまり甲斐国の原義であると理解されている（平川 2008・2014）。江戸時代の地誌『甲斐国志』巻三八に「本州九筋ヨリ他国ニ通ズル路九条アリ」、「皆ナ酒折ニ路首ヲ發起ス」とあるように、酒折の地を他国への放射状に延びる道、中世以前の古道であるいわゆる「甲斐の九筋」の起点としていることも同様の解釈である。

ここまで見てきたように、山梨県の主要な前期古墳（首長墳）は、中道古墳群に築造されている。前期には、各地の首長墳造営地がいくつかの地区を移動する場合が多いことがこれまでの研究から指摘されており、中道古墳群では小平沢古墳から甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と、古墳群の中では米倉山から東山へと移動しているが、これらは距離的には指呼の位置である。

この地に前期古墳が集中的に営まれる背景として、ヤマト政権がすでに東海地方、中部山岳地帯から、さらに関東を結ぶ物資の流通ネットワークの重要な位置にあった甲斐の首長の役割を重視して、この地の勢力との関係を強化しようとしたことが考えられる。甲斐の首長もまた、盆地内の支配体制をより強固なものにすべく、ヤマト政権の政策に積極的に関わった。その結果として、曾根丘陵の中道地域を母胎とし、それまでの共同体の規制から抜け出して飛躍した王が東国の内陸の地に誕生し、やがて他地域をしのぐ強大な権力を作り上げた（小林 2014b）。3代の大型前方後円墳が相次いで営まれた背景は、まさにここにある。それが最も顕著に現れたのが中道古墳群・山梨県の前期古墳であり、歴史的意義であると考えたい。

4 残された課題

出現期の前方後方墳である静岡県沼津市高尾山古墳と、甲斐銚子塚古墳の墳丘築造企画が時期差を超えて一致することが明らかになっている（北條 2013）。大丸山古墳は微妙であるが、近年新たに測量調査が行われた小平沢古墳と甲斐天神山古墳では、前方部の長さとくびれ部の狭さは顕著ではなく、系譜や伝播にはなお検討を要するが、S字甕や大廓式の壺など土器の交流とともに、中道古墳群と東駿河とを最短距離の交通路で結ぶという地理的の関係を象徴的に表しているようと思われる。

中道古墳群において、甲斐銚子塚古墳以外では上記のように甲斐天神山古墳で発掘調査が行われ、試掘で

はあるが大きな成果を上げており、今後のさらなる進展が期待される。小平沢古墳については、築造時期の確定と周辺の調査、大丸山古墳については墳端の確認と墳丘長の確定、埋葬施設の構造など、課題が残されているが、今後の発掘調査により詳細が明らかになり、出現期古墳の発見も含めた前期中道古墳群の様相が究明されることを期待したい。

おわりに

山梨県の前期古墳について、最新の動向を踏まえ述べてきた。これまでの成果を見直しながら進めてきた筆者の考察については、当然のことながら異論や慎重な意見もあるが、今後も新たな様々な観点を持って山梨県の古墳時代研究を進めていく必要性を痛感する。

参考文献

- 大隅清陽 2004 「第4章 古墳時代の甲斐 第6節 ヤマト政権と甲斐」『第5章 律令制と甲斐国のは成立 第1節 甲斐の勇者』『山梨県史』通史編Ⅰ 原始・古代 山梨県
- 大隅清陽 2008 「ヤマトタケル酒折宮伝承の再検討—遠距離交通体系の視角から—」『山梨県立博物館 調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
- 大隅清陽 2014 「文献から見た甲斐の古墳時代」『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 笠原みゆきほか 2008 「銚子塚古墳附丸山塚古墳—平成16年度発掘調査報告書及び平成18・19年度史跡等環境整備報告書—』山梨県教育委員会
- 川西宏幸 2004 「記念講演 長柄・桜山の時代」『シンポジウム 前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- 車崎正彦 1993 「鼈龍鏡考」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集
- 小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 小林健二 1998 「甲斐における古式土師器の成立－3・4世紀の土器編年と墳墓－」『専修考古学』7 専修大学考古学会
- 小林健二 1999 「山梨県出土の北陸系土器」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会
- 小林健二 2000 「甲斐のS字甕を考える」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 小林健二 2006a 「山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚え書き」

- 甲府市塙部遺跡の調査から—』『研究紀要』22 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 小林健二 2006b 「第24回特別展 甲府盆地から見たヤマト—甲斐銚子塚古墳出現の背景—』山梨県立考古博物館
- 小林健二 2007 「大陸中央—甲斐地域を中心に—』『月刊考古学ジャーナル』554 ニューサイエンス社
- 小林健二 2009 「大丸山古墳の埋葬施設について—調査報告書『甲斐大丸山古墳』から—』『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会
- 小林健二 2010 「古墳時代における甲斐の地域社会—土器編年と墳墓の変遷—』『山梨県考古学協会誌』19 山梨県考古学協会
- 小林健二 2014a 「甲斐の前期古墳をめぐる検討課題—土器編年から見た中道古墳群の位置付け—』『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 小林健二 2014b 「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権』『月刊歴史読本』2015年1月号(株)KADOKAWA
- 小林健二 2015a 「甲府盆地から見たヤマト(3) 一甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪—』『研究紀要』31 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 小林健二 2015b 「甲斐の古墳時代と土器—編年と移動を考える—』『山梨県考古学協会誌』23 山梨県考古学協会
- 小林健二 2017 「甲斐の後期・終末期古墳』『山梨県考古学協会誌』25
- 小林健二 2018 「甲府盆地から見たヤマト(4) 一甲斐銚子塚古墳出土の木製品—』『研究紀要』34 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 小林広和・里村晃一 1978 「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』30-2 信濃史学会
- 坂本美夫 1978 「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について』『甲斐考古』別冊第2号 山梨県考古学会
- 坂本美夫 1988 「銚子塚古墳附丸山塚古墳—保存整備事業報告書—』山梨県教育委員会
- 白石太一郎 2006 「甲斐銚子塚古墳とヤマト政権』山梨県立考古博物館 第24回特別展講演会資料
- 末木 健 2008 「甲斐のヤマトタケル伝承』『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 鈴木裕明 2011 「1塙丘と外表施設の諸相⑤埴輪樹立と木製樹物』『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開』『考古学研究』41-2 考古学研究会
- 田中新史 2002 「有段口縁壺の成立と展開—特化への道程・類別と2地域の分析—』『土筆』6 土筆舎
- 仁科義男 1931 「大丸山古墳』『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告書』5 山梨県
- 坂 靖 2007 「古墳と木製立物』『月刊考古学ジャーナル』565 ニューサイエンス社
- 平川 南 2008 「古代日本の交通と甲斐国』『山梨県立博物館調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
- 平川 南 2014 「律令国都里制の実像』上 吉川弘文館
- 平塚洋一 2015 「天神山古墳—第一次・第二次発掘調査報告書—』甲府市教育委員会
- 北條芳隆 2013 「高尾山古墳と埴輪築造企画論』『西相模考古』22
- 宮澤公雄 1989 「鉄製柄付手斧について』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』I 帝京大学山梨文化財研究所
- 宮澤公雄 1994 「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相—東山・米倉山地域の再検討を通して—』『山梨考古学論集』III 山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 2004 「古墳と古代の交通路』『山梨考古学論集』V 山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 2014 「甲府盆地における古墳時代中期の様相』『山梨考古学論集』VII 山梨県考古学協会
- 水野敏典 2014 「畿内から見た甲斐の前期古墳』『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 茂木雅博 2007 「甲斐大丸山古墳—埋葬施設の調査—』博古研究会
- 森原明廣・守屋丈文 2005 「銚子塚古墳附丸山塚古墳—史跡整備事業に伴う平成16年度発掘調査概要報告書』山梨県教育委員会
- 山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)
- 山本寿々雄 1960 「甲斐天神山前方後円墳出土の土師器について』『富士国立公園博物館研究報告』3

図版出典一覧

- 第1図 (小林 2010) P89 の第1図より。
- 第2図 (小林 2017) P141 の第3図に加筆・修正して作成。
- 第3図 (宮澤 2014) P119 の第2図を一部改変して作成。
- 第4・5図 (平塚 2015) P13 図7, P23 附図を一部改変して作成。
- 第6図 (茂木 2007) P23 の第12図を一部改変して作成。
- 第7図 (森原 ほか 2005) P17 ~ 18 の図1を一部改変して作成。
- 第8・9図 (坂本 1998) P28 の第21図、(笠原 ほか 2008) P47 ~ 48 の第3~4~22図、P49 の第3~4~23図、P50 の第3~4~24図、P51 の第3~4~25図、P53 ~ 54 の第3~4~26図より作成。

第10図（小林 2015 a）P10より。

写真出典一覧

写真1（山梨県 1998）巻頭より。

写真2（イラスト）（小林 2006b）P61より。

古墳時代前期の地域開発と古墳の被葬者像

—上毛野と北武藏の比較を通じて—

明治大学 若狭 徹

1 野本將軍塚古墳と反町遺跡

早稲田大学の城倉正祥氏の非破壊調査によって、北武藏において重要な位置を占める野本將軍塚古墳の諸属性が明らかになってきた（城倉・青木・伝田 2017）。同古墳は埴丘長約115mの前方後円墳であり、武藏地域有数の規模を誇りながら、その時間的位置が定まらず、前期説～後期説までの幅をもって論じられてきた。今回、3D測量の結果をうけて、埴丘が從来言われていたような大きな改変を受けておらず、ひじょうに残りがよいことが確定した。また、縄を伴う竪穴系埋葬施設が後円部中央の主軸上に平行して位置するというレーダー解析の成果が得られたことは特筆され、後期古墳（横穴式石室）という選択肢は排除された。なお、中期古墳においても、石棺や鍾乳といふ石造りの埋葬施設はあるが、毛野や武藏の古墳の場合、中期には埴輪が伴うことが通例であり、これだけの規模の前方後円墳で今まで埴輪が採取されたという情報がないことは中期古墳という可能性を低くするものであろう。

筆者は、坂本和俊氏の所見（坂本 2017）を踏まえつつ、近隣に位置する五領遺跡や反町遺跡、高坂古墳群出土三角縁神獸鏡の性格などから、野本將軍塚古墳が前期古墳である可能性を考えている（若狭 2017）ので、上記の所見は高く評価できる。

野本將軍塚古墳は幅1kmほどの東松山丘陵の南端部に位置するが、同丘陵の北辺、市野川に面して古墳前期の集落遺跡である五領遺跡がある。同古墳が前期古墳だとすると、古墳と五領遺跡の関係は深いものとなる。

五領遺跡は、南関東の古式土器である「五領式」の標識となった集落遺跡だが、むしろ他の同時期の集落に比べ、特殊な性格が顕著である。外来系土器が多く、特に畿内の布留式系土器の多さは特筆されるからである。首長膝下の交流拠点と考えられるとともに、石鏡2点が出土したことから首長居館が存在した可能性も濃厚である。

野本將軍塚古墳の南は地形が一段下がり、荒川の支

流である都幾川の氾濫原となる。都幾川の対岸の低地からは、大規模開発にともなって反町遺跡が発見された。将軍塚古墳からは1.5kmに満たない近さである。

反町遺跡も集落遺跡であるが、畿内・東海・北陸・瀬戸内系土器の出土が知られ、やはり一般集落ではない交流拠点として性格づけられる。それとともに、水晶・緑色凝灰岩・メノウ・ガラス玉の製作集団を抱えており、手工業拠点としての性格も看取される（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009・2011・2012）。しかも、同遺跡からは、低湿地に構築された灌漑水路や堰遺構が検出され、農業経営拠点であることも明らかになった。治水や農業土木、手工業といった多様な新来技術を保有したことが判明したのである。

さらに同遺跡の背後（南側）の高坂台地の北縁に高坂古墳群があり、（遺構との関係が必ずしも明らかでないものの）埼玉県域ではじめての中国製三角縁神獸鏡が見いだされた（東松山市教育委員会編 2017）。以上の属性を合わせると、この一帯は古墳前期における北武藏地域社会の中核であったことが明らかである。その地域を統べた首長の奥津城として、100mを超えた規模の野本將軍塚古墳がふさわしいことが、地域動態の面からも推測されるのである。

こうした私見を有してきたわけであるが、今回城倉氏が導いた野本將軍塚古墳の年代観（前期後半から下がっても中期初頭）は整合的に受け入れられるものである。ここでは、さらに筆者がフィールドとする上毛野の前期古墳の検討を加え、上毛野と北武藏という近隣エリアの文化的動向を比較していきたい。

2 上毛野における前期前半の古墳動向

2-1 弥生墓からの展開

上毛野の弥生後期には、中部高地型櫛描文を特徴とする櫛式土器を用いた集団が展開していたが、群馬県域の西部～北部地域に分布の主体があり、県域東部は空白地であった。この文化の墓制は、木棺を直葬する方形周溝墓、ならびに埋葬施設を疊床墓とする円形周溝墓である。円形周溝墓+疊床墓は、兄弟様式である

北信濃の箱清水文化と共有の墓制であり、加えて樽文化の南半部では、南関東系の方形周溝墓も受容していたのである。副葬品として、螺旋状鉄釧・銅釧・双孔刃関鉄劍・ガラス玉がみられる。

これらはいざれも低墳丘で、独立した首長墓といえる存在はいまのところ見当たらない。ただし、箱清水文化圏では長野県木島平村根塚遺跡のような円形墳丘墓が知られており、樽文化の大型墓の存在も想定されてしまうべきである。

このような在来集団が、古墳時代になって高塚古墳を造営していくプロセスは必ずしも明確ではないが、樽文化の中核地にあたる高崎市棟名地区の中里見原1号墓（一辺24m）は注目される（梅沢2010a）。3世紀後半に降下した浅間C軽石で埋没し、底部穿孔された樽式系壺と北陸系壺が周囲の溝から出土した。視認性が高い段丘の縁辺部に単独で築かれた方形周溝墓であり、在来集団が古墳時代になってリーダー層を析出する過程を示す一例といえるだろう（第1図-①）。

中里見原1号墓と同じ地域（烏川対岸）に、浅間C軽石降下後に出現した本郷大塚古墳（第1図-③）は、直径50mの大型円墳であった（高さは削平により不明）。造り出し状の前方部の存在を想定する向きもあるが、確定的ではない）。浅間C軽石を浅く掘り込んで礫床を設け、木棺を置き、さらに礫で囲って礫椁を構築する。しかし後に墳丘を築造したものであり、通常の古墳が封土の上から墓坑をうがつとは大きく異なっている。礫椁からは中国製で位至三公の銘がある内行花文鏡（面径12.3cm）とガラス管玉2、ガラス小玉100を出土した（梅沢2010b）。大型墳ながら埋葬施設先行型の築造方法であること、副葬品に鉄製品や石製品を含まないことが特徴的である。樽文化圏の立地や古墳の内容から、在来集団から成長した古墳時代前期首長の墓と性格付けられよう（第3図）。

鏡の入手契機については、倭王権からの配布か独自入手かの検討が必要であるが、弥生倭製鏡（内行花文鏡）が安中市長谷津遺跡の樽3期の住居跡（44号住居）から出土している。樽集団が属した中部高地系文化圏が、九州から続く日本海側の流通ルートを確保していたことも忘れてはならない。

2-2 外来系譜の墳墓—前方後方墳の展開—

上毛野では、樽文化の後半期（樽3期）に沼田市日影平遺跡のような環濠集落が再出現し、焼失住居が増えるなど、一時的な社会的緊張状態が発生したと推定

される。その背景として、3世紀前半から上毛野の低湿地部に、外来集団の移住が進行したことが挙げられる。

上毛野の3世紀史は、山麓扇状地や台地部に展開した在来集団と、大河川沿いの低湿地部に進出した外来集団の相克史でもあった（若狭2017）。平野部に居住した樽集団は、外来系集団の影響をうけていち早く変質し、集団再編される一方、平野部周縁や山間盆地の樽集団は土器に見る文化的伝統を4世紀まで温存させることが特徴である。

外来系集団にかんしては、典型的な東海西部系土器の様式を保持する集団（a）と、北陸東部系土器の様式を保持する集団（b）がみられ、これらに東海東部系・畿内系・近江系・山陰系・南関東の房総系・東関東十王台式系・南東北天王山式系土器などが混成する状態である。

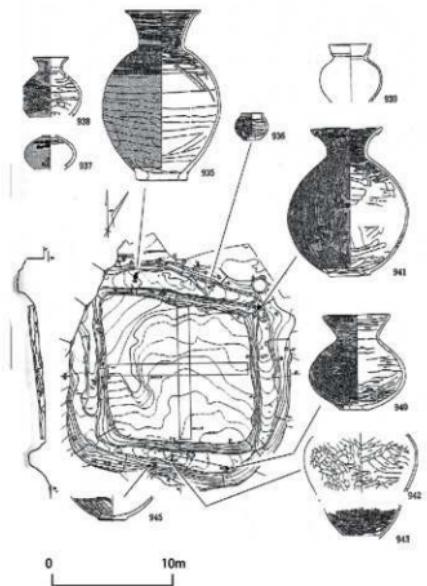
外来集団が移入したエリアは、おもに樽集団が居住していないかった利根川沿岸の低湿地で、そこに低地性の集落や水田、前方後方墳（周溝墓）・方形周溝墓が展開する。最も古い前方後方周溝墓は高崎市熊野堂遺跡1号墓（21m）で、浅間C軽石降下の直前に築造された（第1図-②）。他の遺跡では、同軽石層の上下から布留O式=廻間II式新段階並行の土器群が出土しており、布留O式の暦年代観にしたがえば、軽石の降下は上述のとおり3世紀中頃～後半と推定される。

この頃には、当地域で最古の大型前方後方墳である元島名將軍塚古墳（96m）の造墓が企画された（田口ほか1981）。まず本格着工に先だって幅1m、深さ1.4mほどの排水溝（溝4）が浅間C軽石降下直後に墓域の外縁に掘削され、その内側に濠と墳丘が選地された（第2図）。溝4には大量の土器が廃棄されたが、最も古いのは中層出土の廻間II式新段階並行の土器である。やがて將軍塚古墳が完成した際には、墳頂部に廻間III式並行期の伊勢型二重口縁壺が配置されるとともに、S字甕や高坏・器台などが共獻された。

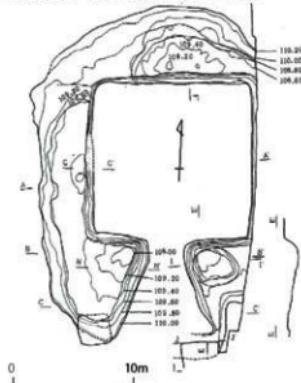
排水溝の掘削によって、開発を企図した低湿地を乾燥させる手法は、玉村町砂町遺跡にもみられる（玉村町教育委員会2007）。ここでは、湿地に幅2mほどの溝を方格状に設け、その中に幅10mの長大な基幹水路を掘って、水田への給水システムを完成させている。方格の溝は、滯水を除く目的で掘られたのであり、元島名將軍塚古墳の溝4に通底する技術である。

このほかに、上毛野西部では堅穴建物の周りに排水溝を巡らす低地性住居、尾張地域の系譜を引く木製船

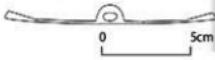
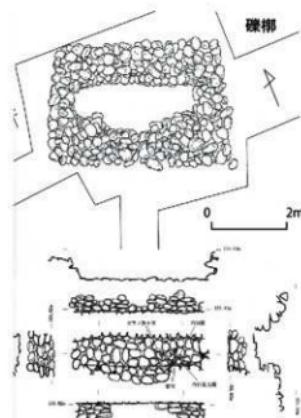
① 中里見原1号墓（浅間C軽石降下前）



② 熊野堂1号墓（浅間C軽石降下前）



③ 本郷大塚古墳（浅間C軽石降下後）



第1図 弥生墓から古墳へ

などが出現しており、さまざまな文化要素によって移住集団の起源が東海地方であることを教えてくれる。

当地には、將軍塚古墳の築造を契機として、前方後方墳秩序が形成された。高崎市東部の井野川流域では、將軍塚古墳（96m）一元島名1号墓（44m）・下郷SZ42（42m）一鈴ノ宮1号墓（21m）・矢中村東SZ01（24m）という、概ね4：2：1程度の規模の序列が構築されており（第2図）、その下位に方形周溝墓が位置づく。このように、墓における4～5ランクの階梯が認められることから、階層秩序を保持して到來した外来集団によって、この地の開発が一気に進められたことが示唆されるのである。そうした外来系譜の複数集団の最上位に位置したのが前橋八幡山古墳（130m）の被葬者であったと考えられる（第4図）。

2-3 前方後円墳の出現と前方後方墳の継続

かつて、関東の前期古墳は前方後方墳が主流とされてきたが、近年では初期前方後円墳も存在することが明らかになってきた。上総の神門墳墓群（市原市）、相模の秋葉山古墳群（海老名市）などで、3世紀まで遡る。

上毛野で3世紀に位置付けられる例は未見だが、舶載鏡を出土し、前期前半に比定できる前方後円墳として、前橋市前橋天神山古墳（129m）、太田市本矢場薬師塚古墳（約80m）、玉村町川井稻荷山古墳（35m以上、別称：芝根7号墳）などが挙げられる。

その下位に位置づく円墳には、板倉町赤城塚古墳（径30m）、太田市頬母子古墳（規模不明、円墳か）、高崎市本郷大塚古墳（50m）、高崎市蟹沢古墳（10～20mの円墳〔ないし方墳〕）、玉村町軍配山古墳（40m）、富岡市北山茶臼山古墳（40m、造り出し有）などが知られる。

画期的なのは、129mという規模で成立した前方後円墳の前橋天神山古墳である（前橋市教育委員会1970）。住宅団地造成で大半が破壊された悲運の大古墳だが、全面に葺石を施し、墳頂に玉石が敷き詰められていた。長大な木棺を治めた粘土櫻からは、舶載三脚縁神獸鏡2、他の舶載鏡2、倭製鏡1の合計5面の鏡、素環頭大刀、鹿角装はかの鉄剣、銅鐵、鐵鐵、鐵製農工具、釣り針、碧玉製紡錘車、朱塊などが出土した。関東地方以東で最も豊富な副葬品を出土した前期古墳である。ただし、副葬品組成は畿内の前期主要古墳に比肩するが、紡錘車以外の石製品や玉類を保有しない。

また埴輪を有さず、畿内系二重口縁壺（底部穿孔壺）を墳頂部に周縁配置する。元島名将軍塚古墳の事例でもみたように、上毛野の前方後方墳・前方後円墳ともに葬送儀礼は壺形土器（埴輪）の周縁から始まり、埴輪の採用は後出的である。

ところで前方後円墳が出現したとはいえ、当地における墓制には前方後方墳が残存した。古墳群内での墳形の変化が分かる好例として玉村町下郷遺跡がある（第3図）。ここでは、古墳時代前期の方形周溝墓多数、前方後方墳1、前方後円墳1が検出された（群馬県教育委員会1980）。

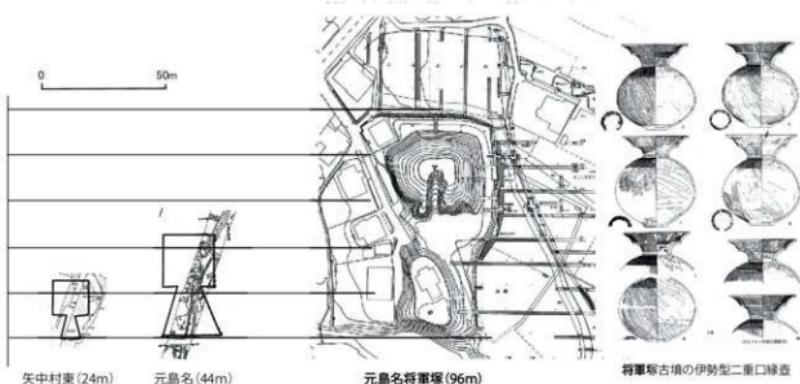
同遺跡の墓域は、幅2mの長大な溝で囲まれて集落城と画されており、その中で首長系列とみられる墳墓が、南からSZ01（一辺24mの方形周溝墓。ただし南部が調査区外のため前方後方型の可能性あり）⇒SZ42（全長42mの前方後方墳。一定の墳丘高があったと推定されたことから古墳と位置づけられる）⇒SZ46（削平されているが地割図から推定墳長84mの前方後円墳と推定。下郷天神塚古墳）と築かれている（第7図）。

SZ42は、SZ01と同規模の方形部に前方部を付した規格、SZ46はSZ42の2倍の規格となっている。SZ01とSZ42からは畿内系底部穿孔二重口縁壺が出土しているが、後者の出土資料の方が器壁が厚く、粗い刷毛を施す埴輪質の仕上がりである。このためSZ01⇒SZ42という新旧関係が明らかである。

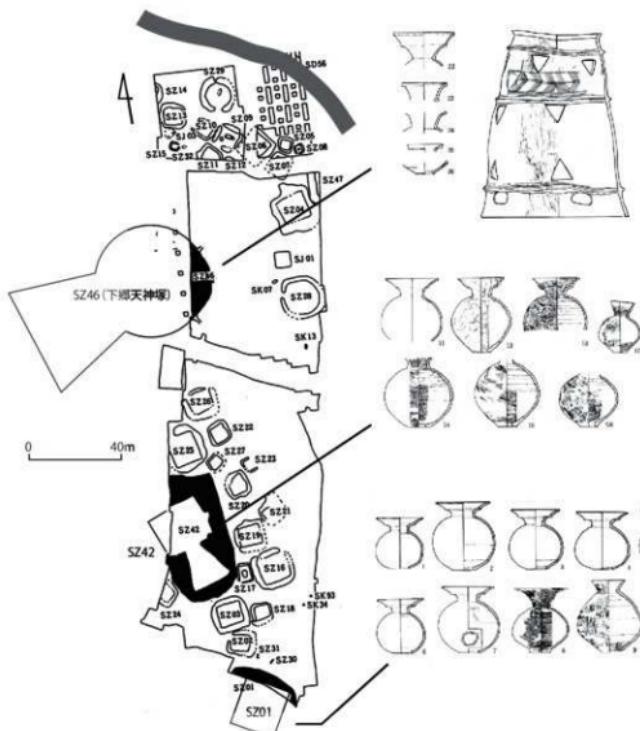
SZ46は浅い濠底から葺石を施し、器台形円筒埴輪を多件伴う。埴輪には鯨面線刻文を施す個体がある。また、長胴化したS字甕と、口縁が伸張した伊勢型二重口縁壺が共伴している。S字甕と壺が型式的に新相であることから、SZ42⇒SZ46の時間差が確認できよう。

SZ42の畿内系二重口縁壺は、前橋天神山古墳の壺形土器よりも後出的であり、前方後円墳が登場してもなお前方後方墳が築造され続けていたことが明らかである。地域首長のなかでいち早く王權と連携した勢力に前方後円墳の墳形が許されたことを改めて確認したい。

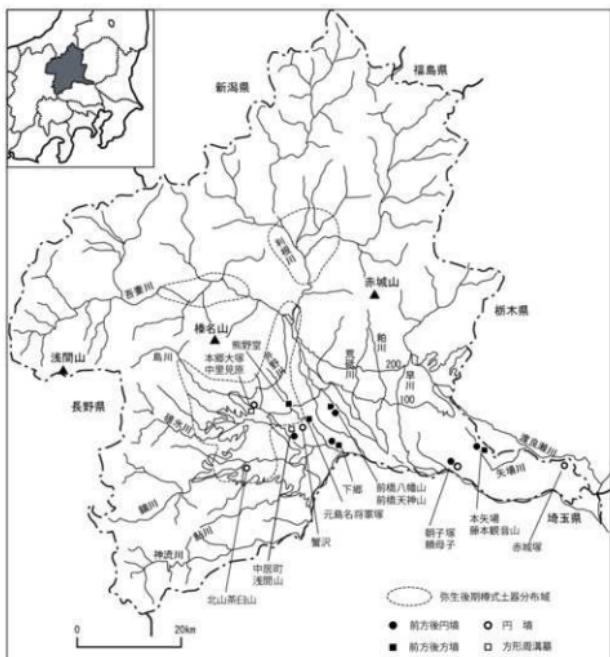
上毛野で最初期の前方後円墳である前橋天神山古墳には埴輪は存在せず、その後に築造された下郷SZ46には埴輪が伴う。しかし、その埴輪は畿内のオオヤマト古墳群で創出されたI期埴輪とは型式的距離があり、むしろ移入集団の本貫地である東海地方で受容されたI期埴輪（伊勢湾岸地城では、三重県松阪市



第2図 前方後方墳の規格



第3図 前方後方墳から前方後円墳へ（下郷遺跡）



※分布は本文中に触れたもののみ表示。

	甘楽	多胡 緑野	碓氷 片岡	群馬	那波	佐位 勢多	新田	邑楽
前期	阿曾岡 北山茶臼山西		本郷大塚 (50)	下佐野 将来塚 (95)	川井 高柳山 (130)	前橋天神山 (129)	相母子 寺山	
	三木木 菅原寺塚 (55)	神田 ○	長者屋敷 (50)	蟹沢 下郷天神塚 (80)	山王大塚 軍配山 (60)	山王大塚 文猪山 (60)	太田八幡山 (84) 矢備葛根塚 (80)	勝本茶臼山 (117)
	神明山 片山1号		長申塚 大山 (60)	大崩巣 御勢山	地獄山 (60)	別所茶臼山 (168)		赤城塚 ●
中期	上戸塚古墳山 十二天 白石坂削山 (150)	高崎1号 絆塚 劍岡 天神塚 岩野谷 57号	三島塚 (50)	下佐野 高玉山 (60)	磐手寺裏 (77)	鬼塚 連山 製の木山	扇手塚 女伴山 (104) 中原 (50)	
			上荒塚高山 (120)	岩鼻二子山 (115)	不動山 (95)	御手立山 (123)	赤堀茶臼山 (62)	上小林福岡山 (50)
	長澤西 平塚 (105)	荒田大塚 小鶴巣 井出二子山 (108)	井出二子山 保渡田八幡等 (106)	若宮八幡北 鶴巣塚 谷口 (70)	今芸治社 丸塚山 (81)	洞野村 63号山	鷲山 (102)	古海原前 ●
後期	大山鬼塚 ○						鳥志神社 (70)	
			100m					

第4図 上毛野の前期古墳の編年と分布

坊山1号墳・高田2号墳・愛知県名古屋市中社古墳・南社古墳・愛知県岡崎市於新造古墳・甲山1号墳などで畿内I期埴輪の直接伝播が見られる〔廣瀬2015〕の影響を受けたと考えられる。下郷S246の器台形円筒埴輪に鰐面線刻文（岡山县を核とする瀬戸内海沿岸と東海地方西部の弥生後期にみられた辟邪の意匠）を描くこともこの考えを補強するものである。

このように、上毛野の前期古墳の葬送儀礼は、伊勢型二重口縁壺の周囲配列から初期埴輪段階まで、集団の出自の地である東海地方との情報交流に則っていたと考えられる。その状況が変質するのは、後に述べる朝子塚古墳・浅間山古墳・大鶴巻古墳が築造される前期後半である。そこでは、畿内の佐紀古墳群の諸属性が受容され、上毛野と倭王権との政治的交流が新たな段階を迎えたと考えられる。

3 鏡の序列

3-1 鏡の出土状況

上毛野の前期古墳には舶載鏡の副葬が顕著で、20面以上が知られている（下垣2016）。関東における前期の舶載鏡は千葉県に10面、他県には数面ずつが知られるのみである。なかでも、三角縁神獸鏡は、関東の出土例18面のうち12面が上毛野に集中する（表1）。

筆頭は前橋天神山古墳である。舶載三角縁神獸鏡2面を副葬したほか、他の舶載鏡2+倭製鏡1の合計5面を保有する。中～小型の前方後円墳では、玉村町川井稻荷山古墳（35m以上、後期に横穴式石室墳に改変）に1面が知られる。ただし、本鏡は改築された横穴式石室の裏込めから出土したため、本来的な保有数は不明である。円墳とみられる高崎市蟹沢古墳からは三角縁神獸鏡2+倭製鏡2の4面が、円墳かと推定される太田市頼母子古墳は三角縁神獸鏡2面と他の舶載鏡1面、円墳（造出付）の富岡市北山茶臼山古墳から三角縁神獸鏡1面が出土、板倉町赤城塚古墳でも三角縁神獸鏡1面が伝世される。ただし、三角縁神獸鏡3面ほどの出土が伝承される藤岡市三木本について、古墳の位置すら不明である。

なお、上に挙げた以外の舶載鏡を持つ古墳としては、前方後円墳の太田市本矢場薬師塚古墳（四獸鏡）、円墳の玉村町軍配山古墳（内行花文鏡）、本郷大塚古墳（内行花文鏡）などがある。また、集落遺跡の高崎市上中居遺跡群からは浮彫式獸帶鏡の破鏡が出土している（水の祭祀場の可能性がある）。

伝承品や偶発発見例が多く、調査での出土資料が少ないので不確定要素が強いものの、上記の在りから推すと、上毛野では倭王権からの鏡の分配システム（三角縁神獸鏡を上位として、枚数と面径で秩序づける。下垣2011）が、概ね次のように機能していたと考えられる（表1）。

第1ランク：面径20cm以上の舶載三角縁神獸鏡複数
+面径15cm内外の舶載鏡を保有。

第2ランク：面径20cm以上の舶載三角縁神獸鏡が単数+α。

第3ランク：面径15cm内外の舶載鏡を保有。

第4ランク：面径10cm内外の舶載鏡を保有。
この鏡の序列と古墳の対応関係をみると、

第1ランク

：大型前方後円墳（前橋天神山古墳）。

：大型前方後円墳がない地域での円墳（頼母子古墳）。

第2ランク

：中～小型前方後円墳（川井稻荷山古墳）。

：前方後円墳が存在しない地域の中型円墳（北山茶臼山古墳・赤城塚古墳）。

第3ランク

：中型円墳（軍配山古墳）。

：前方後方墳（北山茶臼山西古墳）。

第4ランク

：前方後円墳が存在しない地域の大型円墳（本郷大塚古墳）。

となり、墳形とその規模に応じて概ね推移している。そして、前方後円墳が存在しないエリアでは、その地域において最上位の円墳に、鏡が保有される傾向がみられる。

しかし、この原理のなかで逸脱するのが蟹沢古墳である。蟹沢古墳は、舶載三角縁神獸鏡2+倭製鏡2=4面を保有し、内容は第1ランクに匹敵し、東国でも突出した内容であるにも関わらず、その規模は小型円墳と推定されている。しかも、三角縁神獸鏡のうち1面は、卑弥呼が魏に遣使した翌年の紀年（240年）をもつ□（正）始元年銘鏡であり、倭王権に特別に遇された被葬者像が推定される。

次に異質なのは北山茶臼山古墳であり、円墳でなくながら上毛野で最大（面径24.9cm）の三角縁神獸鏡を保有するものである。ちなみにこの鏡は、古墳前期の舶載鏡としては愛知・三重・岐阜県以東で最大である（下垣2016）。

表1 上毛野の前期古墳等出土の鏡（古墳別）

	鏡名	製作地	面径	出土古墳(遺跡)	所在地	墳形等	類型
1	三角縁天王・日月・獸文帶五神四獸鏡	船	22.3	前橋天神山古墳	前橋市	前方後円	1
2	三角縁天王日月・獸文帶四神四獸鏡	船	21.6				
①	尚方作二禽二獸画像鏡	船	18.5				
②	三段式神仙鏡	船	16.3				
	振文鏡	倭	13.2				
3	三角縁波文帶盤龍鏡	船	21.7				
4	三角縁有銘四神四獸鏡	船	22.6				
③	尚方作方格規矩四神鏡	船	17.8				
5	三角縁張氏作三神五獸鏡	船	22.6				
6	三角縁陳氏作四神四獸鏡	船	22.0				
7	三角縁陳氏作神獸車馬鏡	船	21.9	三本木	藤岡市	?	1
④	袁氏作神人龍虎画像鏡	船	15.6				
	八神像鏡	倭	15.7				
8	三角縁正始元年陳是作同行式神獸鏡	船	22.6	柴崎蟹沢古墳	高崎市	円?	1垂
9	三角縁獸文帶三神三獸鏡	船	21.9				
	八弧內行花文鏡	倭	10.4				
	六弧內行花文鏡	倭	9.7				
10	三角縁君・宜・高・官・獸文帶四神四獸鏡	船	22.5	川井稲荷山古墳	玉村町	前方後円	2
11	三角縁画面象帶盤龍鏡	船	24.9				
12	三角縁獸文帶四神四獸鏡(仏像含む)	船	23.1				
⑤	方格規矩四神鏡	船	15.9	赤城塚古墳	板倉町	円	2
	四獸鏡	倭	9.7				
⑥	蝙蝠庭紐八弧內行花文鏡	船	16.0	北山茶臼山西古墳	富岡市	前方後方	3
⑦	八弧內行花文鏡	船	13.2				
⑧	上方作系浮彫式四獸鏡	船	10.9	軍配山古墳	玉村町	円?	4
⑨	上方作系浮彫式一仙五獸鏡	船	12.6				
⑩	八弧內行花文鏡(「位至三公」)	船	12.3	本郷大塚古墳	高崎市	円	4
	四獸鏡	倭	7.1				
	七弧內行花文鏡	倭	11.1	元島名將軍塚古墳	高崎市	前方後方	
	振文鏡	倭	7.9				
⑪	上方作系浮彫式獸帶鏡(破鏡)	船	12.8	上中居辻葉師遺跡(溝)	高崎市	水源祭祀	
	四獸鏡	倭	7.1				
	八弧內行花文鏡	倭	7.8	下佐野I地区A区4号墓	高崎市	前方後方	
	六弧內行花文鏡	倭	11.0				
	六弧內行花文鏡	倭	8.0	長者屋敷天王山古墳	高崎市	造出付円	
	神獸鏡	倭	11.0				
	珠文鏡	倭	8.0	成塚向山1号墳	太田市	方	
	重圓文鏡	倭	6.2				
	八弧內行花文鏡	倭	7.8	下佐野I地区A区4号墓	高崎市	前方後方	
	重圓文鏡	倭	6.1				
	重圓文鏡	倭	3.7	神保下條遺跡1号住居	高崎市	集落	
	內行花文鏡	倭	破片				
				中溝深町遺跡	太田市	居館	

下垣2016より作成

3-2 鏡を保有した古墳の被葬者像

外来集団のなかでの秩序 舶載鏡を保有した古墳の立地をみると、在来系樽集団が希薄な場所に位置するのは、前橋天神山古墳、川合稻荷山古墳、軍配山古墳、本矢場薬師塚古墳、頬母子古墳、赤城塚古墳、三木本である（第4図）。広大な上毛野の低湿地に展開した外来系譜の集團に多くの鏡が保有されていることが明らかである。

関東の中でも上毛野・下毛野・那須・北武藏は前方後方墳が卓越し、前方後円墳の初出が遅れる地域である（南関東に集成1・2期前方後円墳が見られる）。また、上毛野・北武藏はS字甕を中心とした東海西部系土器様式が強く定着しており、ここに三角縁神獸鏡が多く保有されていることは、このエリアの移入集團の勢力に対して、王権が多くの鏡を優先的に配布すべき事情があったことを示す。

なお、前方後方墳からは三角縁神獸鏡の出土事例や出土伝承がない。鏡の配布が、その集團のなかから倭王権との連携を選択し、円形原理の墓（前方後円墳・円墳）に移行した集團への遭遇であったからと考えるべきであろう。

在来集團の遭遇 一方、樽集団の領域に成立して舶載鏡を持つ古墳として北山茶臼山古墳、本郷大塚古墳がある。北山茶臼山古墳は、鏑川が形成した平野を望む丘陵上に築造された（第4図）。古墳に隣接した尾根上には、この地の弥生後期拠点集落である中高瀬觀音山遺跡が存在する。鏑川上流域は、同じ中部高地櫛描文様式圏である信濃の佐久地域と連接しており、樽文化の中核地域の一つであった。また、本郷大塚古墳は先述のように榛名山南麓に展開した樽集団の居住地のただ中にある。

なかでも北山茶臼山古墳の三角縁盤龍鏡は面径24.9 cmと東国に到来した前期舶載鏡としては最大で、被葬者への王権の配慮が見て取れる。同古墳に隣接した尾根上にある北山茶臼山西古墳（前方後方墳か）からは中型の方格規矩鏡（面径15.9 cm）と倭製の小型内行花文鏡が出土しており、鏑川上流域の首長に鏡が厚く配布されたことが、この地域の重要性を物語っている。

このように、小墳からその規模に見合わない鏡が出土する場合、上毛野においてはそれが伝統的な在来勢力を遭遇するためのアイテムであったと考えることが可能である。古墳時代に入り、外来集團が低湿地部を開発するなかで、在来樽集団は一方的に抑圧されるの

ではなく、そのアイデンティティを保持しながら遇されたと推測できるのである。

4 前期古墳と地域開発

4-1 蟹沢古墳と熊野前遺跡

ここで改めて問題となるのは、先に特異性を指摘した蟹沢古墳である。外来集團エリアに位置する小規模墳にも拘わらず、三角縁神獸鏡2面を含む4面の鏡を出土しているからである。

本古墳については高崎市域の井野川流域に所在することから、筆者はその被葬者に樽文化の末裔を推定したこともあった。しかし、近年、本古墳一帯の考古学的調査が進んできたことから改めて、その背景を考えてみたい。

蟹沢古墳は井野川と鳥川に挟まれた台地上に位置し、その北縁に立地している（第5図）。眼下は井野川南岸に広がる幅1 kmの低地であり、さらに井野川を挟んだ北岸段丘上には元島名將軍塚古墳が位置する。元島名將軍塚古墳より西方は、かつての樽文化の分布域が、東側には外来系譜の移入地帯が展開しており、同古墳は両集團の接点に設けられた象徴的な記念物であったと考えられる。

蟹沢古墳が載る台地の幅は約3 kmで、南縁の鳥川に臨む位置には、古墳前期後半の浅間山古墳（172m）、大鶴巻古墳（123m）、下佐野古墳群が形成される。浅間山古墳が位置する倉賀野地区は、江戸時代の利根川水運最上流の倉賀野河岸があつた場所で、古くから水陸交通の結節点であった。また、6世紀中葉になると一帯に「佐野屯倉」が成立した。これは、山上碑（681年立碑）・金井沢碑（726年立碑）の碑文や一帯の遺跡動態から明らかである（若狭2018）。本台地は、両側を大・中河川に画されているにも関わらず地下水位が高く、上面には古墳や集落の間を縫って、多数の小流路が発達している。

統いて、近年の主要な調査成果について蟹沢古墳を中心にみてみよう。

蟹沢古墳の眼下の低湿地では、柴崎熊野前遺跡が調査された（群馬県埋蔵文化財調査事業団1998）。弥生時代の構造はなく、古墳前期の自然流路と溝が検出された。流路からはS字甕をはじめとした多量の古式土師器、木製大足（湿地用いられる歩行用農具）、ガラス玉、多量の蛇紋岩製玉類とその未成品、貨泉（中国の王莽期＜1世紀前半＞に限って鑄造された銅銭）

が出土している。

遺物は、自然流路から水田域に分水する水源祭祀を推定させるものである。木製大足は泥濘地の農業を進める集団にとっては象徴的な農具であろう。貨泉は、東日本では極めて希少な遺物であり、移入集団が伝世してきた貴重財を、祭祀にあたって投じたとみるべきであろう（報告書では、貨泉は上層から出土したため中世に流通した輸入銭と性格づけている。しかしながら、そうであればもっと多数の宋錢などの中国銭が出土するはずである）。また、多数の玉の未成品の存在は、近くの集落に手工業集団を擁していたことを推測させる。この時期には、鳥川の沿岸にある下佐野遺跡群でも、在地石材を用いた石製模造品生産が開始され、以後東日本における玉生産の中心的位置を占めていくことが知られている。

なお、本遺跡の自然科学分析では、古墳前期初頭には湿地植生であったものが、前期以降水田環境に移行したことが指摘されており、外来集団が拓いた生産エリアと見てよいだろう。熊野前遺跡を眼下にした蟹沢古墳の被葬者は一帯の開発者であり、水源祭祀の主体者であった可能性が高いと考えられる。

4-2 上中居・中居町遺跡群の開発者像

蟹沢古墳より南から西に展開する井野川と鳥川に挟まれた段丘上は、弥生中期後半に一度開発が試行され、環壕集落の高崎競馬場遺跡などが成立した。しかし、弥生後期には一転して遺跡が空白となり（若狭2007）、農業経営がここで頓挫したことが分かる。既述のようにこのエリアは、鳥川の後背地として湧水が豊富であるが、その管理運営に失敗したのである。

そして、古墳時代初頭を迎えると、遺跡が爆発的に増えていくのである。外来系集団が新しいソフトウェアによって一帯の経営を推進し、激しい湧水を制御するための系統的な排水路網の設置に成功したのである。その水源地にあたる上中居遺跡群では古墳前期に開削された多数の水路が検出されており、古代まで繰り返して再築されていることが判明した。

なかでも、上中居辻薬師5次調査区には多数の溝が並走していたが、7号溝からは玉類とともに上方作系浮彫式獸帶鏡の破鏡（口径 12.8cm）が出土している。遺構の状況から5世紀まで伝世され、廃棄されたと解釈されている（高崎市教育委員会2010）が、破鏡のもつ宗教上の効力を考えると、4世紀代に祭祀にあたって献じられ、それが5世紀以降に洗い出された可

能性を考えたい。前期有力首長の水源祭祀にふさわしい遺物である（第5図）。

関東で最も古い墳丘墓である上総の高部 32 号墓（木更津市、31m、前方後方型）に同型式の鏡の破鏡が知られており、東国に最も早く招来された後漢鏡を保有した首長の宗教的権威の高さを類推させてくれる。

高部墳墓群（前方後方型墳丘墓 2 基）は 30m 級の首長墓であることが注目され、このクラスが地域経営を進めると単独勢力の墓の基本フォーマットであることを教える。だとすれば、上中居・柴崎エリアの水系を統べた首長の奥津城も大型墓ではなく、上中居遺跡群に近くに所在する上中居稻荷塚古墳（20m 内外の円墳）やその水系の下流域にある蟹沢古墳クラスも想定内となる。

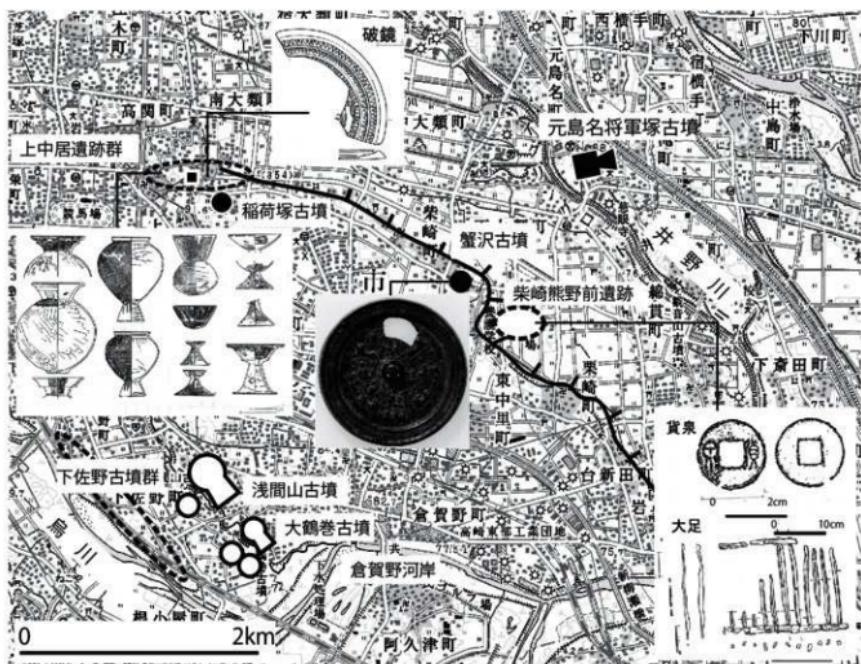
上中居遺跡群では、水路のほかに密度の濃い住居群と方形周溝墓が検出され、上毛野では数がさほど多くない布留式土器の出土も注目される（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007）。集落は3世紀後半から5世紀にかけて成長しており、6世紀前半に衰退し、6世紀後半に復活している。6世紀後半の復活は、先に述べたように、佐野屯倉設置に伴う再開発によると筆者は推測する。

ここで見つかった遺構のうち、中居町一丁目遺跡 1 号方形周溝墓（一辺 9.7m）は特異な遺構である（大木 2007）。周溝の土層断面からみると、最初の溝が埋まつた後に、溝外周が再掘削されているのである。出土遺物も 2 時期あり、古相は3世紀中～後半、新相は4世紀前半～後半となる（第7図）。

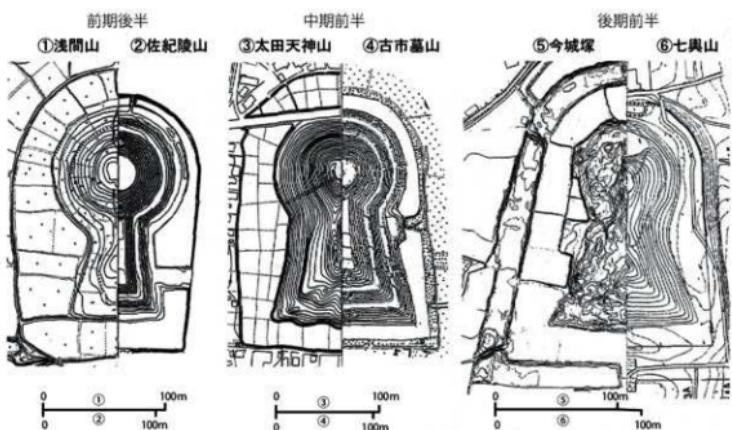
古相土器群は、S 字壺 B 類・東海型大型高坏・同小型器台、南関東系の網目状燃糸文装飾をもつ複合口縁装飾壺や同系統の平底壺、これに加えて樽式系の壺・甕、北武藏から上毛野の鎌川下流域に広がった吉ヶ谷式系の壺・甕がみられる。周溝の四隅から南関東系と樽系の装飾壺が出土しているが、これは南関東の弥生墓に通有の配置方法である（古屋 2007）。

新相土器群には S 字壺 B 類、広口壺、屈折脚高坏、伊勢型二重口縁壺、畿内系二重口縁壺、小型器台がある。

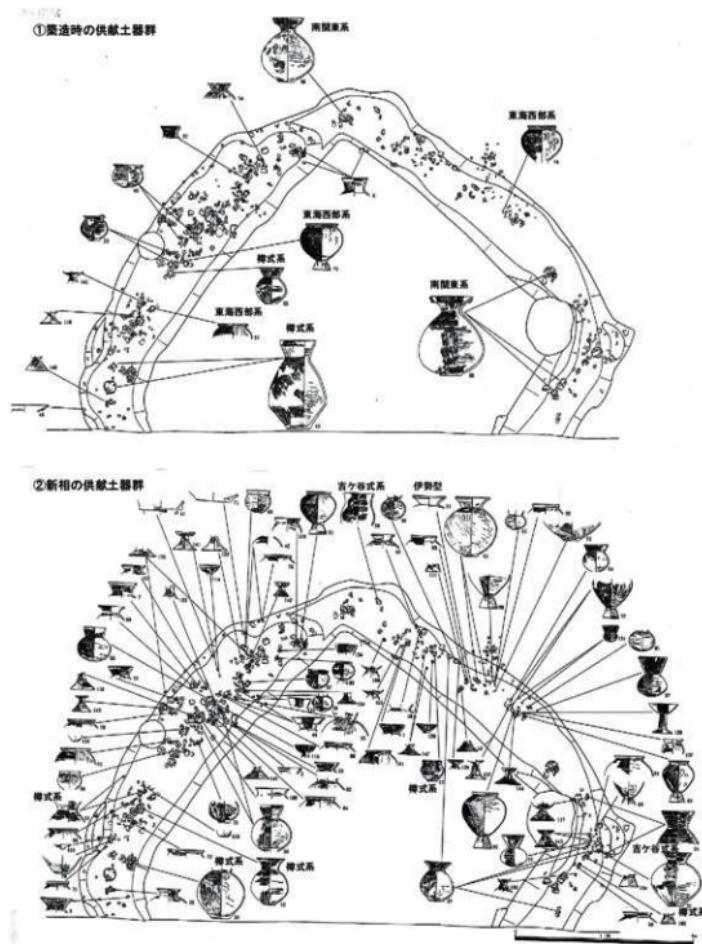
当地域の周溝墓のなかでは異例的な量の葬送用土器が出土し、小型墓ながらに長期にわたって葬送儀礼が継続されていることは重要である。また、古相土器群のなかに、東海西部・南関東・在来樽系・北武藏系の多様な系統の遺物が含まれるのは注意される。一帯に樽集団の集落が存在しないことから、この地を最初に



第5図 中居・柴崎遺跡群一帯の構造



第6図 上毛野とヤマトの前方後円墳の相似



第7図 中居町一丁目遺跡 1号墓

表2 上毛野と北武藏の地域経営に関する比較

	上毛野（A）	北武藏（B）
①低湿地開発と水利技術	柴崎熊野前遺跡の流路と祭祀	反町遺跡の流路と堰造構
②外来系遺物と交流拠点	井野川流域の外来系土器群	反町遺跡・五領遺跡の外来系土器群
③首長による祭祀	熊野前遺跡、中居町遺跡群の水源祭祀	五領遺跡における祭祀（石製腕飾）
④手工業集団の編成	熊野前遺跡・下佐野遺跡の玉造生産	反町遺跡のガラス玉・水晶玉生産
⑤小古墳と三角縁神獸鏡	蟹沢古墳（三角縁神獸鏡2面）	高坂古墳群（三角縁神獸鏡）
⑥大型前方後円墳の成立	大鶴巻古墳・浅間山古墳	野本將軍塚古墳
⑦佐紀政権との関係	佐紀陵山古墳との相似形	宝来山古墳との相似形
津の掌握	倉賀野の津	都幾川沿岸の津

開発した外來系首長の葬礼に際して、近隣の椎集团・吉ヶ谷集团から装飾土器が献じられた可能性が高い。

出土した装飾壺のなかでは南関東系が突出し、配置された位置も周溝の隅角部を占める。報告者の大木紳一郎は、この土器に激しい使用痕跡を見出し、一定の期間の保有された器物であったと主張している。また儀礼に伴う炊爨儀礼に用いた煮沸形態にはS字彫が多い。

このため本墳墓の葬送儀礼の主体は、南関東と東海系の出自が混成した集團を推定したい。儀礼の継続とその盛大さからみて、3世紀代にこの地を開発した外來の先駆的人物（始祖王）が本墳墓に葬られたのではないだろうか。

本周溝墓をそのような位置づけとして考えた場合、後続して成立した蟹沢古墳の特異性は説明しやすくなってくる。上毛野に初期に移入した集團の一派を統括した伝説的人物（中居町一丁目遺跡1号墓の被葬者）を始祖にもち、その首長権を継承して、西暦300年前後に当地域を経営した人物を蟹沢古墳の主として想像したい。弥生時代末に破鏡を所持し、後には正始元年銘鏡を分与されるような、宗教的権威の高い首長の姿を想像できるのではないか。

なお、蟹沢古墳出土三角縁神獸鏡の2面は、舶載1期と舶載3期に相当し、型式的な時間差を有している（岩本2018）。また2面の倭製內行花文鏡も配布されている。

その時間差は、埋葬施設を複数有するか、舶載1期鏡（正始元年銘鏡）が伝世されるなかで繰り返してこの集團に鏡が配布されたかいずれかの事情と理解される。どちらにも決しがたいが、中居町1丁目遺跡1号墓の継続的な祭祀行為と、この鏡の度重なる配布は、当該勢力の強固な継続性と王権との親和性を示唆するものである。

なおこの集團は、前期後半にさらに優勢となり、佐紀古墳群との連携を果たし、倉賀野の津を背景に共立された大鶴巻古墳・浅間山古墳（佐紀陵山古墳の相似墳）を生み出すことになる（第6図、若狭2017）。そして、6世紀前半の中断期を経たのちに、再び王権との関係を構築して佐野屯倉を成立させていくのである。

5 地域経営の様式性—上毛野と北武藏—

ここに述べてきた上毛野の中居・柴崎地区の遺跡群

構造（A）は、今回議論の中核となる北武藏の遺跡群構造（B）と表2のように類似している。

改めて列挙すれば、①外來集團による低湿地開発と水利技術の保有、②外來系遺物が多出する交流拠点、③上位祭祀を執行する首長の存在、④手工業集團の編成、⑤王権からの三角縁神獸鏡の配布（小古墳への副葬）、その後の展開として、⑥佐紀勢力との連携による大規模な首長墓の成立、⑦広域交流の拠点となる川の津の掌握、以上の各項目において共通性が顕著である。

①についてはA Bともに低湿地の大水路が検出されている。②についてはA Bともに東海系・畿内系ほか豊富な外來系土器が出土している。③についてはAの破鏡・貨泉の保有、Bの五領遺跡の石製品の存在など。④はAの石製品製作、Bの水晶・緑色凝灰岩製品・ガラス製品の製作。⑤はAの蟹沢古墳、Bの高坂における三角縁神獸鏡の出土（いずれも小～中型墓への配布）、⑥はAの大鶴巻古墳・浅間山古墳の佐紀陵山古墳との相似関係（若狭2018）、Bの野本将軍塚古墳と宝来山古墳との相似の指摘（坂本2017）、並びに大鶴巻古墳（123m）と野本将軍塚古墳（115m）の規模の近接、⑦についてはAの倉賀野津の掌握（若狭2017）とBの都幾川の津の指摘（坂本2017）である。

以上のように、両地域は類似した經營様式の展開によって地域形成を成し遂げていったことがわかる。こうした經營様式は、古墳前期の社会的なモデルとして、各所で展開し、その経済的な成果を踏まえて100mを超える大型前方後円墳を生み出していったのである。

引用文献

- 岩本 崇 2018「銅鏡・青銅製品」『前期古墳編年を再考する』
六一書房
- 梅沢重昭 2010a「中里見原遺跡」『棟名町誌 資料編1』棟名町誌刊行委員会
- 梅沢重昭 2010b「本郷大塚古墳」『棟名町誌 資料編1』棟名町誌刊行委員会
- 大木紳一郎 2007『中居町一丁目遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県教育委員会 1980『下郷遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『柴崎熊野前遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『中居町一丁目遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009・2011・2012『反町遺跡』I・II・III
- 坂本和俊 2017「集落遺跡が語る東松山の3～4世紀の社会」『三

- 角縁神獸鏡と3～4世紀の東松山』六一書房
- 下垣仁志 2011『古墳時代の王權構造』吉川弘文館
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 城倉正祥・青木弘・伝田郁夫 2017『デジタル技術を用いた
古墳の非破壊調査研究』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 高崎市教育委員会 2010『上中居遺跡群2』
- 田口一郎ほか 1981『元鳥名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 玉村町教育委員会 2007『砂町遺跡・尾柄町田遺跡・中之坊遺跡』
- 東松山市教育委員会 2017『三角縁神獸鏡と3～4世紀の東松山』六一書房
- 前橋市教育委員会 1970『前橋天神山古墳図録』
- 廣瀬 覚 2015『古代王權の形成と埴輪生産』同成社
- 古屋紀之 2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- 若狭 徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 若狭 徹 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』211

図表出典一覧

- 図1 横名町誌編さん委員会 2010『横名町誌資料編1』図236
(248p)・図908(780p)・図909(783p)・付図、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『熊野堂遺跡(2)』図209(353p)
から若狭作成。
- 図2 高崎市教育委員会 1980『元鳥名將軍塚古墳』付図2、
図15～17(21～23p)、高崎市教育委員会 1985『矢中村東B遺跡』図4(6p)から若狭作成。
- 図3 群馬県教育委員会 1980『下郷』211図(235p)・217図(246p)
から若狭作成。
- 図4 若狭作。
- 図5・6 若狭徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館・
図17(59p)、正始元年銘三角縁神獸鏡写真は同書の図16(58p)
掲載・東京国立博物館所蔵、図20(69p)から若狭作成。
- 図7 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『中居町一丁目遺跡』
図46・47(47・49p)より若狭作成。
- 表1・2 若狭作成。

東京都・神奈川県の前期古墳

早稲田大学大学院文学研究科 伝田郁夫

はじめに

本論で対象とする東京都・神奈川県は、古代の領域としては武藏国・相模国に含まれる。古墳時代をとおして、東国（関東地方）の他地域と比較しても、古墳の築造数は少ない傾向にある。また、前期には卓越した大型前方後円墳や河川流域に展開した首長墓系列が中期以降になると矮小化し、7世紀以降（終末期）は、地域によって横穴墓が爆発的に流行するなど、独特の造墓活動の展開が特徴的である。

近代に入って東京が首都となったことで、都下および神奈川県は、開発に伴う都市化の波がいち早く押し寄せたこともあり、戦前期にかなりの古墳が湮滅し、発掘調査も古い事例が多いため、他地域と比べて情報量は決して多くない。また、古墳の被葬者が母体とした集団（集落）の様相が判明している事例も少なく、支配領域の解明も進んでいない。

本論では、こうした地域の事情を踏まえつつ、埼玉県比企地域を代表する野本将軍塚古墳が築造された同時代における南関東地方の古墳について、その築造傾向と分布状況を概観し、北武藏との対比を行ながら、南武藏および相模に大型前方後円墳が築造された背景に迫りたい。

1 東京都・神奈川県の前期古墳の分布と傾向

東京都・神奈川県の両都県域において、おおむね4世紀を中心とする前期古墳の分布は、南武藏（現在の東京都および神奈川県川崎・横浜の両市域）では多摩川下流域、相模（上記の北東部を除く現在の神奈川県）では相模川の中・下流域に集中する。また、1999（平成11年）に発見された三浦郡葉山町および逗子市に所在する長柄桜山古墳群（1・2号墳）は、相模湾に面した三浦半島の西側に位置しており、墳丘長約80m以上の大型前方後円墳が集中して築造された地域としては、以上の3箇所を挙げることができる（第1図）。

南関東地方における造墓活動は、中期以降は全体的に収束する傾向にあり、いずれの地域でも最大の前方後円墳が築造された時代は前期に限定される。また、

多摩川左岸の荏原（台）古墳群中に所在する田園調布古墳群や東京湾に面した港区芝古墳群のように、中期に目立った造墓活動は見られないものの、後期になると、前期の大型前方後円墳の周辺に小規模な円墳群を中心とする古墳群が築造されることがある。全体的に規模は縮小化するものの、古墳が比較的密集して築造される地域の傾向は、後代にも残るといえる。

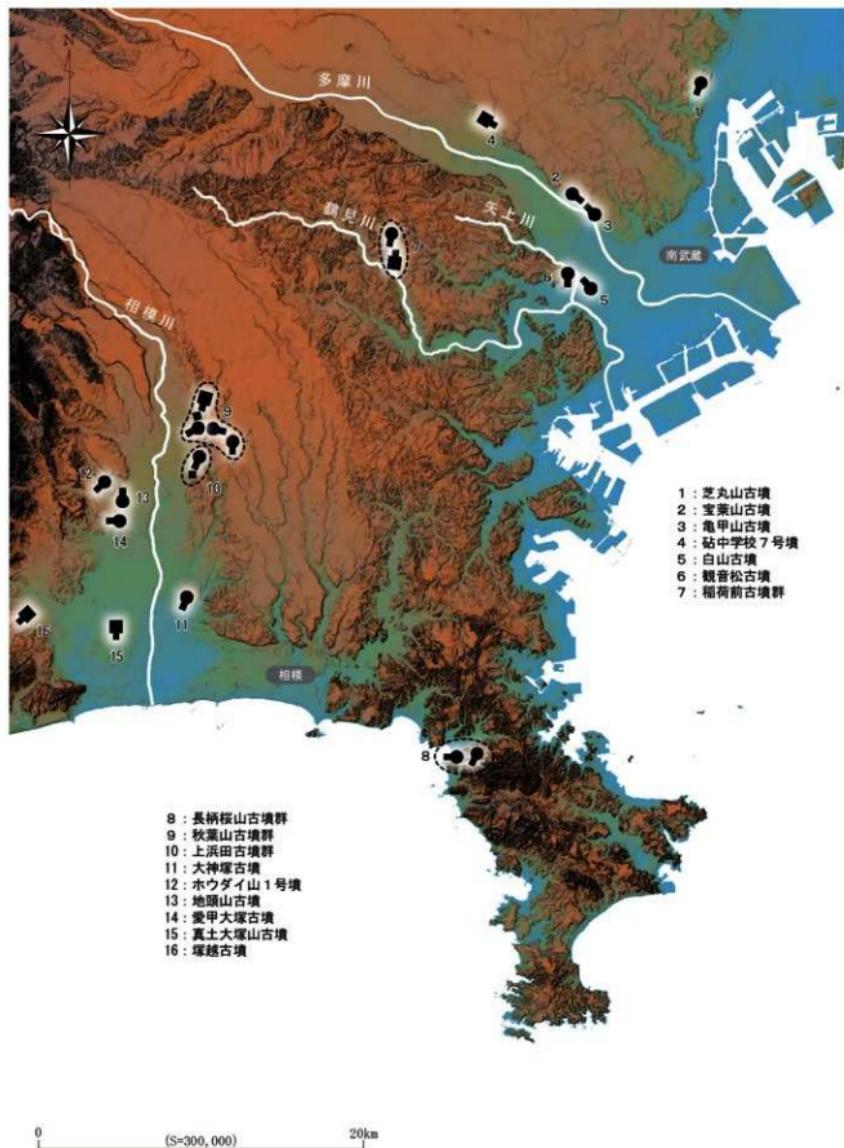
本論では、①多摩川下流域、②三浦半島、③相模川流域の3地域ごとに、代表的な古墳を取り上げることとする。なお、本論では、『前方後円墳集成』において4期までに位置付けられている古墳を前期古墳として取り扱うこととする。

2 多摩川下流域の前期古墳

多摩川下流域は、現在の行政区分においては、東京都大田区および世田谷区、神奈川県川崎市にあたり、都県境をなしている。左岸は大田区から世田谷区にかけての荏原台地上に荏原（台）古墳群が展開し、より下流にあたる大田区側を田園調布古墳群、中流に近い世田谷区側を野毛古墳群と呼称している。古墳時代前期は田園調布古墳群、中期は野毛古墳群の造墓活動が活発化する。一方、右岸は沖積低地の南側、鶴見川の支流にあたる矢上川を挟んで、川崎市幸区の加瀬台地には加瀬古墳群が、横浜市港北区の日吉台には日吉台古墳群が展開している。

荏原（台）古墳群は、多摩川によって形成された標高30～40mの河岸段丘上に位置し、通称荏原台地と呼ばれる舌状に延びた武藏野台地の南東端に展開している。台地の先、東側には沖積低地が広がっているが、近世に始まる新田開拓などに伴う埋め立て以前は、海岸線は現在よりも古墳に近い位置にあったと想定される。大田区側の田園調布古墳群には、いずれも墳丘長100mを超える2基の大型前方後円墳が所在する。

宝菜山（蓬萊塚）古墳は、標高約30～40mの尾根上に位置しており、比較的幅広な平坦面に占地している。1934（昭和9）年の宅地造成に伴う土取り工事によって後円部が破壊され、粘土層と思われる埋葬主体部から倣製四帆鏡1面をはじめ、硬玉製勾玉・碧玉製



第1図 東京都・神奈川県の主要前期古墳

管玉・ガラス製丸玉・ガラス製小玉・紡錘車形碧玉製品、槍形鉄器・鉄劍・鉄刀など、大量の副葬品が出土した。また、1995（平成7）年度～1996（平成8）年度にかけて、公園整備に伴って範囲確認調査が実施され、墳丘長97m・後円部径52m・前方部幅37m・後円部高11m・前方部高8mをはかる、後円部3段・前方部2段の前方後円墳と推定されている（**第2図**、**野本ほか1998**）。同古墳については、くびれ部から出土した土器や前方部前端が壘形に広がる形態から、近年では、築造時期を『前方後円墳集成』の3期以前に遡つて考える見解も提示されている（**野本ほか1998**）が、いずれにしても多摩川下流域において築造された最古級の大型前方後円墳であることには異論がなく、4世紀前半の年代が与えられる。

一方、亀甲山古墳は、戦前期の墳丘測量調査のほか、1988（昭和63）年度に大田区教育委員会が実施した再測量調査以外、本格的な発掘調査は行われていないため、埋葬主体部の構造や副葬品については明らかになっていない。墳丘の現状観察からは、葺石・埴輪は認められず、周溝の存在も未確認である。後円部の後端がかつての浄水場によって破壊されているのをはじめ、前方部前端が公園の造成により削平を受けているが、それ以外の墳丘の遺存状態はおむね良好である。墳丘長107.25m・後円部径66m・前方部幅49.5m・後円部高約11m・前方部高約7mの規模（推定復原値を含む）をはかる2段築成の前方後円墳とされている（**第3図**）。測量調査の結果から、築造企画については、奈良県奈良市に所在する佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵古墳）と相似墳であるとの指摘がある（**野本1992**、**石部・宮川1999**）。不確定要素が大きいものの、後円部と前方部との比高および前方部幅からみて、中期古墳とは見なし得ない墳丘形態をとることから、宝菜山（蓬萊塚）に後続する築造年代が考えられ、多摩川流域において、野本将軍塚古墳と比較的近似した時期に築造された前方後円墳であるといえよう。

なお、本論では大型前方後円墳を主な対象としているため、詳細は取り上げていないが、宝菜山（蓬萊塚）・亀甲山古墳と同じく大田区田園調布に所在する扇塚古墳は、1996（平成8）年の発掘調査により、3基の埋葬主体部が検出されている。うち1号主体は墓壇底に木炭を敷き詰めた木棺を直葬したもので、内行花文鏡1面のほか、鉄劍・鉄鎌・鉗・ガラス小玉などの副葬品が出土したほか、封土中より素文鏡が、周溝底面からは元屋敷期併行の土師器（高杯）が出土している（**河合編2001**）。

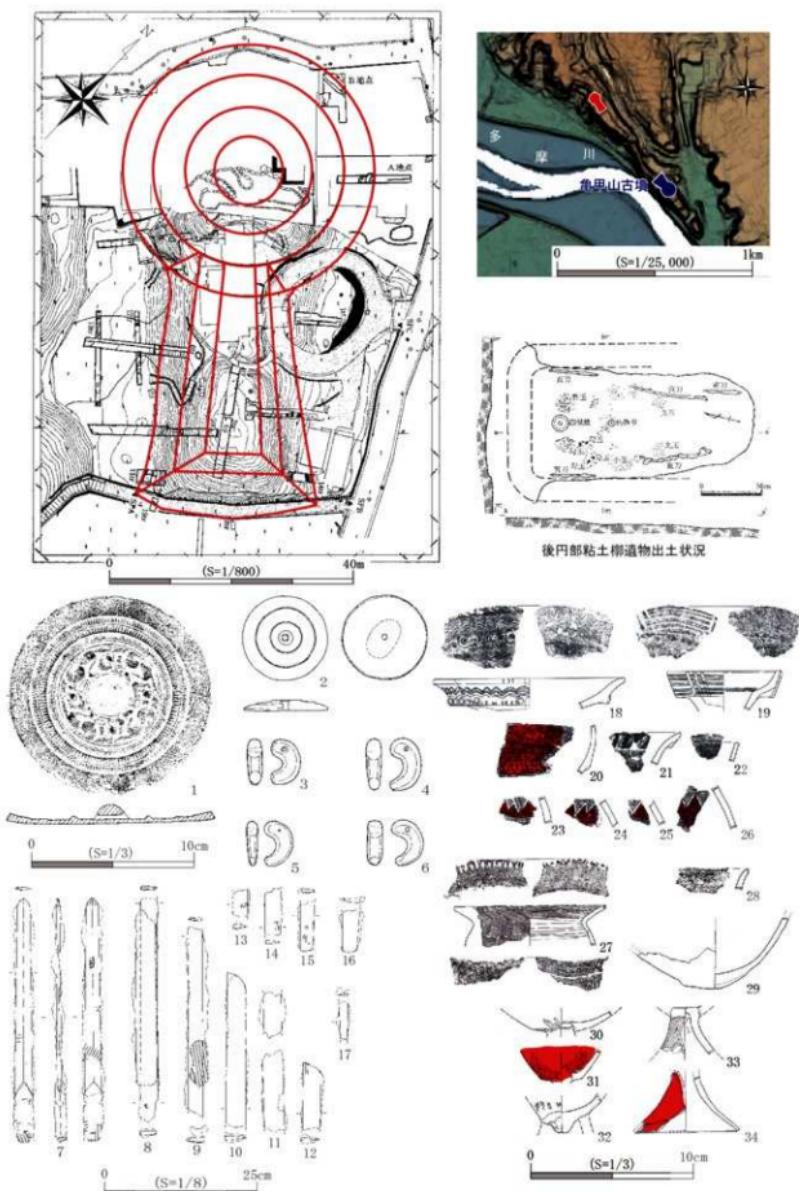
後世の改変が著しく墳丘形態が詳らかではないが、径約20m・高さ約3mの円丘状を呈しており、墳長約40mの前方後円墳もしくは前方後方墳である可能性を指摘する意見もある（**河合編2001**）。

また、多摩川下流域と同じく、武藏野台地東辺端部の東京都港区には、芝丸山古墳が所在する（**第4図**）。改変が著しく、正確な築造年代や規模は不明であるが、墳丘長106mをはかる前方後円墳とされている（**大谷ほか1985**）。江戸開幕以来の近世の開発行為により湮滅した古墳は他にも存在すると想定されるが、東京低地および東京湾をのぞむ武藏野台地縁辺部に築造された大型前方後円墳の類例として把握できる。

次に、多摩川右岸に目を向けると、沖積低地と鶴見川支流の矢上川に挟まれた、通称夢見ヶ崎と呼ばれる独立丘陵の加瀬台地には、加瀬台古墳群が展開している。白山古墳は、加瀬台古墳群中で最大の前方後円墳で、1937（昭和12）年の慶應義塾大学による発掘調査の後に湮滅したが、墳丘長87m・後円部径42m・前方部幅37m・後円部高10.5m・前方部高5mをはかる前方後円墳である（**第5図**、**柴田・森1953**）。埋葬主体部として、後円部に1基の木炭櫛と2基の粘土櫛、前方部に1基の粘土櫛を有していた。墓壇の断面形態から、主体となる埋葬施設は後円部の木炭櫛と考えられ、副葬品として三角縁四神四獸鏡1面・内行花文鏡1面をはじめ、鉄刀・鉄劍・刀子・鉄鎌・鉄斧・鉗・鎌・鑿・錐・楔形鉄器・ガラス製小玉が出土している。また、後円部の北粘土櫛からは、乳文鏡1面・珠文鏡1面をはじめ、瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製の丸玉・小玉のほか、鉄器片などが、前方部の粘土櫛からは、櫛齒文鏡1面をはじめ、瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製丸玉が出土している。

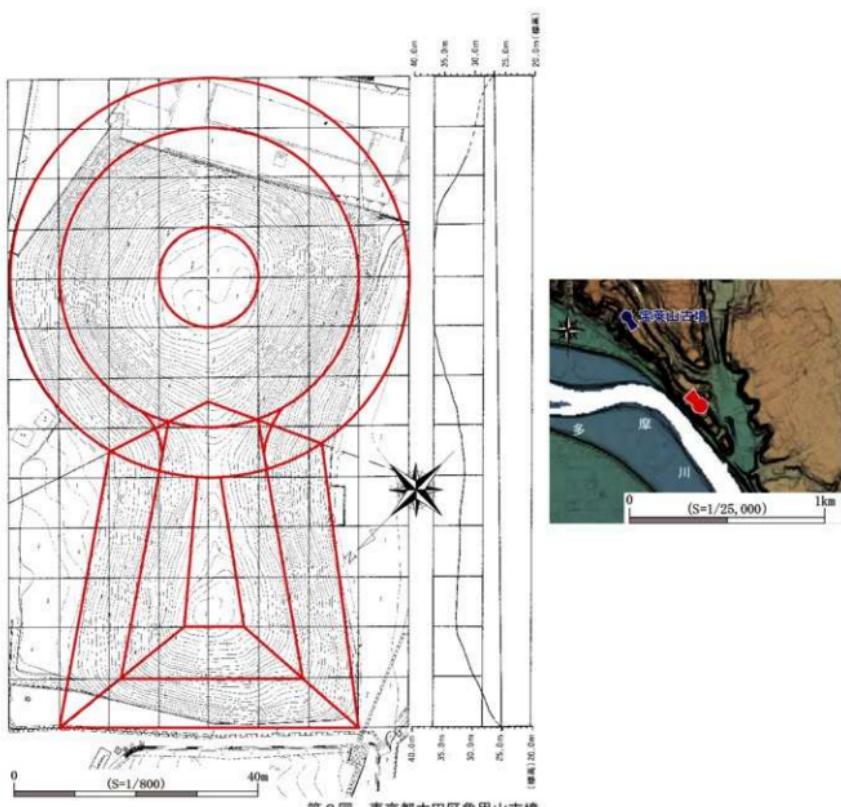
また、加瀬台地の西側、矢上川の対岸の日吉台地には親音松古墳が所在していた。1938（昭和13）年の土取り工事によって湮滅したが、慶應義塾大学の発掘調査により、後円部中央の粘土櫛から内行花文鏡1面をはじめ、碧玉製紡錘車・銅鏡・硬玉製勾玉・小型勾玉・算盤玉・管玉・ガラス小玉・直刀・鉄斧などが出土している（**第6図**、**甘粕・和島1958**）。近年の安藤広道氏の再検討により、墳丘長100mを超える前方後円墳と推定され、白山古墳に後続すると考えられている（**安藤2009**、**浜田ほか1996**など）。

以上のように、東京湾を間近に臨む多摩川下流域においては、最大級100m前後の大型前方後円墳が相次いで築造される。多摩川の氾濫原によって形成された



第2図 東京都大田区宝萊山古墳と出土遺物

(1: 仿製四獸鏡、2: 碧玉製鉤鍾車形石製品、3~6: 硬玉製勾玉、7~17: 鉄製品、18~34: 墳丘出土土器)



第3図 東京都大田区鬼甲山古墳

沖積低地上を挟んで対峙する台地上に、前期のほぼ100年間に2基ずつの大型前方後円墳の築造されている状況は、沖積低地における集落遺跡の調査が進んでいないものの、この地域に安定した首長勢力が存在していたことの証左といえる。

3 三浦半島の前期古墳

長柄桜山古墳群は三浦半島西側の付け根、標高約50m～120mの丘陵上に位置する（第7図）。墳丘長約90mの前方後円墳2基からなる古墳群であり、神奈川県内に現存する古墳としては最大級である。史跡整備に伴う発掘調査の結果、1号墳は墳丘長91.3m、後円部高約7.7m、前方部高約4.9mをはかり、後円部3段・前方部2段に築成された前方後円墳で、後円部に

粘土梆とみられる埋葬主体部、外表施設として円筒埴輪と壺形埴輪を有することが分かっている（佐藤・山口2012）。また、2号墳は墳丘長約88m、後円部高約7.3m、前方部高約8.7mをはかる前方後円墳で、円筒埴輪・壺形埴輪のほか、葺石を備えており（柏木・依田2001）、こうした特徴は南武藏・相模の前期古墳においては希少な事例である。

古墳の築造年代に関しては、出土遺物などから1号墳が4世紀後葉に比定され（佐藤・山口2012）、2号墳が後出すると考えられる。この2基の古墳の立地は、相模湾および東京湾への眺望や丘陵北側に展開する集落の存在を意識したものと考えられることから、相模湾と東京湾を結ぶ海上交通を掌握した首長が、そのルートの要衝に古墳を築造したとする説が提示されている（川西2004・岸本2004）。

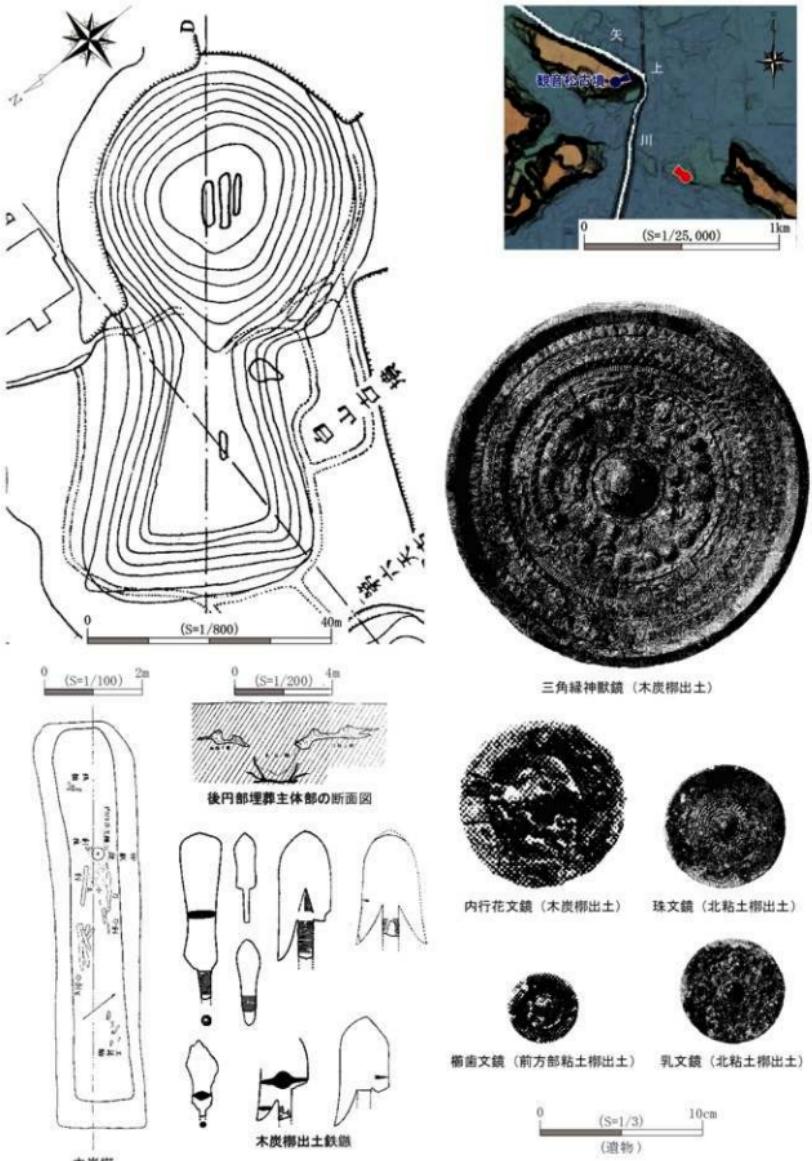


第4図 東京都港区芝丸山古墳

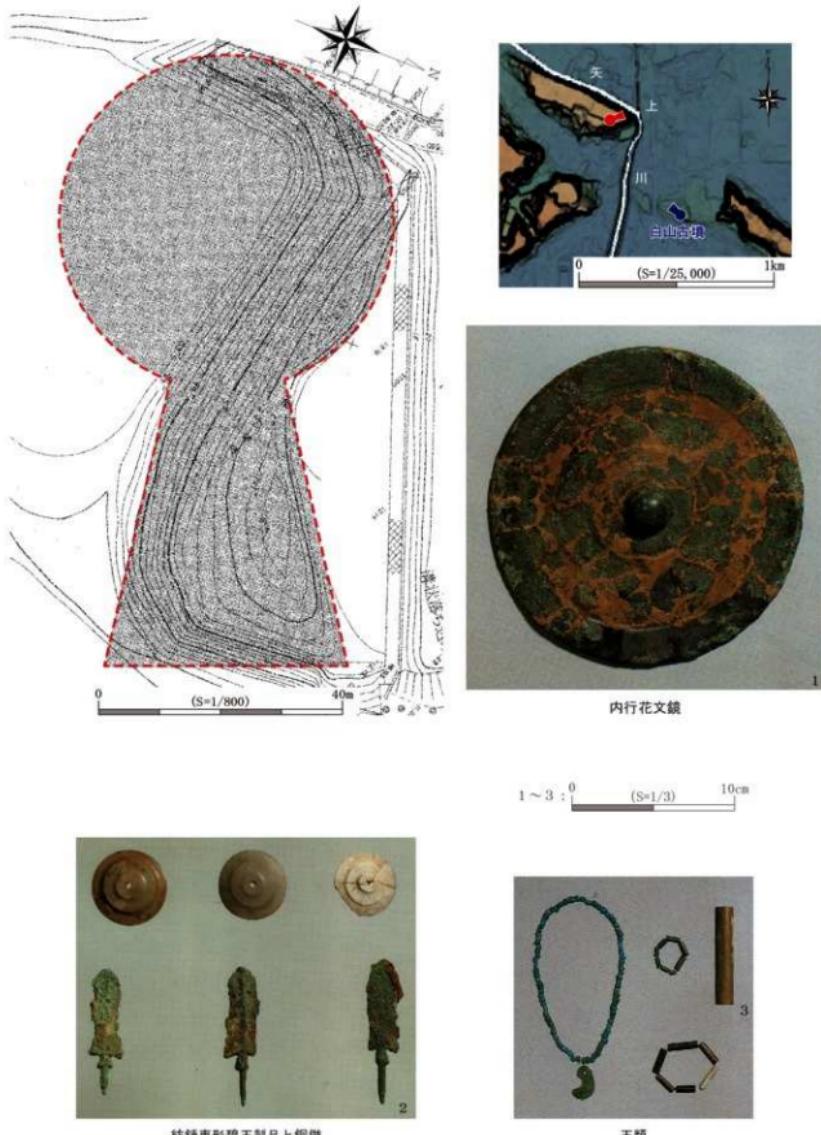
4 相模川流域の前期古墳

相模川とその支流の流域には100mクラスの大型前方後円墳は所在しないが、相模湾に面した河口付近から中流の海老名市（東岸）・厚木市（西岸）の周辺に至るまで、両岸に約50～70m程度の前方後円墳が築造された。東岸（左岸）の高座郡寒川町・海老名市には、大（応）神塚古墳（前方後円墳・墳丘長約51m）、東岸最大の前方後円墳・瓢箪塚古墳（墳丘長65m以上）

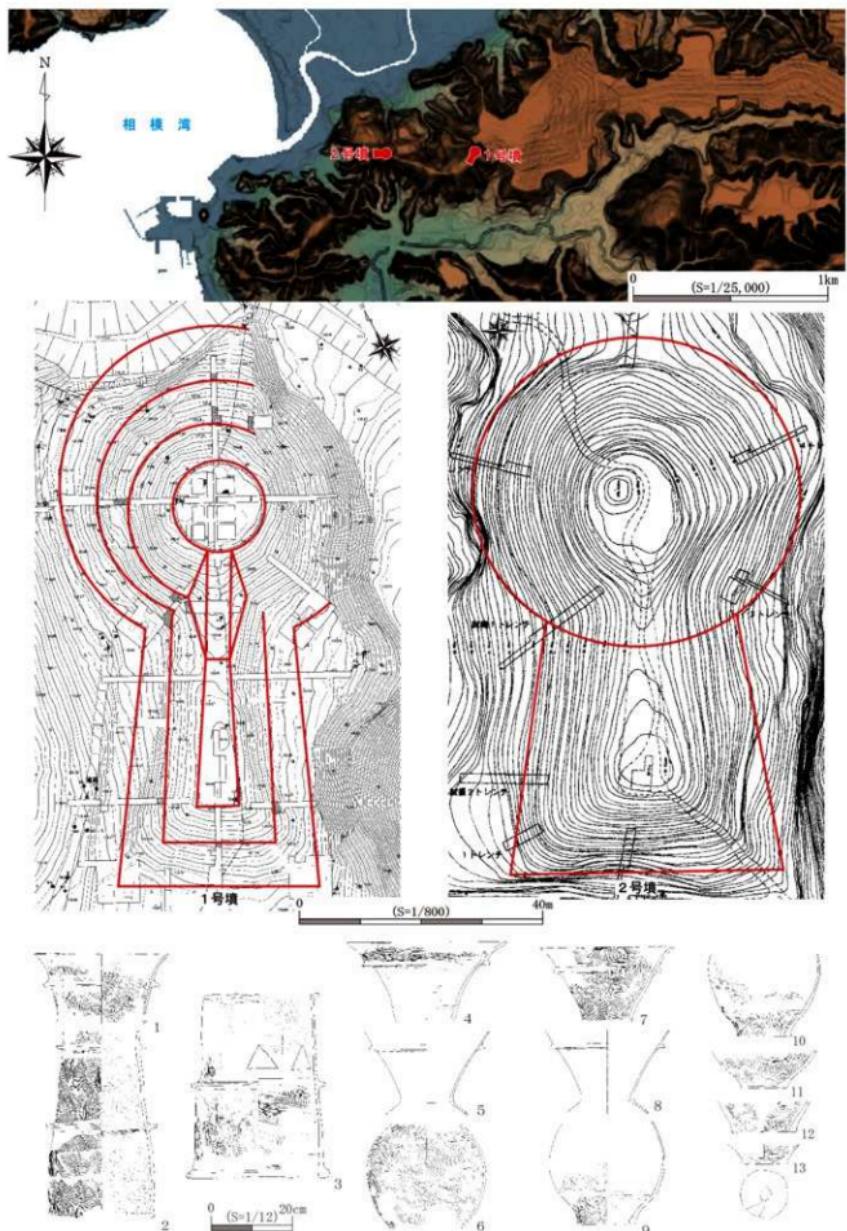
を擁する上浜田古墳群や後述する秋葉山古墳群などが所在しており、沖積低地をのぞむ丘陵や台地の縁辺部に立地する。西岸（右岸）の厚木市では、相模川水系の玉川をのぞむ丘陵の先端部に、ホウダイイ山1号墳・地頭山古墳・愛甲大塚古墳など、墳丘長70mクラスの前方後円墳が築造されている。また相模川の西側を流れる平塚市の金目川水系の砂丘上には、三角縁神獣鏡・銅鏡・巴形銅器などの副葬品が出土し、前方後方墳の可能性も残す真土大塚山古墳が所在するほか、この水



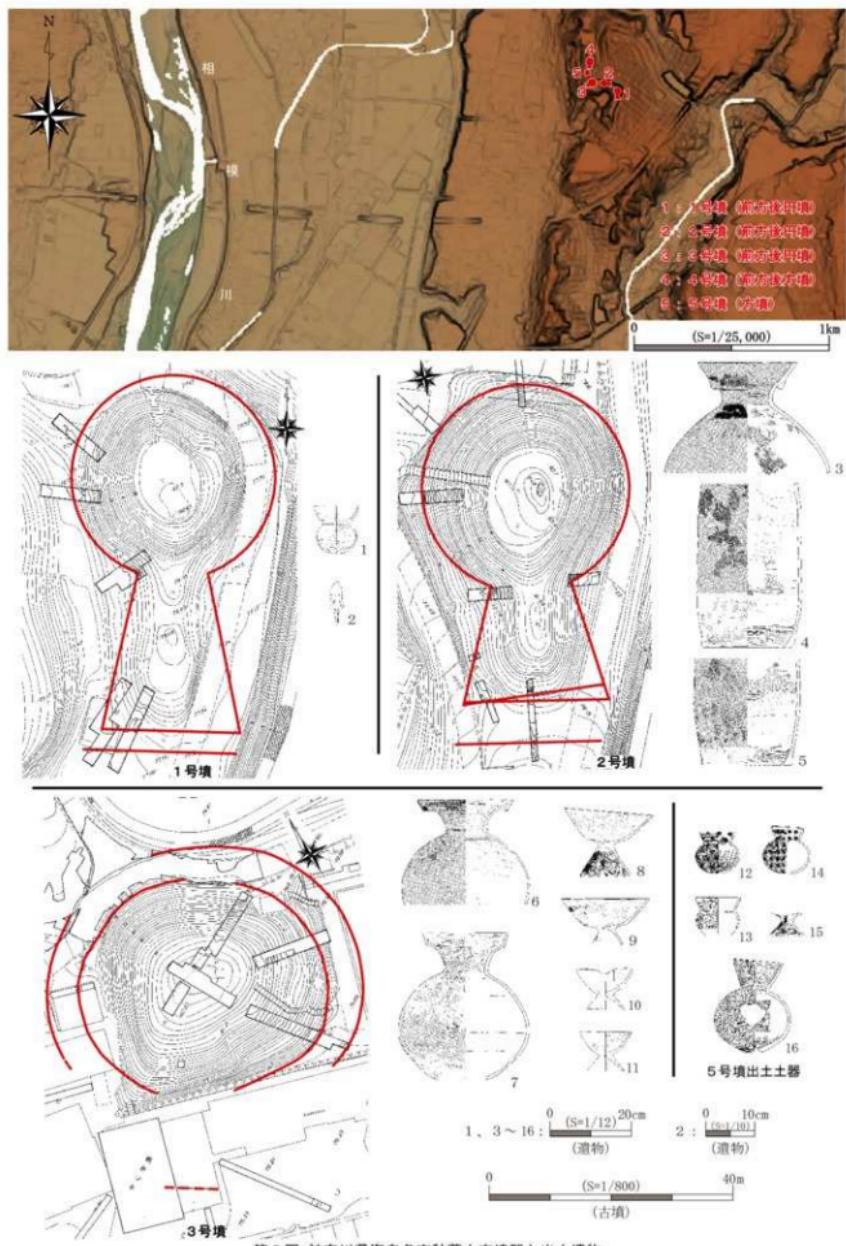
第5図 神奈川県川崎市白山古墳と出土遺物



第6図 神奈川県横浜市観音松古墳の墳丘推定図と出土遺物



第7図 神奈川県三浦郡葉山町・逗子市長柄桜山古墳群と2号墳出土遺物（1～3：円筒埴輪、4～13：壺形埴輪）



第8図 神奈川県海老名市秋葉山古墳群と出土遺物

系には塚越古墳などの前方後方墳が築造されており、周辺でも方形周溝墓群や方墳が多く発見されている地域であることから、前方後円墳が卓越する東岸とは様相を異にしている。

相模川流域に所在する古墳の大半は、台地の縁辺から丘陵にかけて築造されているが、同一台地（もしくは丘陵）上に古墳群を形成して展開する事例は少なく、単独墳として散在しているイメージが強い。

その中で、相模川の約2km東、座間丘陵に位置する秋葉山古墳群（海老名市）は、主に前方後円形墳丘墓1基（3号墳）、前方後円墳2基（1・2号墳）、前方後方墳1基（4号墳）、方墳1基（5号墳）の合計5基から構成される古墳群である（第8図、押方ほか2002）。前方後円墳の規模としてはやや小さい（1号墳で墳丘長59m）ものの、3世紀後半の3号墳の築造を嚆矢として、4世紀代を中心に2号墳→1号墳へと定型化した前方後円墳が築造されており、関東地方における墳丘墓から前方後円墳への成立過程が、同一丘陵上の古墳群において展開している事例として捉えることができる。古墳群内には前方後方墳（4号墳）も存在することから、首長墓系列のあり方については議論の余地も残る（広瀬2007）が、規模としては南武藏に及ばないものの、相模川流域において、比較的安定した継続性を有する首長墓系列の存在をうかがわせる古墳群であると考えることができよう。

5 古墳の分布と立地からみた南関東の前期古墳

ここまで、対象とする3地域における前期古墳の築造の動向を探ってきた。南武藏の多摩川下流域においては、古墳時代前期の約100年間に、両岸でそれぞれ2基の100m超クラスの大型前方後円墳が築造されている。これらの古墳は、沖積低地をのぞむ標高約30～40mの舌状台地もしくは独立丘陵など、比較的低平な台地上に占地しており、前期古墳に独特な立地のあり方を示している。

一方、相模では、三浦半島の丘陵上に2基の90m級の大型前方後円墳からなる長柄桜山古墳群が築造されている。南関東では類例の少ない外表施設に円筒埴輪・壺形埴輪（1・2号墳）のほか、葺石（2号墳）を有するなど、在地系とは異なり外来系の要素を多く取り入れた古墳として特筆される。標高100m以上の丘陵上の尾根に築造されている状況は、多摩川下流域に展開する古墳とはやや趣を異にするが、両地域の古墳に

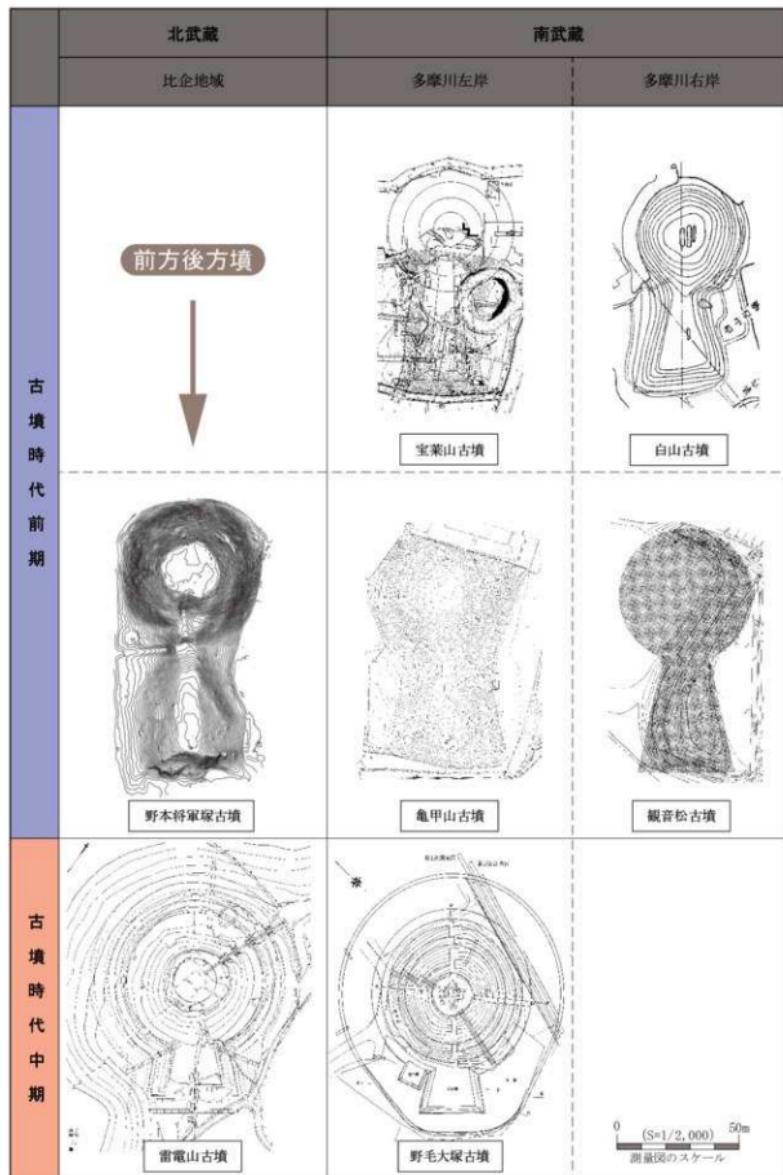
共通しているのは、舟運や物流に大きな役割を果たしたであろう中核河川（海上交通）および内湾（港湾機能）や沖積低地（集落）など、古墳の築造に際して、最も重要な諸条件に適して占地している点にあるといえる。この点に南武藏や相模の海浜部に築造された前期古墳の特徴があると考える。

一方、内陸に向かう相模川中流域において、秋葉山古墳群が築造された背景については、西川修一氏の「相模川を介した水上交通と武藏方面へ推定される道（現在の国道246号線に沿う）の交点にあり、交通要所と弥生時代後期から古墳時代前期の相模川水系における土地利用の北限の地理的な定点であり、ランドマーク的な存在であった」（西川2001）という指摘があるが、野本将軍塚古墳が所在する東松山市の比企地域は、古代には東山道武藏路を介して南武藏と繋がっていたと考えられ、相模川流域の後期古墳（厚木市登山1号墳）から出土した埴輪に、比企地域の影響を受けたと見られる事例が存在する（城倉2009）ことから、この流域における造墓活動は、南・北両武藏とのなんらかの関係性を有していた可能性が挙げられよう。

6 中期以降の古墳の変革とその背景

中期になると、関東地方では、常陸（茨城県）・上毛野（群馬県）・下総・上総（千葉県）といった地域では、古墳時代をとおして最大級の前方後円墳が築造されるようになり、古墳の大型化の時代が到来する。一方、相模地域では古墳の築造は極端に低調になり、南武藏でも多摩川左岸の野毛大塚古墳（寺田ほか編1999）に代表されるように、造墓活動の中心は世田谷区から狛江市にかけての中流域へと移動していく。野毛大塚古墳は、後円部直径（67m）の規模だけで言えば墳丘長120m前後の前方後円墳に匹敵する大型古墳でありながら、前方部が短小な帆立貝式（形）古墳の墳丘形式を採用しており、この時期の野毛古墳群は、野毛大塚古墳を頂点とした帆立貝式（形）古墳とその下位に位置付けられる造出付円墳や小円墳で構成されるようになり、前期における田園調布古墳群のあり方とは大きく様相を変貌させる。

一方、比企地域を中心とする北武藏においても、野本将軍塚古墳に時期的に後続する雷電山古墳が、野毛大塚古墳とほぼ同規模の帆立貝式（形）古墳となるよう（坂本ほか1986）、南北武藏から大型の前方後円墳が姿を消すことになる（第9図）。



第9図 古墳時代前～中期における南北武藏の主要大型古墳変遷イメージ

野本將軍塚古墳が築造された前期には、多摩川下流域・三浦半島・相模川流域において、規模の差こそあれ、それぞれ継続して首長墓と呼ぶに相応しい前方後円墳と古墳群が築造された。北武藏において傑出した規模を有する野本將軍塚古墳が築造されたほぼ同時期に、それに拮抗し得る勢力が南関東地方に展開していたことが、古墳の分布からも裏付けられる。しかし、中期に至って、相模地域の古墳の築造が調落し、南北武藏とともに前方後円墳の築造に規制がかかる背景には、畿内もしくは毛野など、同時に地域最大級の前方後円墳を築造した東国の他地域との関係性に変化が生じた結果と考えられる。この点については、地域相互の関係性の追究が必要であり、今後の研究課題としておきたい。

おわりに

古代日本の国郡制度において、武藏国は現在の埼玉県・東京都・神奈川県の一部にまたがる広大な地域を版図としている。古代の領域をそのまま前代の古墳時代に当てはめて考えることには慎重であるべきだが、近年の古墳研究において、後期以降、南武藏における造墓活動は、北武藏のそれと連動する要素が多いことが指摘されている（[伝田 2015](#)・[城倉 2018](#)など）。

野本將軍塚古墳が築造された古墳時代前期の比企地域と南関東地方の同時期の大型前方後円墳を比較すると、前者では前方後円墳を経て野本將軍塚古墳が築造されるのに対して、後者では2代にわたり大型前方後円墳が築造されている（[第9図](#)）。立地や墳丘の築造企画の面でも共通する点は決して多くない。これは、内陸部の北武藏と海浜部の南武藏という、大きく異なる地理的条件に起因する点もあるが、古墳時代前期の造墓活動の特質から、北と南の武藏は、それぞれに見合う条件の中で独自の支配領域を經營していたと想定できる。

後期になると、大宮台地上に武藏国造一族の墓域と考えられる埼玉古墳群が築造されながら、最終的に武藏国府や国分僧寺・国分尼寺が多摩川流域の東京都府中市・国分寺市に置かれるようになり、武藏国をめぐる政治的流動性は、古墳時代前期から顕在化しているようにも思える。

引用文献

- 廿翁 健・和島誠一 1958 「古墳時代」『横浜市史』第1巻 横浜市
 安藤広道 2009 「観音松古墳の研究Ⅰ 墳丘及び墳丘外施設の復元」『史学』78-4 三田史学会
 石部正志・宮川 徹 1999 「東北・関東の前方後円墳の築造企画案」『前方後円墳の築造企画』東北・関東前方後円墳研究会
 大谷 猛ほか 1985 「都心部の古墳」『都心部の遺跡一貝塚・古墳・江戸一』東京都教育委員会
 押方みはる・山口正憲・小坂延仁 2002 『秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書—第5～9次調査—』海老名市教育委員会
 柏木善治・依田亮一 2001 『長柄・桜山1・2号墳 測量調査・範囲確認調査報告書』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
 河合英夫編 2001 『扇塚古墳発掘調査報告書』扇塚古墳発掘調査団
 川西安幸 2004 「長柄・桜山の時代」『シンポジウム前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国指定記念講演会 未来に活かす遺跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
 岸本直文 2004 「三角縁神獣鏡とヤマト政権」『シンポジウム前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国指定記念講演会 未来に活かす遺跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
 坂本和俊・佐藤好司・金子彰男 1986 「東松山市雷電山古墳」『埼玉県古式古墳発掘調査報告書』埼玉県史編さん室
 佐藤仁彦・山口正憲 2012 「国指定史跡 長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査報告書」逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
 栄田常恵・森 貞成 1953 『日吉加瀬古墳』三田史学会
 城倉正祥 2009 「埴輪生産と地域社会」学生社
 城倉正祥 2018 「北武藏の埴輪生産と埼玉古墳群」『史跡埼玉古墳群総括報告書』I、埼玉県教育委員会
 城倉正祥・青木 弘・伝田郁夫編 2017 「デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究」早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
 寺田良喜・三浦淑子編 1999 『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会
 伝田郁夫 2015 「古墳時代後期における埴輪生産の変革とその背景—南武藏を中心にして」『考古学ジャーナル』667
 西川修一 2001 「相武国の萌芽」『相武国古墳—相模川流域の古墳時代—』平塚市博物館
 野本孝明 1992 『田園調布本町貝塚発掘調査 国史跡亀甲山古

- 墳測量調査 昭和 63 年度～平成 3 年度発掘調査概要』(『大田区の埋蔵文化財』第 12 集) 大田区教育委員会
- 野本孝明ほか 1998 『東京都指定史跡宝萊山古墳—大田区立多摩川公園拡張部公園整備に伴う範囲確認調査報告書一』東京都指定史跡宝萊山古墳調査会
- 浜田晋介ほか 1996 『加瀬台古墳群の研究 I—加瀬台 8 号墳の発掘調査報告書一』(『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』2) 川崎市市民ミュージアム
- 広瀬和雄 2007 「相模の二つの古墳群—秋葉山古墳群と長柄・桜山古墳群—」『武藏と相模の古墳』雄山閣
- 横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986 『古代のよこはま』横浜市教育委員会

図版出典一覧

- 第 1 図 (安藤 2009)・(大谷ほか 1985)・(押方ほか 2002)・(柏木・依田 2001)・(佐藤・山口 2012)・(柴田・森 1953)・(城倉ほか編 2017)・(野本 1992)・(野本ほか 1998) をもとにして作成。
- 第 2 図 (野本ほか 1998) をもとにして作成。
- 第 3 図 (野本 1992) をもとにして作成。
- 第 4 図 (大谷ほか 1985) をもとにして作成。
- 第 5 図 (柴田・森 1953) をもとにして作成。
- 第 6 図 (安藤 2009)・(横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986) をもとにして作成。
- 第 7 図 (佐藤・山口 2012) をもとにして作成。
- 第 8 図 (押方ほか 2002) をもとにして作成。
- 第 9 図 (安藤 2009)・(坂本ほか 1986)・(柴田・森 1953)・(城倉ほか編 2017)・(守田ほか編 1999) (野本 1992) をもとにして作成。

※第 1 図～第 8 図に共通して使用した地形図は、国土地理院が提供する基盤地図情報の数値標高モデルをもとに、ArcGIS を用いて作成した。

千葉県域の前期古墳と集落・土器群の動向

茨城大学 田中 裕

はじめに

関東は全国的に古墳の総数が多く、とりわけ前方後円墳では群を抜いている。前方後円墳を集成した二書（『前方後円墳集成 関東東北編』1994・『前方後円墳集成 準遺編』2000）によれば、前方後円墳（前方後円墳を含む）数は千葉県が696基で全国第1位、茨城県が467基で第2位と続き、突出した基数を誇る。一般的には、山間部が少なく、海に通じる大中小の河川、内海、湖沼があり組んだ地形であるため生活基盤にも恵まれ、水上交通の要路をなすことが一因とみられているが（小沢・田中 2012）、実態は、後期後半になつて爆発的に増加することから（田中 2010）、時期毎の詳細な分析により要因を考えなくてはならない。

かつて古墳の詳細分布調査（千葉県 1990）に基づき、千葉県域における古墳群の動態を詳述した沼澤豊は、あたかも『国造本紀』に見られる多数の小国造と対応するように各河川流域・水系ごとの古墳群が認められ、古墳時代の地域圏・政治領域が分立的に形成されていた状況を指摘した（沼澤 1990・第1図）。広域的に見れば、前期から中期、後期、終末期に至るまで一貫して首長墓の「連続的」な造営が認められる点は、後期後半における首長墓の卓越とともに、千葉県域の特徴とされている（小沢・田中 2012）。

1 千葉県の地形

千葉県域は、令制国の安房・上総・下総が含まれ、地形のうえでは房総半島の範囲に重なる。西は東京湾、東と南は太平洋、北は利根川と江戸川に囲まれ、北部を中心とする水郷地帯を形成する。北の境界となる利根川は、江戸の治水のため開削されるまでは東京湾に流入しており、現在の利根川下流域は、鬼怒川が流入していた広大な「流海」で、「香取海」とも称された内海であった。「香取海」から南は、標高20~50mの台地を中心・小河川が樹枝状に開削する「常総台地」が広がり、千葉県域の北半を覆っている。一方、千葉県域の南半にあたる市原市以南には、低いものの奥深い山が広がり、南房総は近年の隆起によって急峻な磯海岸が

形成されている。

房総半島付近の海域は、海産物が豊かである反面、最高難度の「海の難所」としても、古来より知られてきた。房総半島突端部は、紀伊半島とともに、四季を通して黒潮本流がぶつかる荒海である。さらに東の銚子沖は、黒潮が親潮と衝突して沈み込む危険な「潮目の海」である。この二海域は、江戸時代に拓かれた東回り航路でも迂回しており、幕府による強引な獎勵がなければ、その使用さえも忌避すべき、危険な航路と認識されていた（渡辺 2002）。

この列島有数の危険海域は、東西の長距離水運において大きな障壁となつたことは想像に難くない。その房総半島突端部から、西の東京湾水系と東の太平洋水系とを分断し、水運の障壁となる分水嶺を見いだして



第1図 房総半島の水系と主要古墳群

いくと、君津・木更津・市原市域の東縁を通り、千葉市中央部を分断して、八千代・柏市域の西縁を進み、かつて鬼怒川水系と利根川水系を隔てていた閻宿(現:野田市)を通って、北は日光に至る。この東西を隔てる長い分水嶺を「房総一日光線」分水嶺と呼ぶ(第4・5図)。

房総半島は大きく、①東京湾岸、②太平洋岸、③印旛沼・手賀沼・江戸川周辺、④「香取海」沿岸に分けて概観できる。このうち①が、「房総一日光線」分水嶺の西、②③④が東にあたる。ただし、現在の区分では③④を「北総」と総称しており、常総台地の広がる③では、この分水嶺が標高わずか20~30mの連続する樹脂状台地の一つに過ぎず、千葉市から北西の東京湾岸(東葛地域の一部)は景観上分かちがたい部分もある。実際に東葛地域は東京湾岸東・南部と異なった動向を示すため、③と併せて「北総」に含めて扱う。

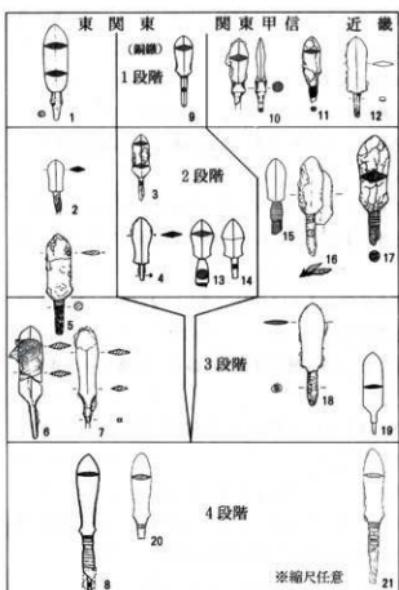
2 出現期古墳(前期前葉まで)

2-1 東京湾岸(南西部)における出現期古墳の卓越

出現期古墳は、①の東京湾沿岸において顕著である。養老川流域の市原市神門古墳群には、「纏向型前方後円墳」(寺澤1988)として知られる神門5号墳(43m)・4号墳(46m)・3号墳(54m)が順に築かれた。墳頂部に鉄剣(槍)・鉄鏃等の武器類や玉類を含む副葬品が出土した埋葬施設が知られ、墳頂部のほか墳丘下から多量の土器が出土しており、近畿に特徴的なタタキ甕、滋賀県域の受口平底甕等、外來の土器群を多量に含む。最後に築かれた3号墳は、ヤマト王權が創出した儀式用の「精製鐵群」(田中2000・2013)に属する最初期の柳葉形鐵鏃が出土している(第2図)。なお、神門古墳群を含む市原市の遺跡群には小規模方墳を含む諏訪台古墳群も存在するが、神門古墳群はそれらとは立地を異にしている。

神門古墳群に比する円丘系の例として、養老川流域の市原市小田部古墳(22m、前方部詳細不明)がある。出土土器は外來系土器の非忠実模倣品を中心とする。市原市牛久1号墳(18m、円墳か)から出土した土器及び鉄剣(槍)等は、やや新相である。

一方、小櫃川流域の木更津市高部古墳群には、古相の前方後方墳である高部32号墳(31m)・30号墳(34m)が順に築かれた。墳頂部の埋葬施設は神門例に比して単純な墓壙であり、鉄剣(槍)のほか、神門例にはな



1 神門3号墳 2 北作1号墳 3 狐塚古墳 4 能満寺古墳
5 桜山古墳 6, 7 上出島2号墳 8 海保2号墳 9~11弘法
山古墳 12 中山大塚古墳 13, 14 山王寺大樹塚古墳 15 前橋天
神山古墳 16 森将军塚古墳 17 桜井茶臼山古墳 18 和田東山3
号古墳 19 柳山古墳 20 北椎尾天神塚古墳 21 和泉黄金塚古墳

第2図 精製柳葉形鐵の編年

い舶載銅鏡の斜縫四獸鏡(32号墳、破鏡)・斜縫二神二獸鏡(30号墳、破碎鏡)が出土した。周溝等からはとともに手焙形土器、東海西部系高杯等が出土している。これら前方後方墳が、同時期の小規模方墳群を伴い群在する点も、神門古墳群とは対照的である。

比較的古相の前方後方墳は、高部古墳群のほか、村田川流域の市原市草刈A99号墳(27m)、小櫃川流域の袖ヶ浦市滝ノ口向台8号墳(60m)、木更津市鳥越古墳(25m)、小糸川流域の君津市冲入SZ001(19m)等が知られる。草刈A99号墳は草刈II期初頭の指標となる土器群が出土し、周囲には継続的に小規模方墳群が形成されている。滝ノ口向台8号墳は手焙形土器と墳丘形状から出現期古墳と目され、周囲に小規模方墳を伴う。単独墳の様相である鳥越古墳は主体部から玉類、冲入SZ001も同じく主体部から豊富な玉類、周溝から壺3個体以上(草刈I期~II期前半)が出土している。

神門3号墳と高部30号墳の副葬品と出土土器はほぼ併行する時期とみられ、土器と鉄鏃その他の併せた

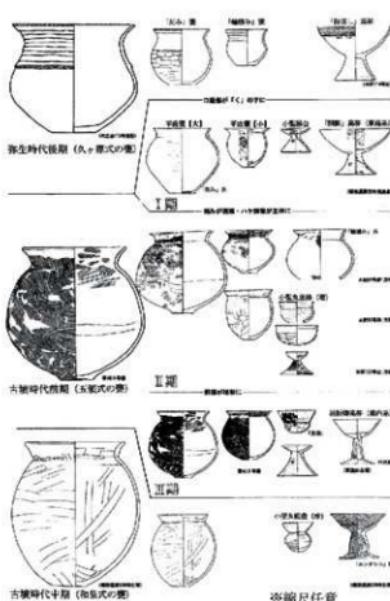
広域の比較材料としては、長野県松本市弘法山古墳等と同時期の資料と考える(第2図)。したがって、少なくとも神門古墳群と高部古墳群の造営開始は、それ以前の草刈I期(加藤2000・田中2003)、近畿の庄内式期、東海の廻間II式期以前に遡る。なお、時期比定根拠は次のとおりである。最初期の「精製」柳葉形鉄鍬は、神門3号墳のほか奈良県ホケノ山古墳、長野県弘法山古墳等にみられ、奈良県箸墓古墳等の定型化前方後円墳が登場する直前ないし同時期に創出されたと考える。分類方法は異なるが、時期に関する評価は水野敏典の見解(水野2008)とほぼ一致する。神門3号墳頂土器、高部30号墳土器群は、草刈I期～II期の境界指標とした草刈A99号墳土器群と同時期とみなして草刈古墳群土器編年は組んでおり(田中2003)、草刈I期は近畿の庄内式期相当、草刈II期は布留式期相当とみなせる(田中2013)。なお、大村直による土器編年(大村2009)との関係では、上記境界土器群(草刈I期末～草刈II期初頭)が大村の草刈I式、草刈II期半ばから後半が草刈2式、草刈III期が草刈3式とほぼ併行する(第3図)。

このように、房総の東京湾岸は、関東他地域に比して出現期古墳が顕著である。その受容・造営に際し、両地域は弥生時代後期に大規模集落が形成される人口密集地帯であったことが基盤と考えられるが(小沢・田中2012)、弥生時代から大規模集落が存在する点は、神奈川県など西関東も同じである。海老名市秋葉山古墳群等の資料増加によって神奈川県に前方後円形系譜の古墳群が指摘されるようになったとはいえ、房総東京湾岸における卓越はなお顕著である。

2-2 北総における新たな集落と新たな墓制

出現期古墳を語る上で、③の手賀沼水域(柏・我孫子・印西市)にある、柏市一番割遺跡の存在は見逃せない。同遺跡は「コ」の字形屈曲部を伴う方形のV字溝に囲まれた環濠集落であり、環濠の外側には、同時期の小規模の前方後方墳(墳丘長14m)が、小規模方墳(方形周溝墓)を伴い造営されている。環濠内の住居跡からは、重圓文鏡・銅鏡のほか、近畿の特徴を示すタタキ甕や、北陸系等の外来系土器が出土しており、房総における古式土師器(房総様式)成立の端緒を見いだすことができる。加えて、環濠覆土上部(遺構複数)から十王台式の大型壺が出土している点が特筆される。

なお、房総様式は、房総半島において成立する「く」

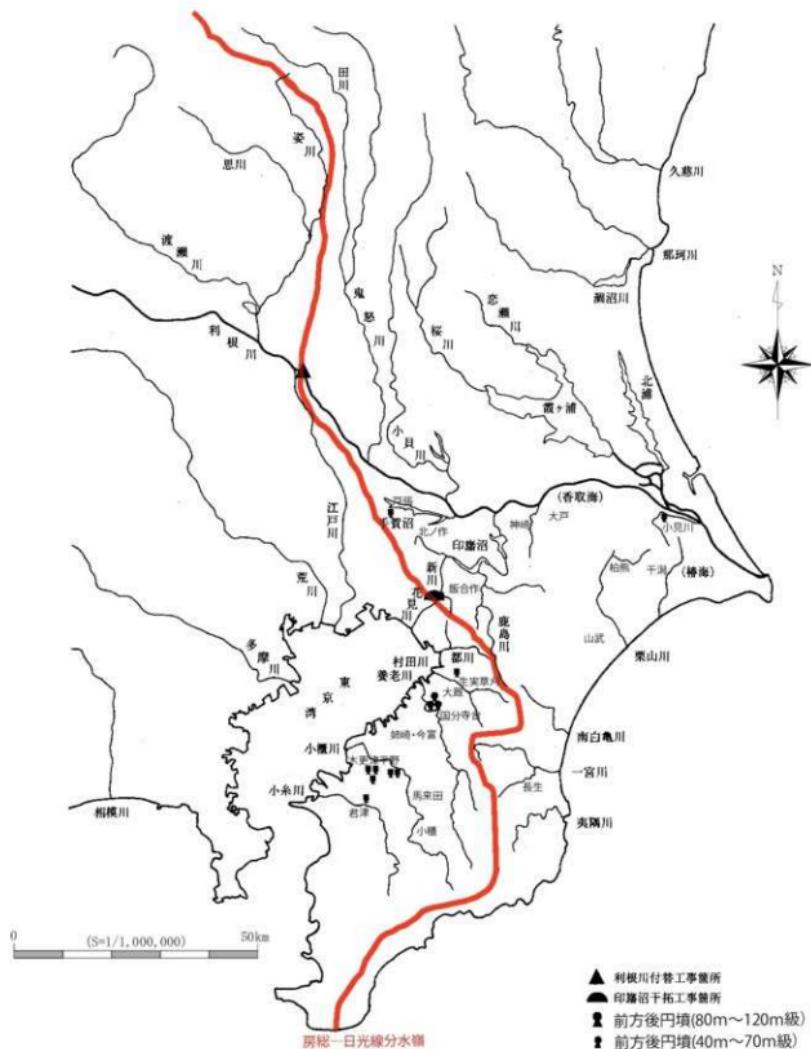


第3図 房総様式の一例(草刈古墳群土器編年)

の字口縁平底甕を伴う、房総半島で組み合わさった器種群からなる古式土師器の様式をいう。ただし、土器組成そのものは東日本に比較的普遍的であり、五領式の房総半島における地域的様相と位置づけてよい。

一番割遺跡の南300m地点には、ほぼ同時期の柏市戸張城山遺跡が存在する。「コ」の字形屈曲部を伴うV字溝に囲まれた方形の環濠集落であるが、のちに箱堀(逆台形溝)に掘り返されている。堀の外側にあたる台地突端に複数の小規模方墳が築かれ、南関東系弥生土器と北関東系弥生土器の折衷的特徴をもつ大型壺が出土している。また、南西側の堀を隔てた山田台遺跡にも、複数の小規模方墳が営まれる。集落と環濠から、一番割遺跡と同様に、多量のタタキ甕や、北陸などの外来系土器が出土している。

一番割遺跡の北西2km地点の手賀沼西岸には、一番割遺跡に後続する時期の、柏市呼塚遺跡がある。「コ」の字形屈曲部を伴う箱堀による方形環濠集落である。環濠から北陸系土器を模倣した装飾器台を含む房総様式の古式土師器とともに、複数の十王台式土器が出土している。集落の南東200mにある駒込遺跡が墓域であるならば、環濠集落と小規模方墳群の組合せを確認



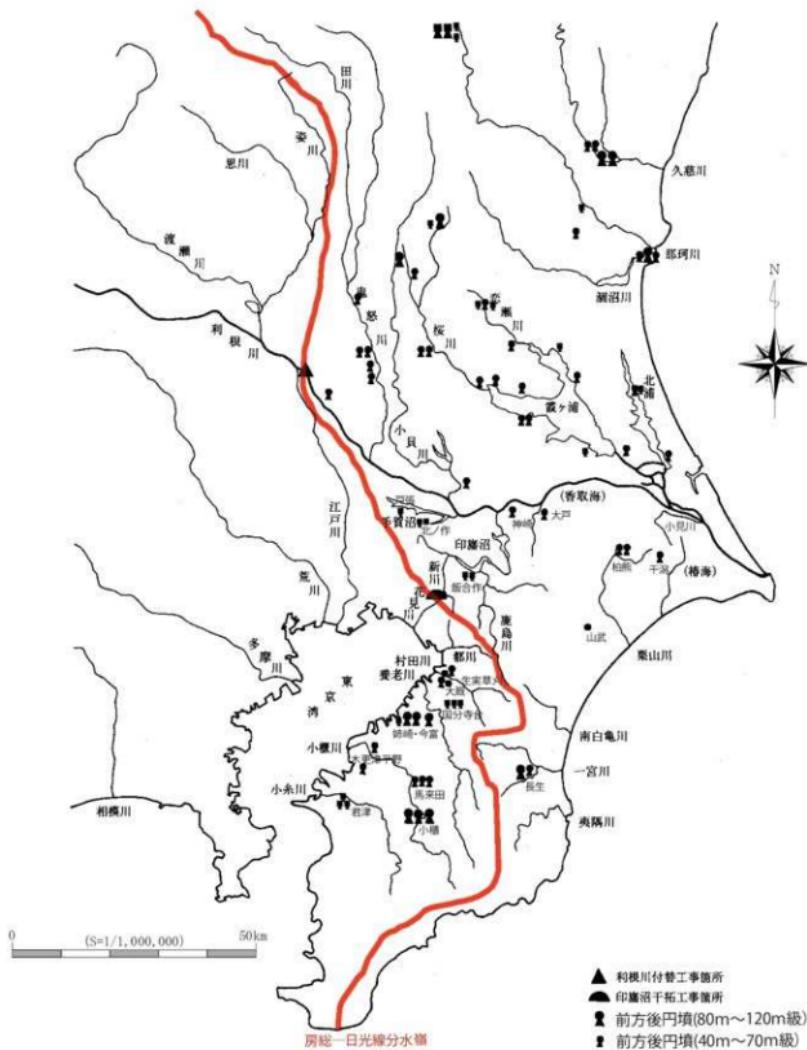
第4図 房総の出現期古墳分布図（前期前葉まで・前方後方墳を含む）

できるが、前方後方墳は確認されていない。

印旛沼周辺（八千代・佐倉・成田市）では、タタキ甃を多く出土した佐倉市大崎台遺跡や、高岡大山遺跡に環濠集落がみられる。大崎台遺跡の環濠の詳細は未検討であるが、やや新相の高岡大山遺跡（草刈I期末

～草刈II期初頭）は箱堀で、径60mの円形を基調とし

ながら、一部が直線的で、南北に2カ所の切れ目（陸橋）をもつなど、「豪族居館」とも呼び慣わされる方形堀圍施設に近い特徴をもつ。高岡大山遺跡の初期の土器には、東京湾岸でも市原市城周辺に多い甃の特徴



第5図 房総の前期古墳分布図（前期中葉～後葉・前方後方墳を含む）

をもつことが注目される。これら以後の環濠集落はみられなくなることから、「最後」の環濠集落群と認識できる。大崎台遺跡の環濠外とみられる遺跡外縁には、一辺25mの方墳（13号：タクキ甕や東京湾岸南部の「く」の字口縁輪積甕を含む草刈I期末～II期初頭）

と鉄剣出土例（10号）を含む小規模方墳4基の計5基、高岡大山遺跡の環濠外には小規模方墳4基が伴う。前方後円墳、前方後方墳はみられない。一方、④の香取海沿岸（香取市）では、香取市小見川地区の阿玉台北A7号墳（前方後方・26m）があるが、柏市一番割遺跡・

戸張城山遺跡・呼塚遺跡や、佐倉市大崎台遺跡・高岡遺跡など、「最後」の環濠集落が造営された時期よりも、少し後に造営されたとみられる。

以上のように、北総地域（③印旛沼・手賀沼・江戸川、④香取海沿岸）では、古式の前方後方墳が築造されるものの、東京湾沿岸諸地域のような複数の前方後円墳は認められない。これら北総地域への出現期古墳の導入は、「房総一日光線分水嶺」を越えてその北東側に忽然と現れる、「最後」にして新たな環濠集落とその周辺への古墳時代集落の展開、小規模方墳の新規造営と、あきらかに連動している（第4・5図）。これは、さらに茨城県域から東北地方へと房総様式古式土師器が北上する現象（比田井 2004）の端緒となる動きである。

3 前期中葉から後葉の古墳

前期中葉から後葉（集成編年3～4期、草刈II期後半～III期、大村編年の草刈2式～3式）になると、①東京湾沿岸、②太平洋岸、③香取海周辺の諸地域に、複数の前方後円墳が複数連続して造営されるようになり、後に系譜的な連続性を想起させるような古墳群が顕在化する。首長墓の継続的築造という沼澤豊の指摘が実感を伴うのはこの時点からといえる（沼澤 1990）。

3-1 東京湾岸（南西部）における前方後円墳の卓越とその基盤

①の東京湾岸・養老川流域（市原市域）の中流域に今富塚山古墳（110m、木炭桼）が築造され、その後、下流域の姉崎地区に姉崎天神山古墳（130m）、积迦山古墳（93m、粘土桼）が築かれる点から見ていい。とりわけ姉崎天神山古墳は、墳丘規模からみて房総半島最上位クラスの位置づけとなるが、時期判定資料は乏しく、課題が残る。このほか、養老川流域の五井・姉崎地区では草刈II期前半から後半にかけて、諫訪台33号墳（21m）、東間部2号墳（42m）、姉崎東原古墳（約33m）などの前方後方墳も築造されている。墳丘長において前方後円墳よりも著しく小型であり、周辺に方墳群が伴う点から、前方後円墳造営主が水系の広い範囲を統括する支配者であったのに対して、前方後方墳造営主は小地域の統率者層であったと指摘されている（小沢・田中 2012）。

注目したいのは、上記の前方後方墳が、神門古墳群や高部古墳群の築造時期と必ずしも接続せず、立地も

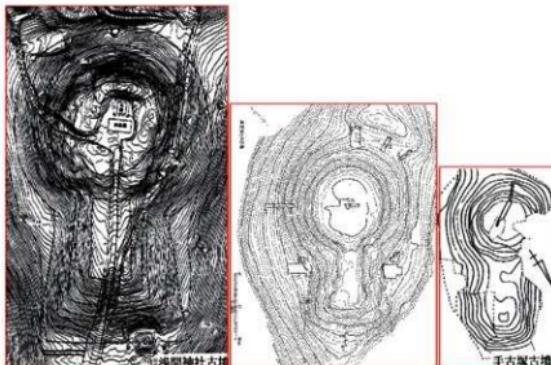
引き継がない点である。のことから、前方後円墳の築造時期との間を確實につなぐとは評価しにくい。同じ市原市域にありながら、神門古墳群以降、基盤を引き継いだ大型古墳を見いだせず、姉崎地区に大型前方後円墳が登場するまでの間が空白になっている。現時点で見えるこの現象は、非常に重要である。

小櫃川流域（袖ヶ浦・木更津・君津市域）では、中流域の小櫃地区に最大規模（100m級）の前方後円墳である飯籠塚古墳（102m）、浅間神社古墳（105m）、白山神社古墳（89m）が相次いで造営されている。その小櫃地区のやや下流、平地への出入口にあたる馬来田地区には、町原17号墳（66m）、真里谷13号墳（62m）、真里谷28号墳（75m）といった60～70m級の前方後円墳が複数存在している。さらに河口付近の平地部には、坂戸神社古墳（62m）や手古塚古墳（60m）という60m級前方後円墳が2基以上あり、少なくとも、3地区以上の前方後円墳造営基盤があったとみられる。

小櫃川流域の各古墳を比較すると（第6図）、最上流の小櫃地区に築かれた最大規模の古墳が3基とも異系統の墳形である。その下流の馬来田地区の3基も異系統の墳形、平野部の2基も異系統の墳形である。墳形についてはむしろ、上流域と下流域の古墳間に、規模は違うものの墳形が似ているものがある。もし、上下流域で代々、墳形を共有していたならば、規模に表示された上下関係によって、上流域の集団を頂点とし、下流域の集団が結合していたという構図になる。

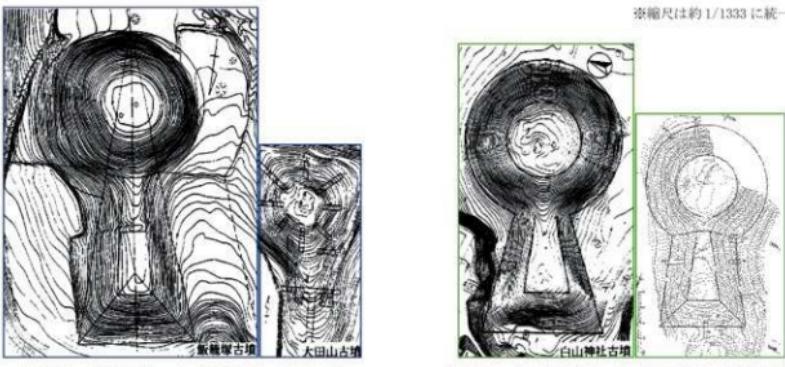
この構図は、かつて長野県善光寺平（田中 1996）や茨城県桜川流域（田中・日高 1996）において見いだした、最上流の首長権を頂点として下流域の諸集団が傘下に入る集団関係の構図に似ている。小櫃川流域でも同様の構図を予見したことがあるが（田中 2000）、その後、馬来田地区の古墳調査を進めた稻木章宏は、厳密に相似関係は見いだせないものの、浅間神社古墳と手古塚古墳の類似に加えて、真里谷28号墳と飯籠塚古墳の形状が近い点を指摘している（稻木 2012）。もし、小櫃川流域を包括するゆるやかな政治的・社会的地域結合体を認めて良いならば、前期後半に形成され、最上流の首長権の傘下で、一定期間存続したとみられる。

南部の小糸川流域（君津・富津市域）では、上流に駒久保6号墳（42m）・10号墳（46m）、平野部出口の手前に道祖神裏古墳（56m）が造営される。道祖神裏古墳は、前方後円墳秩序の論理が導入された「第二群前方後方墳」（中井 2004）に該当するが、小櫃川流域



小櫃地区：浅間神社古墳 / 馬来田地区：真里谷13号墳 / 木更津平地：手古塚古墳

※縮尺は約1/1333に統一。



小櫃地区：板籠塚古墳 / 木更津平地：大田山古墳

小櫃地区：白山神社古墳 / 馬来田地区：町原17号墳

第6図 小櫃川流域の前方後円墳比較図（抜抜）

に形成された地域結合体傘下の第二グループ前方後円墳に近い規模である。

北部の村田川流域（市原市・千葉市域）では、前方後円墳の大覚寺山古墳（62m）と、大覚二子塚古墳（70m）、前方後方墳の新皇塚古墳（約60m）が川を挟んで造営され、さらに、円墳の大覚浅間塚古墳（40m）が築かれている。当流域には、前期初頭の草刈A99号墳以降に前期の小規模方墳を中心とする草刈古墳群が継続的に築かれ、古墳群の周辺に大型の円墳である草刈3号墳（35m、草刈III期の指標）、そして中期初頭の円墳である草刈1号墳築造へと続く。草刈遺跡は弥生時代中期・後期に隆盛を迎えた環濠集落であり、これらの伝統的な村落基盤が明瞭に見えるのが、村田川流域の特徴である。なお、草刈古墳群は中期以降も円墳となっ

て築造され続け、後期まで引き継がれた明瞭な継続型の群集墳である。隣接する集落もほぼ同時期まで継続する。この村落は拠点的であり、かつ長く安定的な基盤が維持されたことが読み取れる。

小規模古墳については、小櫃川流域の請西大山台古墳群・俵ヶ谷古墳群・二又振古墳群、小糸川流域の大井戸八木古墳群、村田川流域の大覚古墳群など、数基ずつ散在する例が多く、比較的等質で密度度の高い弥生時代後期方形周溝墓に比べると、質的な転換が認められる。ただし、養老川流域の諏訪台古墳群や村田川流域の草刈古墳群等では、弥生時代以来の伝統的で拠点的な村落に付随するように、比較的密集した多数の小規模方墳群が造営される例もあり、伝統的な村落基盤が引き継がれる房総の特徴の根源的部分をみてとる

ことができる。

なお、東京湾沿岸北部の都川流域（千葉市中央周辺）では、小規模方墳と前期集落は認められるが、前方後円墳は知られていない。

3-2 太平洋岸での前期古墳の築造

②の太平洋岸では、草刈Ⅰ期に相当する茂原市国府関遺跡のような北陸系土器を多数伴う集落跡や、鴨川市根方上ノ芝条里跡E地点SX-1のような東海西部・近江系土器を多数伴う方形周溝墓を確認できるが、前方後円墳や前方後方墳は認められていない。

これに対し、草刈Ⅱ期以後、前期中葉から後葉にかけては、一宮川流域（長生郡域）に、木炭櫛から柳葉形銅鏡等が出土した能満寺古墳（74m）、壺形埴輪を伴う油殿1号墳（93m）の大型前方後円墳2基、これらに先行する可能性のある油殿2号墳（前方後方墳か、33m）が造営されてくる。海岸部ではなく、河川沿いの比較的内陸部に位置する点が注目される。

その他の夷隅川流域（夷隅地城）と安房地域には、海岸部を含め、前期の集落が営まれるもの、前方後円墳と前方後方墳は確認されていない。北部の木戸川・作田川流域（山武地城）に至っては、古墳はもとより、集落すら希薄である。その中で、低墳丘の円墳・山武市島戸境1号墳（20m）は、4面の小型仿製鏡（捩文鏡2、内行花文鏡1、珠文鏡1、多量のガラス玉を含む豊富な玉類が出土し、周辺の前期集落の希薄さや古墳規模に比して、副葬品の驚くべき充実ぶりを示す。

3-3 北総における前期古墳の希薄地帯（印旛沼・手賀沼・江戸川周辺）

手賀沼周辺では、前述の戸張城山遺跡の対岸に、前方後方墳の柏市浅間山古墳（後方部長32m）がある。環濠集落の環濠が埋没して外側に集落が展開する時期（草刈Ⅱ期、大村による草刈1式～2式）に対岸に造営されたとみられ、古墳の近くにも、古墳造営直前から営まれた集落跡が広がっている。また、手賀沼の南岸には、著名な北之作1号墳（方墳・18m）、北之作2号墳（前方後方墳・32m）がある。1号墳からは銅鏡・鉄鏃のほか、東海系のひさご壺・高杯・器台、2号墳から有段口縁壺が出土しており、両者の築造時期は近い（草刈Ⅱ期）。

印旛沼沿岸（佐倉市・八千代市）では、前方後方墳である佐倉市飯合作1号墳（25m）、2号墳（30m）が隣接して存在し、周囲には多くの方墳群が営まれてい

る。1号墳のみ埋葬施設が発掘され、銅鏡とガラス玉が出土している。後方部は1号墳が主軸に対して横長、2号墳が縱長であり、東京湾沿岸の高部古墳群や駒久保古墳群と同じ組合せであるが、出土遺物からは一段階新しいとみられる（草刈Ⅱ期）。同時期の前方後方墳または方墳として、壺形埴輪を伴う八千代市見穴002号墳がある。なお、前方後円墳と目されている佐倉市山崎ひょうたん塚古墳（40m）については、詳細不明である。

弥生時代後期の遺跡が希薄であった江戸川流域（野田・流山・松戸・市川市）でも、古墳時代前期から集落跡が顕著にみられ、小規模方墳も登場する。ただし、前方後円墳・前方後方墳は確認されていない。このことは、当時の交通ルートとして江戸川周辺も機能し始めた反面、茨城県方面をつなぐ手賀沼一印旛沼－東京湾ルートの方が著しく活発に機能した可能性を示す。

以上のように、北総の印旛沼・手賀沼・江戸川周辺では、東京湾沿岸諸地域のような複数の前方後円墳の連続的造営は認められず、弥生時代方形周溝墓以来の伝統を残す小規模方墳が主として築かれ、一部に小型の前方後方墳（第一群前方後方墳）が認められる。

3-4 北総における前期古墳の卓越地帯（「香取海」沿岸・「椿海」沿岸）

④の香取海沿岸地城では、前期後半になると、利根川下流域（旧下總町）の木炭櫛から短冊形鉄斧が出土した大日山古墳（54m）、大戸天神台古墳（62m）が築かれるとともに、栗山川上流域（多古町）の南玉造には、器台形埴輪（草刈Ⅱ期後半併行）をもつ柏熊おけ塚古墳（80m）、壺形埴輪（草刈Ⅲ期併行）をもつ柏熊しやくし塚古墳（72m）の、2基の卓越した大型前方後円墳が認められる。栗山川流域の2古墳は厳密に言えば太平洋側に位置するが、栗山川上流にあたり、台地を越えてすぐ香取海沿岸と接続する位置関係にある。同様に台地を超えて香取海沿岸と接続する位置関係にある太平洋側の前方後円墳として、「椿海」の北岸（旭市千鶴町）に瀧台古墳（61m）も築かれる。同古墳の位置する鎌木地区は、「椿海」水系と栗山川水系に挟まれた細い台地であり、栗山川支流を通じて柏熊古墳群と6kmほどで接続できる。これらは太平洋側に位置するとはいえる。「最小陸路・最大水路」の原則に基づいて内水面を駆使した、前期の水上交通ネットワークを体现する古墳群といえる。このように、房総半島で

は房総一日光線分水嶺の付近ではなく、これを超えて広がる高大な内水面の奥に、墳丘長50m以上～100m未満の前方後円墳が「展開」する。

なお、これらの立地は、東京湾岸から小櫃川・養老川を通り、分水嶺を超えた奥側に位置する一宮川流域の能満寺古墳や油殿古墳の立地にも比することができる。

4 古墳の出現・展開と房総様式土器群の成立・拡大

4-1 中・小河川毎に形成される地域社会

房総における前期古墳の年代について、前方後円墳集成（広瀬1992）等の広域編年と厳密に対比させることはそもそも困難である。ただし、歴史的評価をする際に必要な手続きであるため、併行関係についての考え方表1に示す。この編年表と第4・5図に基づいて、小稿の要点をまとめて述べておく。

房総の前期古墳は、利根川を除いて巨大河川がなく、村田川・養老川・小櫃川などの中河川毎に前方後円墳が多く築かれる。とくに前期の後半になると、流域の中でも複数の地区毎に、まとまって複数の前方後円墳が連続造営された。

前期古墳が集中する小櫃川流域では、上流から小櫃地区、馬久田地区、木更津平地地区の少なくとも3地区以上に分かれ、それぞれ前方後円墳を造営する基本単位が見いだせる。地区内の前方後円墳は、いずれも異系統の墳形であるが、上流域の古墳と下流域の古墳の墳形を比較すると、規模が異なるにもかかわらず、同系統の墳形といえそうなものがある。最大規模の古墳は、一貫して最上流の小櫃地区で造営されており、上流の集団を頂点とし、その傘下に中・下流域の集団が緩やかに結びつくたちで、小櫃川流域圏に地域結合体を形成していた可能性がある。

上流域が下流域を傘下におさめる光景は、房総のみに限らず、畿内地域を含め、前期古墳において比較的多く目撃できるので、古墳時代前期という時代性をこの点に読み解くことができると考えている。小櫃川を例にしてみると、木更津平地（木更津台地・袖ヶ浦台地）は、東京湾から直接接する水運上の入口であり、他の湾岸諸地域への中継点でもある。次に、小櫃川低地をすこし遡った位置の馬来田地区は、河口から緩やかな流れを週上できる場所であり、東京湾から直接に舟で接近できる。真里谷盆地内には塩害のない良好な生産地も想定できる。小櫃川が谷間から低地に流れ出る屈

曲点は流速が変わるポイントでもあり、上流へ到達するためには、舟種の変更、積み替えが必要となる地点である。最後に小櫃地区まで到達すると、狭い盆地の奥（後の久留里城）は、小櫃川が急流に変わるとポイントに当たっており、そこから山越えを企図すると、曳舟か、徒行かの選択が迫られる。疑いの余地のない荷揚げポイントである。そして、小櫃地区を占めた集団は、房総一日光線分水嶺を越えた、太平洋側一帯へのアクセス権を権力基盤とし、実務的にも、交通の扭い手であったことが想定される。

このように、前期の古墳築造地点は、水上交通の交差点や、流速変換点など水上交通の通行方法が切替わる場所、内陸交通との結節点に当たっており、一貫して、水上交通上の利便性を確保する合理性に基づいて占地されている。これは、当時の首長や当該地区的集団が、水上交通の掌握を第一に志向していたことをものがたる。古墳時代前期社会の最大の特徴である。

4-2 前期前半における古墳築造の空白

房総の動向でさらに注目されるのは、前方後円墳が広く築かれる以前の、前期前半の動向である。

神門古墳群・高部古墳群のように、古墳出現期あるいはその前夜に相当するとしても古い時期に、比較的豊富な副葬品を伴う古墳が築かれることは、房総東京湾岸に特異な特徴である。しかしすでに述べてきたように、小規模方墳・前方後方形墳が皆無でないにせよ、両古墳群の後を引き継ぐ大型の前方後円墳・前方後方墳は、同地区で見いだすことができず、他地区で築かれるまでの間に、空白が生じているように見えるのである。

古墳時代前期前葉ないし中葉までの間に築かれた大型前方後円墳を探すと、東関東でも北の茨城県、それも県北・久慈川流域まで北上しなくてはならない。常陸太田市の梵天山古墳（150m）と星神社古墳（100m）である。東関東でも北部に存在するということは、房総に見いだせていない点に、重要な歴史的意味があると考えてよい。少なくとも、立地は継承されないから、この時期、村落が継続的であったとしても、これを取り巻く地域社会が固定的なものではなく、かなり流動的であった可能性はある。房総におけるこの動向は、古墳時代の始まりを評価する際に、あるいは古墳分布の周縁部を検討する際に、きわめて重要な論点となると考える。

表1 房総の前期古墳年案

●前方後円墳、■前方後方墳、○円墳、□方墳、数字は墳丘長

4-3 房総様式成立時の新タイプ環濠集落と古墳

神門古墳群・高部古墳群が築かれた①の東京湾岸地域は、弥生時代の大規模集落も伝統的に築かれる地域でもある。草刈I期末～II期初頭の草刈A99号墳も、当該期の集落跡が隣接し、比較的伝統的集団が受容したようにみえている。

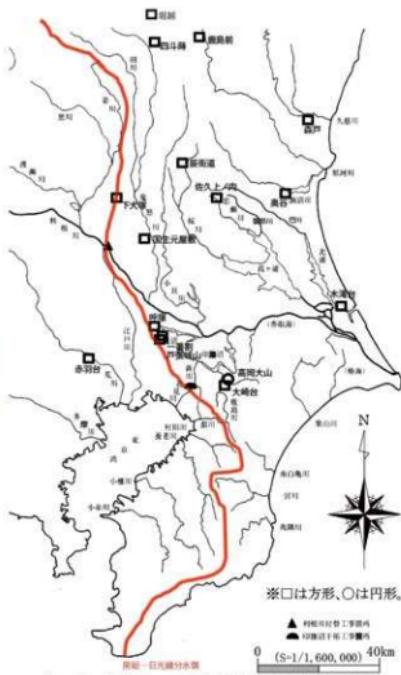
一方、房総一日光線分水嶺を一步越えた③の手賀沼地域には、戸張地区をはじめ、「コ」の字形屈曲部を伴う方形基調の堀で囲まれた、最後にして新しいタイプの環濠集落が築かれる（第7図）。

この2地域ではそれぞれ、東京湾岸南部の伝統的な南関東系弥生甕に見られた平底の伝統や（比田井克仁：古墳時代土器研究会1997）、北総の新タイプ環濠集落に流入したタタキ甕の影響により（菊池1990・西川1991）、多様な口縁部形態を残しつつも、西関東の台付壠圏とは対照的な平底甕圏が形成される。このとき成立するのが、「千葉型平底甕」（西川1991）、「千葉形五領型甕」（大村1994）とも呼ばれ、房総様式を代表する「く」の字口縁平底甕である。

手賀沼周辺に出現した新タイプ環濠集落の分布は、同様にタタキ甕を伴って印旛沼周辺に造営された大崎台遺跡・高岡大山遺跡の環濠集落を含め、房総一日光線分水嶺を越えた北東側の、北総地域に限られる。一方、東京湾岸では、東京・神奈川・埼玉都県域を含めて見渡しても赤羽台遺跡を除いて、分布は皆無に等しい。

おもしろいことに、新タイプ環濠集落と同じく「コ」の字形屈曲部等の特徴を伴う方形堀囲施設を含めると、さらに北東側の茨城県・栃木県域において、多数発見されている。しかもこれらの遺跡では、柏市戸張地区の環濠集落に後続する草刈II期初頭以降の、房総様式土器が出土するのである。茨城県域以北において従来の伝統にない方形周溝墓、すなわち、小規模方墳が登場するのも、方形堀囲施設の登場と同時である。

神門古墳群・高部古墳群等の、顕著な出現期古墳群が①の東京湾岸で築かれなくなるころ、大型前期古墳は房総においてみられなくなる。この時期は、房総で成立する土器様式が、房総一日光線分水嶺を越え、急速に北上を開始する時期と、ちょうど重なっている。そして、新タイプ環濠集落や方形堀囲施設の分布は、房総様式土器群が北上する地域に、しかも、北上する時期に営まれる。以上の集落・土器群の動向と、前期前半の大型前方後円墳が茨城県側でのみ顕著にみられ



第7図 東関東の方形堀囲施設・環濠集落分布図
(弥生時代末～古墳時代前期)

る状況は、関連があると考えてよいであろう。当時の地域社会は、房総一日光線分水嶺を挟んだ左右において、分断されておらず、固定的でなく、極めて活発な動きの中にあり、広域的に、密接な相互関係をもって営まれていた可能性が高い。

おわりに

房総の前期古墳は、関東でもとくに早く出現し、その後、前期前半の大型古墳が見られず推移するが、前期後半になると、水上交通の掌握を主な基盤として、継続的に造営されるようになる。この2段階の動きには、水上交通の障害となる分水嶺を越えて人々が活動しようとしていたことと関係しているとみられる。

房総におけるこの2段階の古墳築造契機はまた、前方後円墳秩序の論理が導入されていない第一群前方後円墳・前方後方墳が採用された後に、前方後円墳秩序の論理を伴う第二群前方後円墳・前方後方墳が採用さ

れる（北條 2000・中井 2004）という動きにも大いに関係があるとみられる。

房総で大型古墳がみられない古墳時代前期前半には、交通の障害となった長い分水嶺を越えて、流動的で広域的な動きが巻き起こっており、房総を基点として、房総以北から東北地方に至る広範な地域社会に巨大な変化をもたらす契機をもたらしたとみられる。この動きが、いわゆるフロンティア拡大と酷似した現象を生み出したことについては、稿を改めたい。

引用文献

- 稻木章宏 2007『町原古墳群 17 号墳確認調査報告書』木更津市教育委員会
- 稻木章宏 2012『房総半島西岸一上総を中心に』『シンポジウム 東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第 17 回東北・関東前方後円墳研究会
- 大村 直 1994「戸張一番割跡の變形」『史館』25
- 大村 直 2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」『市原市 南中台遺跡・荒久遺跡 A 地点』市原市教育委員会
- 小沢 洋 1992『大田山古墳の調査』『木更津市文化財集報』1 木更津市教育委員会
- 小沢 洋・田中 裕 2012『関東沿岸』『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 2 同成社
- 加藤修司 2000『土器編年案』『千葉県文化財センター研究紀要』21 財団法人千葉県文化財センター
- 菊池健一 1990「一つの變から—弥生時代後期～古墳時代はじめにかけての叩き甕について—」『史館』22
- 古墳時代土器研究会 1997『土器が語る—関東古墳時代の黎明—』第一法規
- 酒巻忠史 2005『真里谷 13 号墳の発掘調査』『木更津史文化財 調査集報』10 木更津市教育委員会
- 田中 裕 1996「前方後円墳の規格と地域社会」『考古学雑抄』西野元先生退官記念会（川崎保編 2006『シナノの王墓の考古学』雄山閣に補稿のうえ再録）
- 田中 裕 2000「編年の研究に見る前期古墳の展開」『千葉県文化財センター研究紀要』21 財団法人千葉県文化財センター
- 田中 裕 2003「和泉式から五領式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11
- 田中 裕 2010「千葉県」『前方後円墳の終焉』雄山閣
- 田中 裕 2013「出現期古墳の広域編年と東西関係に関する覚書き—高尾山古墳副葬器群と破碎鏡から—」『西相模考古』22
- 田中 裕・日高 健 1996「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』7
- 千葉県 1990『千葉県古墳群詳細分布調査報告書』
- 寺澤 薫 1988「礪向型前方後円墳の構造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学
- 中井正幸 2004「二つの前方後方墳」『古墳時代の政治構造 前方後円墳からのアプローチ』青木書店
- 西川修一 1991「関東のタタキ甕」『神奈川考古』27
- 沼澤 豊 1990「千葉」『古墳時代の研究』11 雄山閣
- 比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器圈の北上」『史館』33
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 北條芳隆 2000「前方後円墳と倭王權」『古墳時代像を見なおす』青木書店
- 水野敏典 2008「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『樅原考古学研究所論集』第 15 集 八木書店
- 渡辺英夫 2002『東廻海運史の研究』山川出版社

図表出典一覧

- 第1図（小沢・田中 2012）P203 図 1 を改変して作成。
- 第2図（田中 2000）P356 図 257 を一部修正して作成。
- 第3～5・7図 筆者作成。
- 第6図（田中 2000）P370 第 261 図から抜粋のうえ、（小沢 1992）（酒巻 2005）及び（稻木 2007）の報告図を加えて筆者作成。

表 1 筆者作成。

霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳

筑波大学 滝沢 誠

1 「常総の内海」をめぐる視点

茨城県と千葉県の境界に位置する利根川下流低地は、鬼怒川や小貝川の堆積作用に加え、江戸時代の利根川東遷事業や新田開発の結果として完全に陸化したものであり、それ以前は、茨城県側に位置する霞ヶ浦（西浦）や北浦、千葉県側に位置する印旛沼や手賀沼などを包含する広大な内海の一部であった（小出 1975、斎藤・井内・横田 1990、久保 2007）。すなわち、列島第2位の湖水面積を誇る霞ヶ浦は、中世の段階に至るまで、関東平野の東部に位置する広大な内海の中心水域として存在していたのである。

1990年代以降の中世史研究では、この内海をめぐる議論が活発に展開されている。その先鞭を受けた鈴木哲雄は、関東東部の内海を中心とした一帯を「鬼怒川=香取内海地域」とし、関東西部の「利根川=江戸内海地域」と対比させながら、「2つの内海論」を基軸として中世関東における地域社会像の再構築を試みている（鈴木 2005など）。同様に、2つの内海の重要性を説く市村高男は、それらを「常総の内海」「武總の内海」と呼び、両者の地域的特質を生産活動や交通形態の侧面から論じている。とくに「常総の内海」においては、豊かな水域を基盤とした非農業生産活動による余剰の蓄積と、水運を基軸とした物資流通の発達により、沿岸各地に多くの有力者が出現したことを指摘している（市村 2007）。

こうした内海への視点は、近年の古墳時代研究においても重視されている。とくに、2つの内海にかかる考古学的事象を弥生時代から古墳時代をつうじて検討した白井久美子の研究は、両地域圏の特質をあらためて浮き彫りにした点で特筆すべきものである（白井 2002）。また、前・中期古墳の立地と水上交通の関係に着目した田中裕の論考や、古墳時代後期における埴輪の流通圏を「常総の内海」との関係で整理した山田俊輔の論考なども重要な論点を含んでいる（田中 2012・山田 2017）。最近では、「古霞ヶ浦」沿岸域における古墳時代社会の解明に取り組んできた塙谷修が、同地域の歴史的特質について総合的な理解を示している（塙谷 2018）。

後述するように、「常総の内海」の沿岸には多くの前期古墳が認められ、とくに霞ヶ浦の沿岸とその周辺に顕著である（第1図）。このことは、古墳時代に台頭した当該地域の首長層が、中世と同様にこの広大な内海に支えられた存在であったことをうかがわせる。

本稿では、以上のような研究の動向と考古学的事実をふまえながら、霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳を取り上げ、主に墳丘形態と立地に関する検討を試みることとする。そうした作業をつうじて、「常総の内海」を中心に展開した古墳時代史の一端に迫るとともに、そこで得られた視点の延長線上に、広く太平洋岸域に分布する前期古墳の理解に向けた研究の方向性を探ることにしたい。

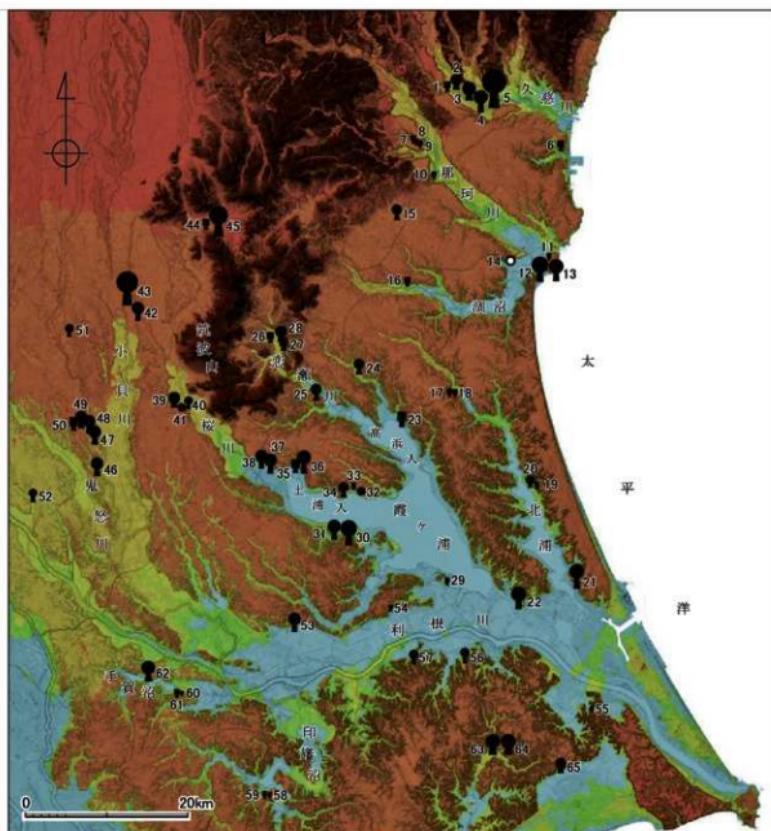
なお、関東東部にかつて存在した広大な内海については、近年、その総称として「香取海」の名称が多用されている。しかし、古代に遡ってその名称を確実に示す史料はなく、『常陸國風土記』では、「佐我の流海」や「信太の流海」など、特定の範囲を指し示す名称が知られるのみである。それらは、奥深い多数の入江によって構成された内海であるがゆえの総称の欠如を意味するものであろう。ここでは、中世史研究の中から提起された学術用語としての「常総の内海」を、当該水域の総称として便宜的に用いることにしたい。

2 前期古墳の築造状況

「常総の内海」が古墳時代にどの範囲に及んでいたかについては、微地形を単位とした地質学的データや遺跡の立地を詳細に検討する必要があり、現時点で全体像を把握することは難しい。ここでは、「常総の内海」の中で中心的位置を占め、それゆえに重要な意味をもっていたと思われる現在の霞ヶ浦と北浦に視点を定め、それらの沿岸域と関連する主要河川の流域を対象として、小地域毎に前期古墳の築造状況を把握していくことにしたい（第1図）。

2-1 霞ヶ浦土浦入り沿岸

霞ヶ浦には、北西方向に分かれて伸びる2つの大きな入江があり、南側を土浦入り、北側を高浜入りと呼



第1図 霞ヶ浦沿岸とその周辺における前期古墳の分布

- 1 富士山 4号 2 五所皇神社裏 3 中野富士山 4 星神社 5 梵天山 6 真崎 5号 7 二の沢 B1号 8 二の沢 B2号 9 二の沢 B6号
 10 安戸星 1号 11 鰐塚 12 日下ヶ塚 13 坊主山 14 天神山 15 牛伏 17号 16 宝塚 17 大上 1号 18 大上 4号 19 大峰山 1号
 20 大峰山 5号 21 伊勢山 22 浅間塚 23 勒使塚 24 羽黒 25 熊野 26 長瀬 2号 27 丸山 1号 28 佐自塚 29 原 1号 30 愛宕山
 31 観音山 32 牛塚 33 赤塚 34 田宿天神塚 35 后塚 36 王塚 37 常名天神山 38 常名瓢箪塚 39 水守桜塚 40 山木 41
 水守 2号 42 火灯山 43 葦間山 44 孤塚 45 長辺寺山 46 六所塚 47 東山塚 48 香取神社 49 柴崎 1号 50 柴崎 2号 51 関本
 桜塚 52 上出島 2号 53 桜山 54 東大沼 55 阿玉台 A007号 56 大戸天神台 57 大日山 1号 58 飯合作 1号 59 飯合作 2号
 60 北作 1号 61 北作 2号 62 水神山 63 柏原杓子塚 64 柏原 1号 65 滝台

(地理院地図により作成。水色で示した部分は標高5m以下。)

んでいる。土浦入りの沿岸には、これまでに多くの前期古墳が確認されており、それらの分布状況をみると、土浦入り奥部、土浦入り北岸、土浦入り南岸の3つのグループに分けることができる。

土浦入り奥部には、土浦市后塚古墳〔第1図 35、以下の同括弧内に示した数字は同図の番号〕、同王塚

古墳〔36〕が、霞ヶ浦を眼下に望む台地上に隣接して築かれている。両古墳とも測量調査が行われていてのみであるが、后塚古墳は墳丘長約 54m の前方後方墳(石田・齊木・荒井 2018)、王塚古墳は墳丘長約 84m の前方後円墳(滝沢 2017)とみられる。いずれも採集遺物が得られていないため詳しい年代は定かでないが、

表1 本稿で取り上げた主な前期古墳

小地域区分	古墳名	所在地	墳形	規 模 (m)			墳丘比率			墳丘主軸	埋葬施設	副葬品	埴輪・土器	
				後円 墳丘長 *(a)	後円 部幅 (b)	前方 部長 (c)	b/a	c/a	類型					
土浦入 惠部	后塚	土浦市	方円	53.8	35.4	18.4	15.3	0.52	0.43	南西				
	王塚	土浦市	方円	84	45	39	25	0.87	0.56	III N=152°-E				
土浦入 北岸	田原天神塚	ヨツハタカミツカ	方円	63	38	25	24.5	0.66	0.64	I N=98°-E			壺形埴輪	
	赤塚	ヨチシマツカ	方円	30									壺形埴輪	
土浦入 南岸	牛塚	カウヅカ	円	28	-	-	-							
	愛宕山	美浦村	方円	94	55	39	24	0.71	0.44	IV N=40°-W				
	觀音山	美浦村	方円	74	44	30	12	0.68	0.27	IV N=40°-W				
桜川 下流	常名瓢箪塚	土浦市	方円	74	-	-	-			-				
	常名天神山	土浦市	方円	70	42	28	15±	0.67	0.36±	IV?	略西			
桜川 中流	桜塚	つくば市	方円	59	39	20	30	0.51	0.76	II N=170°-W	粘土櫛 割竹形木棺	変形四軒鏡1・石劍1 勾玉1・管玉50 丸玉2・ガラス玉29 鉄劍1・編物	増・器台 バレス芯	
	山本	つくば市	方円	48	28	20	15.5	0.71	0.55	I N=141°-E	粘土櫛 箱形木棺	勾玉1・管玉10 ガラス玉5・小玉4 鉄劍1・鉄21	底部穿孔蓋 手づくね土器	
桜川 上流	狐塚	桜川市	方円	44	25	19	16	0.76	0.64	N=173°-E	粘土櫛 箱形木棺	ガラス玉14・鉄劍1 铁刀1・網旗4 方形板木棺短甲1 刀子1・鉄21	底部穿孔蓋 高坏・器台	
	長邊寺山	桜川市	方円	120									円筒埴輪	
高浜入 北岸	勤使塚	小美玉市	方円	64	30	34	18	1.13	0.60	N=151°-E	粘土床 箱形木棺	重圓文鏡1・管玉10 ガラス玉5・小玉40・鉄劍1	壺形埴輪 増・器台	
志願川 下流	熊野	カウヌカ	方円	68	40	28	23	0.70	0.58	I N=98°-E			壺	
志願川 上流	長塚2号	石岡市	方円	46	28	18	16	0.64	0.57	N=160°-E				
	丸山1号	石岡市	方円	55	30	25	18	0.83	0.60	N=176°-E	粘土床 箱形木棺	内行花文鏡1・勾玉9 管玉55・丸玉1 ガラス玉138・薬玉1 鉄劍6・刀子3 網旗4・刀子1	底部穿孔蓋	
	佐古塚	石岡市	方円	59.2	38.7	17.5	33	0.45	0.85	II N=154°-W	粘土櫛 割竹形木棺	勾玉2・管玉20 ガラス玉8 櫛1・刀子1	器台形埴輪 底部穿孔蓋 高坏・器台	
園部川 下流	羽黒	小美玉市	方円	70	43	27		0.62		I?	N=165°-W		壺形埴輪 器台形埴輪	
薩摩浦 南岸	茂間塚	瀬來市	方円	84	48	36	15	0.75	0.31	IV N=56°-W			円筒埴輪	
	原1号	福敷市	方円	29.5	16.5	13	6.8	0.78	0.41	N=52°-W	箱形木棺	管玉4・ガラス玉11 鐵劍2・鉄アリ・櫛1 斧1・鋸2・刀1	底部穿孔蓋 器台	
利根川 下流	桜山	龍ヶ崎市	方円	71.2	38.8	32.4	30.6?	0.84	0.79?	?	N=104°-E	粘土櫛 割竹形木棺	管玉49・鉄劍1・鉄刀1 鐵鍔3・刀子1・鉄1	
	東大沼	福敷市	方円	26										
	大日山1号	成田市	方円	54	33					N=135°-W	木炭櫛 割竹形木棺?	管玉2・ガラス玉6 鉄劍1・鉄斧2・刀子2	土器細片	
	大戸天神台	香取市	方円	62	33.5	28.5	22.5	0.85	0.67	III N=29°-W				
北浦 南部	お伊勢山	鹿嶋市	方円	95	50	45	20	0.90	0.40	III	東南東			
北浦 中部	大峰山1号	鶴田市	方円	31	22	9	9.5	0.41	0.43	N=152°-E				
	大峰山5号	鶴田市	方円	45	27	18	22.5	0.67	0.83	II N=146°-W	粘土櫛	鉄劍1	壺・堆 器台・坏	
北浦 北部	大上1号	鶴田市	方円	35	24	11	10	0.46	0.42	?				
	大上4号	鶴田市	方円	30	20	10	10	0.50	0.50	?			壺・壺	
小貝川 中流	葦間塚	筑西市	方円	141	82	(59)	40-45	(0.72)	0.52±	I?	N=137°-E			壺形埴輪 円筒埴輪
	灯火山	筑西市	方円	70	43	27	24	0.63	0.56	I	略南			

*前方後方墳については、後方部長。

後述するような墳丘形態の理解からみた王塚古墳の年代は、前期後葉を中心として考えられてきた従来の見方よりも遡る可能性がある。現状では、それに先駆けて后塚古墳が築かれたとみておくほかはないが、両古墳の主軸方向が90度近く異なる点は、墳丘の視認性を考える上で、興味深い事実である。

土浦入り北岸には、かすみがうら市田宿天神塚古墳【34】、同赤塚古墳【33】、同牛塚古墳【32】の存在が知られている。田宿天神塚古墳は、墳丘長約63mの前方後円墳で、採集された壺形埴輪の特徴から前期後葉を中心とした築造年代が考えられる（田中・日高1996）。同じく壺形埴輪が採集されている牛塚古墳は、直径約28mの円墳で、田宿天神塚古墳に後続する時期の築造とみられる（大村2010）。赤塚古墳は、墳丘長約30mの前方後方墳であったとされるが（茂木1985）、すでに消滅しているため詳細を確認することはできない。

土浦入り南岸には、美浦村愛宕山古墳【30】と同觀音山古墳【31】が存在する。愛宕山古墳は、墳丘長約94mの前方後円墳で（高橋1990）、後述する鹿島市お伊勢山古墳と並んで対象地域内で最大の規模をもつ。低く狹長な前方部を特徴とすることから、その築造年代は前期後半のうちに求められる。觀音山古墳は、墳丘長約74mの前方後円墳で（大竹ほか1981）、愛宕山古墳と同様の墳丘形態から、それに近い築造年代が考えられる。

2-2 桜川流域

桜川は、筑波山の西側を南流して霞ヶ浦土浦入りに流入する河川で、下流域、中流域、上流域のそれぞれに前期古墳の存在が知られている。

桜川下流域東岸には、土浦市常名天神山古墳【37】が存在する。同古墳は、墳丘長約70mの前方後円墳で、墳丘形態の特徴から前期古墳とみられるが、詳しい年代は明らかでない（茂木ほか1991）。そのすぐ西側に存在したとされる土浦市常名瓢箪塚古墳【38】は、墳丘長約74mの前方後円墳で、後円部に比して低い前方部を有していたとされる（茂木ほか1984a）。そうした墳丘形態の特徴から、前期古墳である可能性が高いとみられるが、すでに消滅しているため詳しい内容を把握することはできない。これら2基の古墳が築かれた桜川下流域は、「常総の内海」の奥部に位置していたと推定される。

桜川中流域西岸には、つくば市水守桜塚古墳【39】、

同山本古墳【40】が存在する。水守桜塚古墳は、從来前方後方墳とされてきたが（蒲原・松尾1982）、近年の再発掘調査により墳丘長約59mの前方後円墳であることが判明している（滝沢ほか2014・2015）。また、以前の発掘調査で粘土櫛から出土した各種の副葬品に加えて、近年の調査であらたに出土した土器の年代を考慮すると、前期後葉を下限とする築造年代が考えられる。山本古墳は、墳丘長約48mの前方後円墳で（上川名ほか1972）、発掘調査により出土した副葬品や土器の年代から、水守桜塚古墳よりも遅れた前期末頃の年代が与えられる。このほか、水守桜塚古墳と山本古墳の中間に位置する水守古墳群（筑波町史編纂専門委員会編1989）にも前期古墳が含まれているとみられ、墳丘径約30mの水守2号墳【41】では、前期段階に遡る柳葉式の鐵鐵が出土している。

桜川上流域の岩瀬盆地には、狐塚古墳【44】と長辺寺山古墳【45】が知られている。狐塚古墳は、墳丘長約44mの前方後方墳で、後方部の粘土櫛から銅鐵や方形板革綴短甲などの副葬品が出土している（西宮1969）。また、周溝内からは焼成前底部穿孔の有段口縁壺が出土しており、前期中葉頃の築造年代が考えられる。長辺寺山古墳は、墳丘長120mに及ぶ大型の前方後円墳とされているが（西宮1974）、いまだ測量調査が行われていないため、詳しい実態は不明のままである。墳丘からは、擬口縁をなす突帶と三角形の透孔を特徴とする円筒埴輪が採集されており（大橋・荻・水沼1984）、狐塚古墳につづく前期後葉の築造とみることができる。

以上のほか、前期に築かれた可能性がある前方後円墳として、中流域東岸に土塔山古墳（墳丘長約61m）、中流域西岸に天神塚古墳（墳丘長約80m）が存在する。

2-3 霞ヶ浦高浜入り沿岸

土浦入り沿岸に比べると、高浜入り沿岸における前期古墳の存在は限られており、むしろ高浜入りに流入する河川の流域に前期古墳の分布が目立っている。高浜入り沿岸の前期古墳としては、その北岸に位置する小美玉市勅使塚古墳【23】が知られている。同古墳は、墳丘長約64mの前方後方墳で、発掘調査により焼成前底部穿孔の二重口縁壺が出土している（大塚1964）。その拡大した頭部は、二重口縁壺としては後出的なもので、同古墳の年代は前期後葉に求められる。

2-4 恋瀬川流域及び園部川流域

高浜入りの奥部は、南北に分かれた2つの小さな入江からなり、南側には恋瀬川、北側には園部川が流入している。

恋瀬川の流域には、下流域と上流域に前期古墳の存在が知られている。下流域に位置する熊野古墳〔25〕は、墳丘長約68mの前方後円墳で（田中裕 1997）、その墳丘形態や採集された土器の特徴から前期後葉を中心とした築造年代が考えられる。一方、恋瀬川の上流域には、石岡市長堀2号墳〔26〕、同丸山1号墳〔27〕、同佐自塚古墳〔28〕の3基がまとめて存在する。それらのうち、佐自塚古墳は、墳丘長59.2mの前方後円墳で、出土した土器や器台形埴輪の特徴から前期後葉の年代が与えられる（佐々木編 2018）。佐自塚古墳の南に位置する丸山1号墳は、墳丘長約55mの前方後方墳で、銅鏡をはじめとする多数の副葬品が出土している（後藤 1957）。その年代は、佐自塚古墳に先行する前期中葉を中心とした時期が考えられる。以上の2基と恋瀬川を挟んで対岸に位置する長堀2号墳は、墳丘長約46mの前方後方墳である（早稲田大学考古学研究室 1973b）。墳丘形態以外に年代を推定する手がかりはないが、丸山1号墳に先行して築かれた可能性が考えられる。

園部川の下流域には、小美玉市羽黒古墳〔24〕が存在する。同古墳は、墳丘長約70mの前方後円墳で、これまでに多数の壺形埴輪や器形埴輪の破片が採集されている（田中ほか 2018）。それらの特徴から、同古墳の築造年代は前期後葉に求められる。

2-5 霞ヶ浦南岸

霞ヶ浦の南岸には、稲敷市原1号墳〔29〕、潮来市浅間塚古墳〔22〕の2基が認められ、前者は土浦入りにつづく西岸側、後者は高浜入りにつづく東岸側に位置する。

原1号墳は、墳丘長29.5mの前方後方墳で（茂木ほか 1976）、発掘調査により出土した土器や副葬品の特徴から、前期中葉の築造年代が考えられる。現在は霞ヶ浦を眼下に望む独立丘陵上に位置しているが、同丘陵は往時、「常総の内海」に浮かぶ小島であったとみられる。浅間塚古墳は、墳丘長約84mの前方後円墳で、利根川下流低地や北浦との結節点にあたる霞ヶ浦の南端部に位置する（茂木ほか 1980）。採集された埴輪の特徴（塙谷 2002）や狭長な前方部の形態から、同古墳の年代は前期後葉に求められる。

2-6 利根川下流域

現在の利根川下流低地が広大な水域の一部であったことは冒頭に述べたとおりであるが、その沿岸域にも前期古墳の存在が認められる。

利根川下流域の北岸側には、稻敷市東大沼古墳〔54〕と龍ケ崎市桜山古墳〔53〕が知られている。東大沼古墳は、墳丘長約26mの前方後方墳とされるが（茂木 1987）、詳細な年代を知る手がかりは得られていない。桜山古墳は、墳丘長71.2mの前方後円墳で、発掘調査により出土した柳葉式鉄鏡の特徴から、前中期頃の年代が与えられる。

利根川下流域の南岸側にあたる千葉県域にも、前期古墳の存在が知られている。成田市大日山1号墳〔57〕は、墳丘長約54mの前方後円墳で、発掘調査により確認された木炭櫛から短剣や鉄斧などが出土している（市毛ほか 1971）。それらの特徴や短く低い前方部の形態から、その築造年代は前期前半に遡る可能性がある。大日山1号墳よりも下流側に位置する香取市大戸天神台古墳〔56〕は、墳丘長約62mの前方後円墳である（萩原・白井 1999）。測量調査により把握された狭長な前方部の形態は、その築造年代が前期後半の範囲にあることを示している。

以上のほか、利根川下流低地をさらに上流側に遡った現在の手賀沼や印旛沼の沿岸にも、我孫子市水神山古墳〔62〕や柏市北ノ作1・2号墳〔60・61〕、佐倉市飯合作1・2号墳〔58・59〕などの前期古墳が存在する。

2-7 北浦沿岸

北浦沿岸には、東岸南部と東岸中部及び北部に流入する巴川の流域に前期古墳の存在が認められる。

霞ヶ浦沿岸に比べて北浦沿岸の前期古墳は数少ないが、東岸南部に位置する鹿島市お伊勢山古墳〔21〕は、墳丘長約95mの前方後円墳で、美浦村愛宕山古墳と並んで、対象地域内では最大の規模をもつ（茂木・片山 1975、茂木 1988）。それに加えて、「常総の内海」と外海（太平洋）の結節点に位置する古墳としても注目される。時期を特定する明確な資料は得られていないが、低く狭長な前方部の形態は、同古墳の築造年代が前期後半に遡ることを示している。

北浦東岸中部には、鉢田市大峰山1号墳〔19〕、同大峰山5号墳〔20〕の存在が知られている。大峰山5号墳は、墳丘長約45mの前方後円墳で（早稲田大学考古学研究会 1980・田口ほか 1983）、発掘調査により出

土した鉄劍や土器類の特徴から、前期後葉の築造と考えられる。大峰山1号墳は、大峰山5号墳に近接して存在する墳丘長約31mの前方後方墳である（田口ほか1983）。年代を特定する手がかりは乏しいが、墳形の評価から、大峰山5号墳に先行して築かれたものとみるのが妥当であろう。

北浦北部に流入する巴川の下流域には、鉢田市大上1号墳〔17〕、同大上4号墳〔18〕が存在する。ともに前方後方墳で、大上1号墳は墳丘長約31m、大上4号墳は墳丘長約45mを測る（茂木ほか1984b）。発掘調査が行われた大上4号墳からは壺や甕が出土しており、前期後葉の築造年代が考えられる。大上1号墳は、年代を特定する資料に恵まれないが、大上4号墳とはほぼ同じ時期か、それに先行して築かれた可能性がある。

2-8 周辺地域

本稿で主に取り上げる地域の周辺にも重要な前期古墳の存在が認められる。

その中でとくに注目すべきは、小貝川中流域の低地部に位置する筑西市葦間山古墳〔43〕である。同古墳は、前方部の前半部がすでに失われているが、周囲の地割りなどから判断すると、その墳丘長は141m程度に復元できる（三木1991）。発掘調査は行われていないが、これまでに多数の壺形埴輪や円筒埴輪の破片が採集されている（田中2008）。関東屈指の規模をもつ前期前方後円墳として、その築造年代が問題となるが、ここでは、初期の円筒埴輪を伴う桜川市長辯寺山古墳に先行する前期後半の範疇で理解しておきたい。この葦間山古墳に近い台地上には、筑西市灯火山古墳〔42〕が存在する。墳丘長約70mの前方後円墳で（漸谷1990）、発掘調査により出土した壺形土器の特徴から葦間山古墳に後続する時期の築造が想定される。

小貝川よりもさらに西側を南流する鬼怒川の中流域には、前期古墳がまとまって認められる。常総市六所塚古墳〔46〕（墳丘長約70m）と同東山塚古墳〔47〕（墳丘長約72m・消滅）は、ともに前期の前方後円墳とみられるが、詳しい調査は行われていない。壺形埴輪が採集されている八千代町香取神社古墳〔48〕は、墳丘長約70mの前方後円墳とみられ（白石・谷中1991）、その北西に位置する下妻市柴崎1号墳〔49〕（前方後円墳・墳丘長約65m）、同柴崎2号墳〔50〕（前方後方墳・墳丘長約55m）とともに、前期の段階に相次いで築かれたものと考えられる。これらの古墳よりもさらに上流側には、筑西市関本桜塚古墳〔51〕が存在する。

現状は、直径約30mの円丘部を残すのみであるが、本来は墳丘長約50mの前方後円墳であったとみられている（茂木1986）。採集された壺形土器の特徴から、その年代は前期後葉と考えられる。

3 墳丘形態の検討

3-1 墳丘形態の分類

ここでは、前節で取り上げた前期前方後円墳の墳丘形態について検討し、墳丘形態の共有関係を把握することをつうじて、対象地域における古墳時代前期後半段階の首長間関係について考えてみたい。

対象地域における大型古墳の墳丘形態については、すでに多くの研究成果が蓄積されており、墳丘企画論にもとづく分析（上田1985・茂木1985）や、茨城県内における特徴の把握（田中・日高1996、日高1998）、畿内大型前方後円墳との比較にもとづく「中央型」と「地方型」の評価（塩谷2000）などが行われている。ここでは、そうした先駆の成果に学びつつ、その後の調査で得られた所見などを加味しながら検討を進めてみたい。

そこで、まず直面するのは、検討対象とする前方後円墳の大半において墳丘の細部を把握するための発掘調査が実施されていないという現状である。したがって、ここでの検討は、あくまでも現状認識にもとづく測量図からの判断に多くを依拠するものであり、全面的な規格論の展開には至らない。こうした実情をふまえ、本稿では、対象地域における前期前方後円墳の墳丘形態について、以下の分類を採用する。

I類：くびれ部が狭く、前方部が短く広がるもの。

前方部長／後円部径 = 0.6 ~ 0.7 程度、前方部幅／後円部径 = 0.5 ~ 0.6 程度。

II類：くびれ部が広く、前方部が短く広がるもの。

前方部長／後円部径が 0.6 程度、前方部幅／後円部径が 0.7 前後。

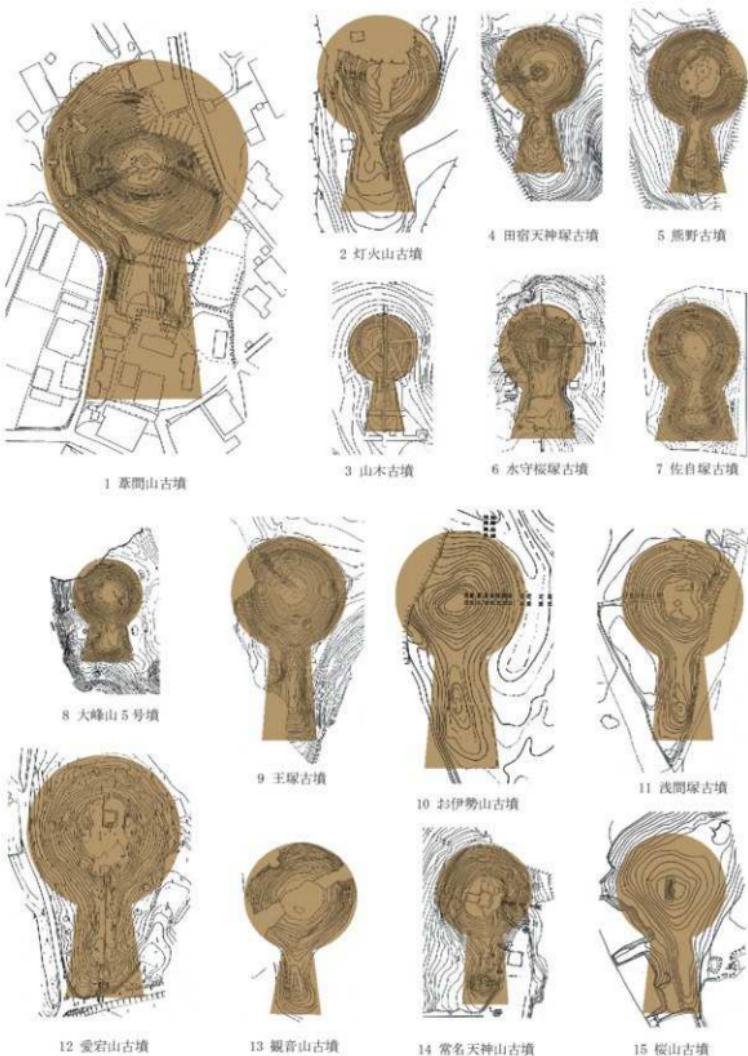
III類：前方部が極端に細長く直線的なもの。

前方部長／後円部径が 0.8 ~ 0.9 程度、前方部幅／後円部径が 0.4 ~ 0.6 程度。

IV類：前方部が細長く直線的なもの。

前方部長／後円部径 = 0.7 前後、前方部幅／後円部径 = 0.5 程度以下。

なお、以上の分類において指標とした墳丘の平面形態に関する個別のデータ（数値）は、表1に示したとおりである。

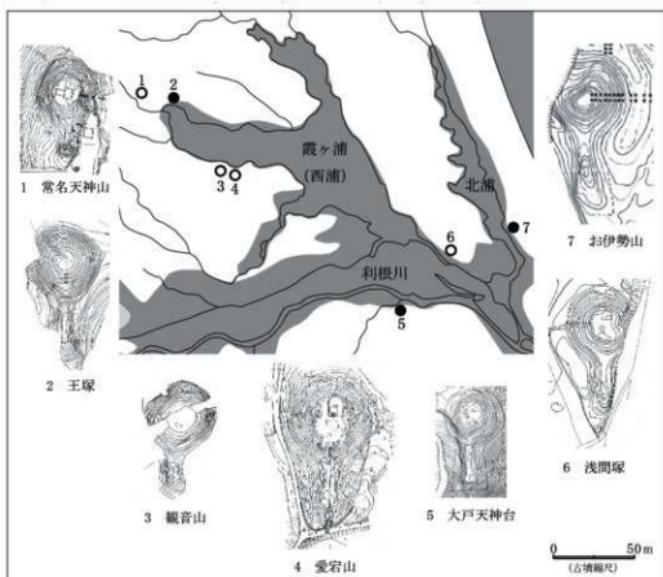


第2図 露ヶ浦沿岸とその周辺の前期前方後円墳 (1/2,000)

3-2 形態別の分布

前項の分類にもとづいて形態別の分布を整理する
と、いくつかの特徴的な傾向を認めることができる。
まず、田宿天神塚古墳(第2図4)と熊野古墳(第
2図5)を典型例とするI類は、対象地域の南半部に

は認められないという特徴を指摘することができる。
加えて、山木古墳(第2図3)や草間山古墳(第2図1)、
灯火山古墳(第2図2)もI類に該当するとみるなら
ば、その分布は露ヶ浦沿岸の北半部からさらに北側に
かけての桜川流域や小貝川流域に及ぶことになる。



第3図 霞ヶ浦沿岸とその周辺におけるIII類（●）・IV類（○）の前方後円墳

(地図：1:500,000、古墳：1:3,000。網掛けは、推定される古墳時代の水域。)

II類の事例は限られているが、幅広いくびれ部はきわめて特徴的で、その判別は比較的容易である。桜川中流域の水守桜塚古墳（第2図6）、恋瀬川上流域の佐自塚古墳（第2図7）、北浦東岸中部の大峰山5号墳（第2図8）が該当し、地域的なまとまりをみせず、散在する点に特徴が認められる。この点については、やや離れた位置にある利根川中流域の坂東市上出島2号墳[52]（墳丘長約56m、岩井市教育委員会1976）が同様の墳丘形態をもつとみられることも注目される。

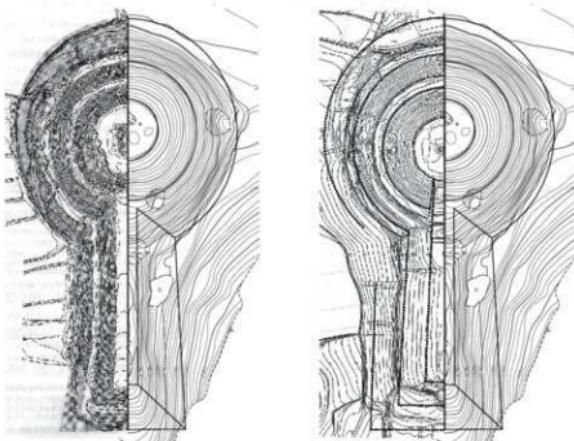
以上のI・II類とは対照的に、III類とIV類は、霞ヶ浦沿岸に分布する傾向が明らかである（第3図）。III類とIV類の分類は、墳丘長に占める前方部の長さによるもので、その有効性をことさらに主張するものではないが、前方部が極端に細長いIII類はかなり特徴的で、王塚古墳（第2図9）、お伊勢山古墳（第2図10）、大戸天神台古墳がそれに該当する。また、現状の認識から、III類に比べてやや前方部が短いと判断されるIV類には、浅間塚古墳（第2図11）、愛宕山古墳（第2図12）、観音山古墳（第2図13）などが含まれる。それらはいずれも、土浦入りを中心とした霞ヶ浦沿岸に

分布し、桜川下流域に位置する常名天神山古墳（第2図14）がそれに加わるとしても、分布の傾向に大きな変化はない。

以上に述べた形態別の分布傾向がどのような要因によって生じたのかについては、個々の古墳の実事関係をみきわめる作業と同時に、さらに広い範囲の資料を対象とした比較検討が必要である。そうした課題を今後に残しつつも、墳丘形態の分布傾向にみられる特徴は、それらの古墳に葬られた有力首長どうしの関係を何らかのかたちで反映している可能性が高い、との想定に立脚した議論を多少なりとも進めておくことは、けっして無意味なことではないだろう。次項では、霞ヶ浦沿岸に特徴的な分布を示すIII類及びIV類に焦点をあて、それらが成立した背景について現時点での見通しを述べておくことにしたい。

3-3 「桜井茶臼山系列」の前方後円墳

そもそも、III類のように極端に細長い前方部を系譜は、どこに求められるのか。この点については、王塚古墳について近年実施した測量調査の成果にもとづいて検討したことがある（滝沢2017）。そこでも述べた



第4図 王塚古墳(左:1/1,000)と桜井茶臼山古墳(左:1/2,321)・メスリ山古墳(右:1/2,798)

ように、王塚古墳にみられるような、きわめて特徴的な前方部を有する前方後円墳は、列島規模に視野を広げてもかなり限定的な存在であり、それは、畿内大型前方後円墳の研究において指摘されている「桜井茶臼山系列」(澤田 2005)との共通性をうかがわせるものである。

「桜井茶臼山系列」は、大和東南部に相次いで築かれた、桜井茶臼山古墳(墳丘長約195m)、メスリ山古墳(墳丘長約235m)、渋谷向山古墳(墳丘長約300m)の3古墳に代表される墳丘形態であり、後円部3段・前方部2段の墳丘構造を共有する点においても、箸墓系列(主系列)とは異なる設計原理をもつ。また、桜井茶臼山古墳については、京都府椿井大塚山古墳(墳丘長約175m)や大阪府忍岡古墳(墳丘長約90m)との相似関係が指摘されるとともに(岸本 2005)、静岡県寺谷銚子塚古墳(墳丘長約108m)や東京都宝菜山古墳(推定墳丘長97.5m)といった東日本諸古墳との相似関係も指摘されている(藤原 2005)。

王塚古墳の墳丘形態については、これまでいくつかの見解が示されているが(茂木 1988・塙谷 2000)、「桜井茶臼山系列」をめぐる近年の研究成果をふまえるならば、王塚古墳に代表されるIII類の墳丘形態は、「桜井茶臼山系列」の影響下に成立した可能性が高いと考えられる。そして、立面形態を含めた細部の比較によれば、王塚古墳の墳丘形態は、後円部上段斜面長の増大を特徴とするメスリ山古墳(澤田 2000・岸本 2008)

など)との近似性が高いと判断される(第4図)。

以上の理解をふまえた上で次に問題となるのは、III類とIV類の関係である。この両者は、幅が狭く直線的な前方部を備えている点や、後円部上段が前方部から独立している点で共通し、類縁的な関係にあるとみられる。現状では、両者の具体的な関係を裏付けるための資料に乏しいが、「桜井茶臼山系列」との関係をより直接的にうかがわせるIII類(王塚古墳)との比較から判断すれば、IV類はIII類から派生した墳丘形態とみるのが妥当ではないだろうか。

3-4 墳丘形態からみた首長間関係

III類の系譜やIII類とIV類の関係については、今後さらに検証を重ねていかなければならないが、上記のような理解の方向性に大きな誤りがないとすれば、霞ヶ浦沿岸を中心とした「常總の内海」の中心域においては、各小地域を基盤とする古墳時代前期後半段階の有力首長どうしが、奥津城の墳丘形態を相互に共有するような親密な関係を構築していたことになる。この点は、III・IV類と一部で分布域を重複しながら、より北側の地域に分布するI類についても、同様の指摘が可能である。

本稿で対象とした地域では、『常陸國風土記』が伝える国造のクニの範囲と後期・終末期古墳の存在形態を重ね合わせた議論が盛んである。そうした議論の有効性は大いに認められるが、その姿は、列島規模で展

開した古墳時代中期における伝統的首長系譜の断絶とそれに伴う広域大首長の出現、その後につづく広域大首長勢力の解体と新旧首長系譜の台頭・復活という経過のもとに生じたものとみられる（瀧澤 2015）。そうした認識に立つならば、その前史をなす古墳時代前期の状況を視野に入れた議論は不可欠であり、今回検討した前期前方後円墳にみられる墳丘形態の地域的なまとまりは、そうした議論に重要な視座を提供するものとなろう。

すなわち、霞ヶ浦沿岸とその周辺における前期古墳のあり方は、一定地域の有力首長どうしを結びつける政治圏が古墳時代前期にはすでに形成されていたことを物語るものとみられる。同時に、そうした政治圏の形成にあたり、広大な内海を利用した水上交通がきっかけで重要な役割を果たしていたであろうことは、容易に想像できる。さらに付け加えるならば、太平洋岸域に多いとされる「桜井茶臼山系」の展開は、太平洋岸ルートをつうじたヤマト王権による地方支配の伸張と関係があり（藤原 2005）、霞ヶ浦沿岸に分布するⅢ類（及びⅣ類）は、さらに北方世界へと通じるルートの結節点として広大な内海域の掌握が重視されていたことを意味するものであろう。

ここでは、墳丘形態に焦点をあてて検討を行ったが、こうした議論をさらに深めるためには、出土遺物（副葬品・埴輪など）を含めた総合的な検討を進めていく必要があることは言うまでもない。

4 古墳の立地と視認性

4-1 前期古墳の立地

前節での理解をさらに深めるため、ここでは、対象地域における前期古墳の立地とその視認性について検討を加えてみたい。

前方後円墳や前方後方墳のように、主軸方向に沿って平面的な対称構造をもつ墳墓の正面観については、これまでにさまざまな議論がある。そこでは、墳丘の主軸方向を埋葬頭位や正方位との関係でどのように決定するのかという、方位原則をめぐる議論も重要な鍵となる。

ここでは、そうした議論をひとまず先送りにし、対象地域の前期古墳がどのような場所に立地し、どこから見ればその規模や形態をもっとも実感できるのかという視認性の問題について考えてみたい。

築造当時の立地環境が後世に変更され、周囲の地形

環境が大きく変わっている点を十分に考慮できていない可能性を恐れつつも、当面の整理を試みるならば、対象地域内に所在する前期古墳の立地は、以下の6つの類型に分類される。

- A類：**直下の低地や水域を望む台地の縁辺部に立地し、台地縁辺部に対して墳丘の主軸方向が直交するもの。
- B類：**直下の低地や水域を望む台地の縁辺部に立地し、台地縁辺部に対して墳丘の主軸方向が平行するもの。
- C類：**舌状台地のように突き出した台地の先端部に立地するもの。
- D類：**周囲よりも高く独立した地形の頂部に立地するもの。
- E類：**平坦な低地部に立地するもの。
- F類：**台地上ではあるが、縁辺部から離れた位置に立地するもの。

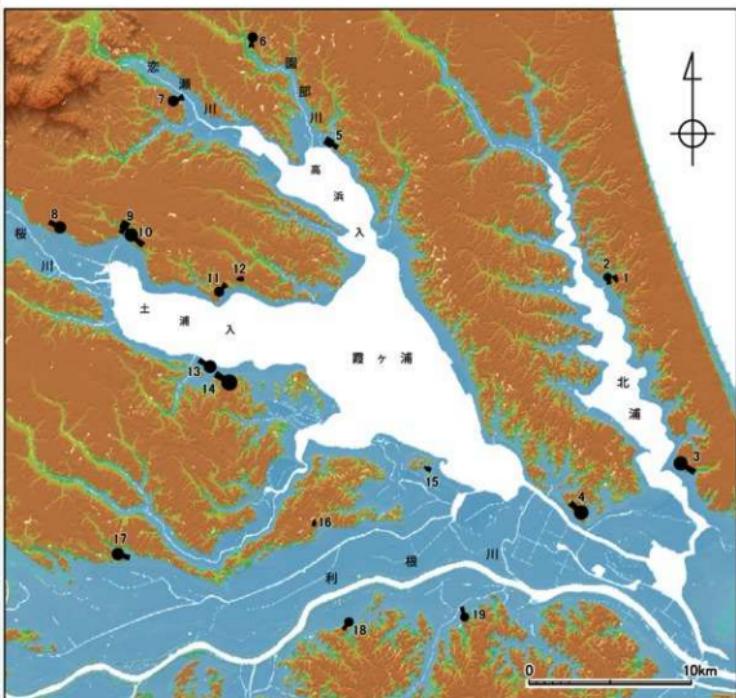
以上のうち、A類には、后塚古墳や丸山1号墳が該当し、B類には、王塚古墳をはじめとする多数の事例が認められる。また、C類には桜山古墳、D類には原1号墳、E類には華間山古墳、F類には大峰山5号墳や赤塚古墳が該当する。

4-2 古墳の視認性をめぐって

古墳が当時の人々にとってどのように見えたのか、あるいは造営者側の意図としてどのように見せたかかったのかという点は、視認者との位置関係に左右される問題であり、一律に理解することは難しい。ただし、前方後円墳や前方後方墳が高い墳丘を築いている点に共通した指向性を認めるならば、より高さが強調される低地部からの視認性は、重要な意味を持っていた可能性があろう。

そうした観点から、前項の分類結果を振り返ると、F類は、低地部からの視認が不可能な立地であることに加えて、該当事例のすべてが墳丘長30m程度以下の前方後方墳である点が注意される。つまり、F類の事例は、より広い範囲からの視認性を意識した立地や規模とは言えないものである。それに対して、A類は低地部からの視認性が確保されたものと言えるが、低地部側からは、その墳丘形態を明確にとらえることができない。これら2つの類型は、低地部からの視認性がまったく考慮されていないもの、または、存在のみの確認にとどまるものと言えそうである。

B類からE類までの事例は、いずれも低地部からの



第5図 霞ヶ浦沿岸とその周辺における前期古墳の立地

1 大峰山1号 2 大峰山5号 3 お伊勢山 4 浅間塚 5 勅使塚 6 羽黒 7 熊野 8 常名天神山 9 后塚 10 王塚 11 田宿天神塚 12 赤塚 13 観音山 14 愛宕山 15 原1号 16 東大沼 17 桜山 18 大日山1号 19 大戸天神台
(国土地理院・基盤地図情報5mメッシュより作成。水色で示した部分は標高5m以下。)

視認性が確保され、その存在とともに墳丘規模を確認することが可能な類型である。もちろん、B類以外の類型については、視認者の位置によって見え方がある異なるので、その点についての細かな検証も必要である。ただし、対象地域にもっとも多く見られるのはB類であり、とくに霞ヶ浦沿岸における前方後円墳の多くがそれに該当することは注目に値する。

第5図は、霞ヶ浦沿岸における前期古墳の立地を模式的に示したものである。この図からうかがえるように、霞ヶ浦沿岸に限ってみれば、前期前方後円墳のすべてがB類に該当し、水域に平行する方向の台地縁辺部に主軸をおいて築かれている。他方、事例は少ないものの、前方後方墳はA類またはF類の事例が多く、例外となるのは、原1号墳(D類)と勅使塚古墳(B類)のみである。ただし、勅使塚古墳は、前方後方墳とし



第6図 王塚古墳と后塚古墳 (1/6,000)

ては後出的な存在であり、その狭長な前方部の形態には、III類前方後円墳との関係もうかがえる。

以上のような観点でみると、霞ヶ浦沿岸の前期古墳には、低地部からの視認性に対する意識が低い前方後方墳と、低地部からの視認性を強く意識した前方後円墳という明確な対比が認められる。この点は、同じ台

地上に近接して築かれた、后塚古墳と王塚古墳の立地に典型的な姿を見ることができる（第6図）。

もとより、前方後方墳に比べて相対的に規模の大きい前方後円墳では、その造営技術や地形的な制約の中で台地縁辺部への立地が求められたとの見方もある。しかしながら、東日本の前期古墳では、墳丘主軸に対して平行または直交する埋葬施設が一般的であり（小林 1989）、茨城県域では北頭位、千葉県域では東頭位が卓越するという指摘もある（岩崎 1983）。それらの点をふまえるならば、少なくとも霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳では、埋葬施設の平行直交原則か、埋葬頭位原則（正方形原則）のいずれかが実現されていない状況にあると考えざるを得ない。埋葬施設の確認事例が乏しいため、これ以上の議論は困難であるが、こうした理解の先に、水域からの視認性をとりわけ重視した造営意識の存在を見出すことも不可能ではないだろう。

やや憶測を含んだ議論であることは否めないが、霞ヶ浦沿岸における前期古墳の立地と視認性に関する整理からは、とくに前方後円墳において水域に対する強い造営意識がうかがえる。おそらくそれは、対象地域において多くの前方後円墳が築かれるようになった前期後半段階に至り、水上交通の重要性がより高まったことを背景とするものであろう。

5 成果と課題

本稿では、霞ヶ浦沿岸とその周辺における前期古墳を取り上げ、主に墳丘形態と立地についての検討を試みた。得られた成果は限られているが、墳丘形態の検討からは、霞ヶ浦沿岸を中心に特徴的な前方部形態をもつ前方後円墳が分布していることを明らかにし、その背景として、水域をつうじて親密に結びついた首長どうし関係を想定した。また、立地をめぐる検討では、低地部からの視認性という点に着目して整理を試み、視認性に対する意識が低い前方後方墳と、視認性を強く意識した前方後円墳という対比の中に、前方後円墳築造段階における水上交通の重要性を見出した。

もちろん、ここで検討結果は、あくまでも対象地域における分析の中から得られたものであり、地域を越えてただちに普遍化できるものではない。しかしながら、前期古墳の立地と視認性をめぐる議論は、近年注目を浴びている「海浜型前方後円墳」（かながわ考古学財団編 2015など）の議論とも密接なかかわりを

もつものと考えられる。

おそらく、霞ヶ浦沿岸における前期前方後円墳の盛行は、前期後半に顕著となる「海浜型前方後円墳」の展開を大きな背景として理解し得るものであり、そこに内海、外海をつうじた水上交通の重要性を指摘することに大きな異論はないだろう。一方で、「海浜型前方後円墳」の典型例としてしばしば取り上げられる神奈川県長柄桜山1号墳（墳丘長91.3m）・同2号墳（墳丘長88m）は、三浦半島西岸の海浜部に立地するという側面とともに、三浦半島を横断する陸路の要所に位置するという側面も見過ごすことはできない。

長柄桜山1号墳では、陸路側にあたる墳丘の西側を入念に作り出すという非対称構造が認められる（佐藤・山口 2012）。これと同様の構造は、筆者が調査を進めている静岡県蘿草山古墳にも認められ、同古墳は伊豆半島の基部を横断する陸路に面した墳丘西側のみを大きく作り出している（竜沢・山下・河嶋 2018）。これらの調査成果を重視するならば、前期後半に盛行する「海浜型前方後円墳」の被葬者については、たんに水上交通の統括者という側面にとどまらず、水路と陸路の結節点を支配した首長という性格を多分に考慮しておく必要があるだろう。

今回取り上げた霞ヶ浦沿岸とその周辺における前期古墳についても、上記のような観点をふまえて再評価を進めることが肝要であり、今後は陸路との関係にも十分配慮した検討が求められる。その先には、古墳時代における「常総の内海」の意味をあらためて問い合わせすべき作業が必要となるが、そこでは、隣接する「武総の内海」にとどまらず、相模湾や駿河湾までをも視野に入れた議論を進めることが重要であろう。相模湾と駿河湾は「内海」という定義になじまない部分もあるが、東日本の古墳時代研究における「2つの内海論」から「4つの内海論」への展開は、今後の議論を切り拓く重要な鍵になるものと考えている。

参考文献

- 石田温美・齊木 誠・荒井敦汰 2018『土浦市后塚古墳の測量調査』『筑波大学先史学・考古学研究』29
- 市毛 热ほか 1971『千葉県香取郡下総町大日山古墳』大日山古墳調査団
- 市村高男 2007『内海論からみた中世の東国』『中世東国の内海世界』高志書院
- 岩井市教育委員会 1976『上出島古墳群』
- 岩崎卓也 1983『古墳時代の信仰』『季刊考古学』2

- 上田宏範 1985 「前方後円墳における築造企画の展開 その5 一型式分類からみた常陸の前方後円墳」『末永先生米壽記念文献論文集 乾』末永先生米壽記念会
- 大竹房雄ほか 1981 『塙原古墳群第1号墳（観音山古墳）調査報告書』美浦村教育委員会
- 大塚初重 1964 『茨城県勘使塙古墳の研究』『考古学集刊』2-1 3
- 大村冬樹 2010 『茨城県かすみがうら市所在牛塙古墳の測量調査報告』『筑波大学先史学・考古学研究』21
- 大橋泰夫・萩 悅久・水沼良浩 1984 『常陸長辺寺山古墳の円筒埴輪』『古代』77
- かながわ考古学財団編 2015 『海浜型前方後円墳の時代』同成社
- 蒲原宏行・松尾昌彦 1982 『桜塙古墳』『筑波古代地域史の研究』筑波大学
- 上川名 昭ほか 1972 『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会
- 岸本直文 2005 『桜井茶臼山古墳の歴史的位置』『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告2
- 岸本直文・澤田秀実編 2005 『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告2
- 岸本直文 2008 『メスリ山古墳と政祭分権王政』『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告3
- 岸本直文・所 桢編 2008 『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告3
- 久保純子 2007 『「常統の内海」香取平野の地形と歴史時代における環境変遷』『中世東国の内海世界』高志書院
- 小出 博 1975 『利根川と淀川』中公新書
- 後藤守一 1957 『常陸丸山古墳』山岡書店
- 小林隆幸 1989 『前期古墳の埋葬頭位』『保内山王山古墳群』三条市教育委員会
- 財団法人茨城県教育財团 1990 『桜山古墳』茨城県教育財团文化財調査報告61
- 斎藤文紀・井内美郎・横田節哉 1990 『霞ヶ浦の地史：海水準変動に影響された沿岸湖沼環境変遷史』『地質学論集』36
- 佐々木憲一編 2018 『霞ヶ浦の前方後円墳—古墳文化における中央と周縁—』明治大学文学部考古学研究室
- 佐自塙古墳調査団 1963 『佐自塙古墳調査概要』
- 佐藤仁彦・山口正憲 2012 『国指定史跡長柄塙山古墳群第1号 墳発掘調査報告書』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- 澤田秀実 2000 『墳丘形態からみた美作諸古墳の編年的位置づけ』『美作の首長墳—墳丘測量調査報告ー』吉備人出版
- 澤田秀実 2005 『桜井茶臼山古墳築造企画の成立過程』『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告2
- 三木ますみ 1991 『幕間山古墳』『古墳測量調査報告書I』筑波大学歴史・人類学系
- 塙谷 修 2000 『霞ヶ浦沿岸の前方後円墳と築造規格』『常陸の前方後円墳（1）』茨城大学人文学部考古学研究報告3
- 塙谷 修 2002 『潮来市浅間塙古墳』『常陸の円筒埴輪』茨城大學人文学部考古学研究報告5
- 塙谷 修 2018 『霞ヶ浦の古墳時代 内海・交流・王權』高志書院
- 白井久美子 2002 『古墳から見た列島東縁世界の形成』千葉大学考古学研究叢書2
- 白石典之・谷中 隆 1991 『香取神社古墳』『古墳測量調査報告書I』筑波大学歴史・人類学系
- 鈴木哲雄 2005 『中世関東の内海世界』岩田書院
- 瀬谷昌良 1990 『灯火山古墳確認調査報告書』明野町教育委員会
- 高橋聰朗 1990 『美浦村の古墳と古墳群』『美浦村史研究』6 美浦村史編さん委員会
- 滝沢 誠 2015 『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社
- 滝沢 誠 2017 『霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳—土浦市塙古墳の測量調査—』『筑波大学先史学・考古学研究』28
- 滝沢 誠ほか 2014 『つくば市水守桜塙古墳 2012年度発掘調査概要』『筑波大学先史学・考古学研究』25
- 滝沢 誠ほか 2015 『つくば市水守桜塙古墳 2013年度発掘調査概要』『筑波大学先史学・考古学研究』26
- 滝沢 誠・山下優介・河嶋優輝 2018 『伊豆半島における前方後円墳の調査—静岡県飯田町瓢箪山古墳 2016・2017年度調査の概要—』『筑波大学先史学・考古学研究』29
- 田口 崇ほか 1983 『大峰山古墳群調査報告書』大洋村教育委員会
- 田中新史 2008 『点景をつなぐ—古墳踏査による常統古式古墳の理解—』『土筆』10 土筆舎
- 田中 裕 1997 『茨城県千代田町熊野古墳の測量調査』『筑波大学先史学・考古学研究』8
- 田中 裕 2012 『古墳と水上交通—茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して—』『シンポジウム東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』東北・関東前方後円墳研究会
- 田中 裕ほか 2018 『茨城県中央部の古墳調査』茨城大学人文社会科学部考古学研究報告12
- 田中 裕・日高 慶 1996 『茨城県出島田村宿天神塙古墳の測量調査』『筑波大学先史学・考古学研究』7
- 筑波町史編纂専門委員会編 1989 『筑波町史上巻』筑波町西宮一男 1969 『常陸孤塙古墳』岩瀬町西宮一男 1974 『長辺寺山古墳』『茨城県史料 考古資料編 古墳

- 時代』茨城県史編さん原稿古代史部会
- 萩原恵一・白井久美子 1999『佐原市大戸天神台古墳測量調査報告』『千葉県史研究』7
- 日高 慎 1998『茨城県 前期古墳から中期古墳へ』『シンポジウム 前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会
- 藤原知広 2005『桜井茶臼山古墳の類型填』『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告2
- 茂木雅博 1985『常陸の前方後方墳』『國學院大學考古学資料館紀要』2
- 茂木雅博 1986『鬼怒川中流域における古墳文化の展開』『関町の歴史』6 関町史編さん委員会
- 茂木雅博 1987『墳丘よりみた出現期古墳の研究』雄山閣
- 茂木雅博 1988『常陸の初期前方後円墳』『考古学叢考 下巻』吉川弘文館
- 茂木雅博・片山 洋 1975『常陸伊勢山古墳の墳形について』『古代研究』76
- 茂木雅博ほか 1976『常陸浮島古墳群』浮島研究会
- 茂木雅博ほか 1980『常陸観音寺山古墳群の研究』茨城大学人文学部史学第5研究室
- 茂木雅博ほか 1984a『土浦の遺跡』土浦市教育委員会
- 茂木雅博ほか 1984b『大上古墳群第4号墳発掘調査報告』鉢田町史編さん委員会
- 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991『土浦市における古墳の測量』『博古研究』創刊号 博古研究会
- 山田俊輔 2017『古墳時代後期の「常総の内海」と埴輪』『埴輪研究会誌』21
- 早稲田大学考古学研究会 1980『大峰山5号墳測量調査報告』『金鈴』22
- 早稲田大学考古学研究室 1973a『常陸における古墳の測量調査』『古代』56
- 早稲田大学考古学研究室 1973b『福田古墳群第9号墳・長堀古墳群第2号墳・柏崎古墳群富士見塚古墳の測量調査』『茨城考古学』5

- 第3図 以下に示す各文献の掲載図を改変して作成。(茂木・水野・長洲 1991)、(滝沢 2017)、(大竹ほか 1981)、(高橋 1990)、(萩原・白井 1999)、(茂木ほか 1980)、(茂木 1988)。
- 第4図 (滝沢 2017)、(岸本・澤田編 2005)、(岸本・所編 2008) の掲載図を改変して作成。
- 第5図 国土地理院・基盤地図情報 5m メッシュより生成した地図をもとに筆者作成。
- 第6図 (滝沢 2017) 第2図を改変して作成。
- 表1 各報告のデータをもとに作成。

図表出典一覧

- 第1図 地理院地図をもとに筆者作成。
- 第2図 以下に示す各文献の掲載図を改変して作成。1:(三木 1991)、2:(瀬谷 1990)、3:(上川名ほか 1972)、4:(田中・日高 1996)、5:(田中 1997)、6:(滝沢ほか 2013)、7:(佐々木編 2018)、8:(田口ほか 1983)、9:(滝沢 2017)、10:(茂木・片山 1975)、11:(茂木ほか 1980)、12:(高橋 1990)、13:(大竹ほか 1981)、14:(茂木・水野・長洲 1991)、15:(財團法人茨城県教育財团 1990)。

結言—本書の成果と今後の課題—

本書では、埼玉県東松山市に位置する野本将軍塚古墳の三次元測量・GPR 調査の成果を基にして、同古墳の年代と地域の中における位置、さらには東日本における前期古墳の歴史的意義を考古学的に考究するため、12人の研究者による多角的な研究論文を掲載した。その成果を簡単に総括するのは難しいが、野本将軍塚古墳、あるいは東国における前期古墳を考える基礎的な作業として、今後、本論集は重要な役割を果たすと考える。ここでは、各論者の研究成果を簡単にまとめ、今後の研究の方向性について、若干整理しておく。

城倉論文 野本将軍塚古墳の墳丘の立体構造と設計原理を分析した。結果、設計原理の共通性から、メスリ山古墳の系譜を引く可能性を指摘し、前期後半でも早い段階の年代を想定した。

北條論文 野本将軍塚古墳の方位を、周辺遺跡との関係で位置付けた。主軸線南北に等距離で対峙する五領遺跡と反町遺跡、さらには周辺古墳との有機的関係性を指摘した。

石橋論文 東日本における礎構造を持つ埋葬施設の集成・分類を行い、野本将軍塚古墳の礎構造を位置付けた。東国における埋葬施設の独自性と礎構造の創出が密接に関連する点を指摘した。

福田・青木論文 比企地域における前方後方墳及び集落出土土器を分析した。また、野本将軍塚古墳で表採された土器の年代などから、その造営を反町II-3期、すなわち4世紀後半と想定した。

加藤論文 関東の前期古墳鏡の中で、比企地域を位置付けた。比企は前期古墳鏡の流入が複数回認められる重要地域で、埼玉古墳群の造営母体となった集団が比企地域に由来する可能性を指摘した。

鈴木論文 尾張・三河・遠江・駿河・伊豆における前期古墳の動態を整理した。その結果、小地域内の統合を象徴する古墳分布の在り方を確認し、小地域を越えて影響力を持ちえた被葬者の存在も想定した。

小林論文 山梨県における古墳時代前期の土器編年を整理した上で、前期古墳の様相をまとめた。近年の発掘調査によって、山梨県における前期古墳の実態が明らかになりつつある。

若狭論文 上毛野と北武藏（比企）の前期古墳の様相を比較し、地域開発や首長権の成立、王権との関わりなど前期における「地域経営」という文脈での両地域

の共通性を指摘した。

伝田論文 南武藏における前期古墳の様相を整理した。その結果、北武藏・南武藏の前期古墳の動態の違いを指摘し、地理的条件や歴史的背景が異なる中でそれぞれが独自の支配領域を確立した点を指摘した。

田中論文 房総半島の前期古墳と集落の様相を整理し、前期後半段階で水上交通の掌握を基盤とする維続的首長権の成立があった点を指摘した。前期後半における房総一日光線分水嶺を越えて東北に向かう「フロンティア拡大」のダイナミックな現象を素描した。

達沢論文 千葉県と茨城県の境界に位置する「常総の内海」における前期古墳の分布を整理した。土浦市王塚古墳など、畿内（桜井茶臼山古墳系）との系譜関係を想定できる古墳を指摘すると同時に、水上交通で結びつく首長関係を示す墳丘の共通性も指摘した。

以上、本論集に掲載した論文の成果を概観した。もちろん、各論者の論点は多彩であるが、全体として現段階における東日本・東国における前期古墳の研究成果を総括する内容となっている。

野本将軍塚古墳は、前期後半段階（でも古い時期）の造営年代を想定でき、東海や関東各地で進む低地開発や大規模集落の形成と連動する現象である点が読み取れ、その背景に東へ膨張する「フロンティア拡大」や王権の影響力などが読み取れる。120mを超える野本将軍塚古墳は、前期後半の前方後円墳としては、東国でも有数の規模を誇るが、その造営の背景には、五領・反町遺跡が示すような地域社会の発展と「地域力の結集」が想定できる。東海、中部、関東の諸地域における事例分析でも明らかのように、前期古墳の展開過程からみる各地域社会の発展過程は、王権との関係や地理条件により多様な様相を示すが、前期後半における画期は広い地域で連動する可能性が高い。今後は地域間関係などのネットワークや詳細な年代も含めて、相互比較を進めていく必要がある。

野本将軍塚古墳が前期古墳と確定したこと、比企地域は中期における雷電山古墳など、後期の埼玉古墳群（大宮台地への進出）に向けての十分なバックグラウンドを保持する点が判明した。埼玉二子山古墳の成立を画期として大きく転換する北武藏の地域的動態が『日本書紀』安閑紀の武藏国造争乱の伝承と連動する可能性が十分に考えられるようになった。比企と埼玉の関係性と両地域の相克についても、今後は中後期を視野に入れて議論する必要がある。

編著者・執筆者一覧

【編著者】

城倉正祥 JOKURA Masayoshi (早稲田大学文学学術院)

【執筆者】

北條芳隆 HOJO Yoshitaka (東海大学)
石橋 宏 ISHBASHI Hiroshi (東北大)
福田 壽 FUKUDA Kiyoshi (埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
青木 弘 AOKI Hiroshi (埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
加藤一郎 KATO Ichiro (宮内庁)
鈴木一有 SUZUKI Kazumae (浜松市文化財課)
小林健二 KOBAYASHI Kenji (山梨県立考古博物館)
若狭 徹 WAKASA Toru (明治大学)
伝田郁夫 DENDA Ikuro (早稲田大学大学院文学研究科)
田中 裕 TANAKA Yutaka (茨城大学)
滝沢 誠 TAKIZAWA Makoto (筑波大学)

奥付

【シリーズ名】

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊

【タイトル】

野本將軍塚古墳と東国の前期古墳（のもとしょうぐんづかこふんととうごくのぜんきこふん）

【刊行年月日】

2018年12月9日

【編者】

城倉正祥

【執筆者】

城倉正祥・北條芳隆・石橋 宏・福田 壽・青木 弘・加藤一郎・鈴木一有・小林健二・若狭 徹
伝田郁夫・田中 裕・滝沢 誠

【表紙デザイン】

渡邊 琴 (早稲田大学大学院文学研究科)

【発行機関】

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

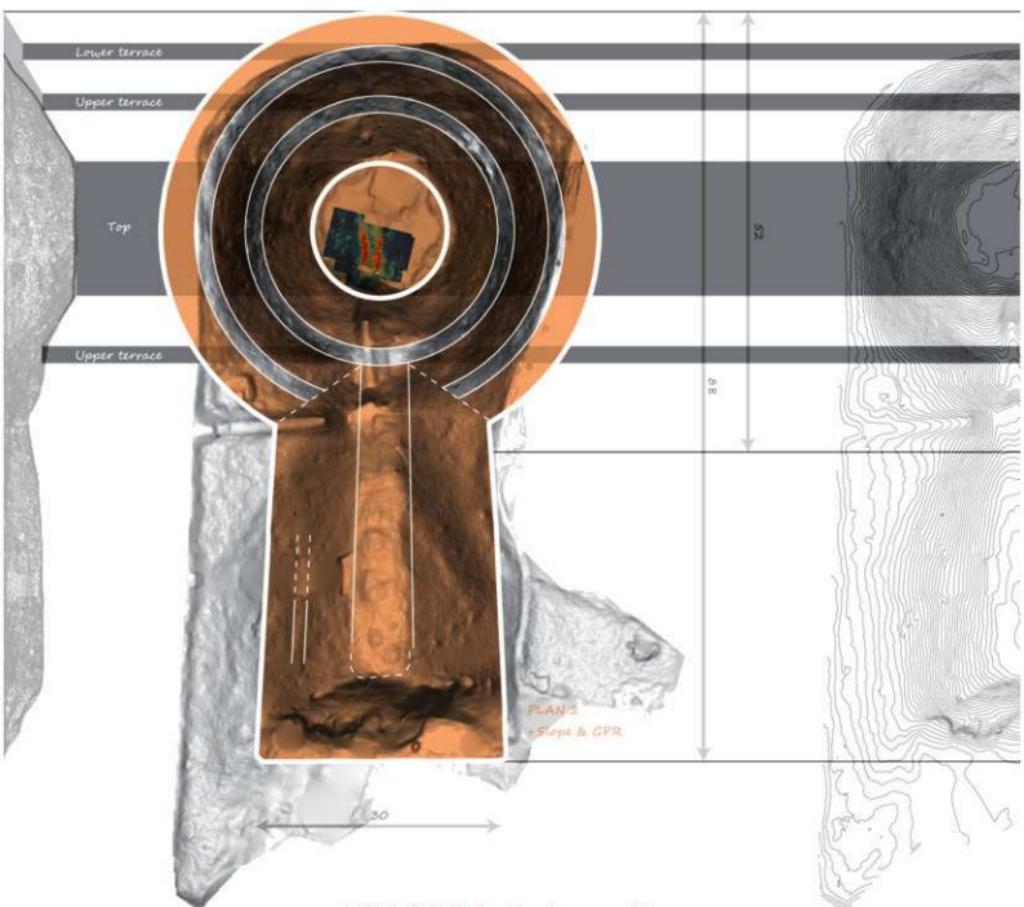
【印刷】

株式会社 正文社 (〒260-0001 千葉県千葉市中央区都町1-10-6)

Nomoto-Shogunzuka

The Eastern Part of Ancient Japan in Early Kofun Period

Edited by JOKURA Masayoshi



WASEDA University
Institute of East Asia Archaeology
for Walled City and Silk Road